行方市文化財調査報告 第6集

茨城県行方市

岩ノ入遺跡

発掘調査報告書

2008年10月

行方市教育委員会
行方市遺跡調査会

序

行方市は、茨城県の東南部に位置し、平成１７年９月２日に麻生町・北浦町・玉造町の３町が合併して誕生しました。人口約４万人、面積は、１６６.３３ｋ㎡になります。東は北浦、西は霞ヶ浦(西浦)の大きな湖に面しています。地形的には東西の湖岸部分は低地、内陸部は標高３０ｍ前後の丘陵台地「行方台地」で形成されており低地は水田、台地は畑地として利用されています。霞ヶ浦沿岸部は概ねなだらかなで連続的な稜線が見られるのに対し北浦側は屈曲、出入りが見られ比較的起伏に富んでいます。温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、古くより人々の生活の痕跡としての貝塚や古墳・城跡などの遺跡が数多く点在しております。

この度、行方市麻生字岩ノ入地内の土採取事業計画に伴い埋蔵文化財の確認調査を行ったところ、計画地内に古墳時代～平安時代の遺構が確認されました。開発事業者と取扱いについての協議を行なった結果、遺跡の現状保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査を行い記録保存を図ることになりました。

本書は、その岩ノ入遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることにより、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行までご協力、ご指導を賜った関係者並びに関係機関に対し深く感謝申し上げます。

平成２０年１０月

行方市教育委員会 教育長
行方市遺跡調査会会長
額　賀　　旭

例　言

1　本報告書は、茨城県行方市麻生字岩ノ入2772-2に所在する岩ノ入遺跡の発掘調査報告書である。
2　本調査は、株式会社ＹＡＳＵ（代表取締役　茂木康明）が計画した土採取事業に伴う記録保存の発掘調査で、対象面積は１１００㎡である。
3　調査は行方市遺跡調査会が茨城県教育庁文化課、行方市教育委員会の指導のもとに実施した。
4　調査は平成２０年３月２７日～６月２６日までの期間、合わせて５０日間実施した。
5　整理作業は平成２０年６月１６日～９月３０日まで行った。
6　行方市遺跡調査会組織は下記のとおりである。

会　長	額賀　旭	(行方市教育委員会教育長)
副会長	風間　亨夫	(行方市文化財保護審議会会長)
理　事	茂木　岩夫	(行方市文化財保護審議会副会長)
〃	植田　敏雄	(行方市文化財保護審議会委員)
〃	羽生　均	(　〃　)
〃	宮内　俊雄	(　〃　)
〃	山中　康雄	(　〃　)
〃	宮内　利夫	(　〃　)
〃	河野　勝雄	(　〃　)
〃	伊勢山雅昭	(　〃　)
〃	宮崎　幸男	(　〃　)
〃	大塲　浩一	(　〃　)
〃	飯田　俊彦	(　〃　)
〃	海老澤幸雄	(　〃　)
〃	茂木　康明	(株式会社ＹＡＳＵ)
監　事	高橋　量光	(行方市文化財保護審議会委員)
〃	高野　顕	(　〃　)
事務局長	宮本　正	(生涯学習課課長)
事務局員	内田　博明	(生涯学習課課長補佐)
〃	荒張　文枝	(　〃　文化振興Ｇ係長)
〃	平塚　喜昭	(　〃　文化振興Ｇ係長)
〃	塙　大	(　〃　文化振興Ｇ主任)
調査担当者	汀　安衛	(鹿行文化研究所)
調査員	徳利　初代	(　〃　)

7　本報告書の執筆は汀　安衛が行った。
8　出土遺物、図面、写真類は行方市教育委員会が保管する。

凡　例

1　本報告書の図面の縮尺は原則１／60、遺物は原則１／3とし水糸レベルは標高を表示した。
基準点の座標はＸ－102.250　Ｙ59739.085
2　遺構は原則1／20、1／60、遺物は1／3を基準とし、法量はＡ口径　Ｂ器高　Ｃ底径とし、その他はその都度表記した。スクリントンは次のように使用した。 竈 焼土 火床部
3　整理作業は主に遺物水洗い、注記、復元と図版作成を徳利初代、トレースと一部の遺物実測を大野和子、遺物台帳、復元、図版作成と報文執筆は汀　安衛が行った。
4　記号は竪穴住居跡はＳＩ、土坑はＳＫ、ピットはＰを使用した。
5　調査にあたり次の方々にご協力を受け記して感謝の意を表します。茨城県教育庁文化課、行方市教育委員会、鹿行教育事務所、塙　弘・塙　芳子・塙　二郎・高須脩夫・海老沢光雄・金子光男・柳川裕志・大野和子、行方市シルバー人材センター・斎藤弘道氏

抄　録

	イワノイリイセキハックツチョウサホウコクショ
書　　名	岩ノ入遺跡発掘調査報告書
発 行 者	行方市教育委員会．行方市遺跡調査会
所 在 地	行方市山田２５６４－１０
編 集 者	汀　　安衛
編集機関	鹿行文化研究所
所 在 地	茨城県鹿嶋市青塚７１８－１
発行年月日	平成２０年１０月３０日
所収遺跡名	岩ノ入遺跡
所 在 地	茨城県行方市麻生字岩ノ入２７７２－２ 他
市町村番号	４２１
遺跡番号	３０２
	北緯３６°０′０２″東経１４０°２９′３３″
調査期間	２００８年3月２６日～２００８年6月２６日
調査面積	１１００㎡
調査原因	土採取事業に伴う記録保存
所収遺跡名	岩ノ入遺跡
時　　代	古墳時代・奈良時代・平安時代
主な遺構	住居跡・土坑・溝・ピット・炭窯
主な遺物	土師器・須恵器・縄文土器

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と史的環境 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 2
　1　確認調査と調査日誌 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 3
　1　住居跡と出土遺物 …… 5
　　1号住居跡と出土遺物 …… 5
　　2号住居跡と出土遺物 …… 6
　　3号住居跡と出土遺物 …… 8
　　4号住居跡と出土遺物 …… 9
　　5号住居跡と出土遺物 …… 10
　　6号住居跡と出土遺物 …… 12
　　7号住居跡と出土遺物 …… 13
　　8号住居跡と出土遺物 …… 16
　　9号住居跡と出土遺物 …… 18
　　10号住居跡と出土遺物 …… 19
　　11号住居跡と出土遺物 …… 20
　　12号住居跡と出土遺物 …… 21
　　13号住居跡と出土遺物 …… 22
　　14号住居跡と出土遺物 …… 23
　　15号住居跡と出土遺物 …… 25
　　16号住居跡と出土遺物 …… 26
　　17号住居跡と出土遺物 …… 28
　　18号住居跡と出土遺物 …… 30
　　19号住居跡と出土遺物 …… 31
　　20号住居跡と出土遺物 …… 33
　　21号住居跡と出土遺物 …… 35
　　22号住居跡と出土遺物 …… 35
　　23号住居跡と出土遺物 …… 37
　　24号住居跡と出土遺物 …… 39
　2　土坑 …… 41
　　1号土坑と出土遺物 …… 41
　　2号土坑と出土遺物 …… 41
　　3号土坑と出土遺物 …… 41
　　4号土坑と出土遺物 …… 42
　　5号土坑と出土遺物 …… 42
　　6号土坑と出土遺物 …… 42
　　7号土坑と出土遺物 …… 42
　　8号土坑と出土遺物 …… 42
　　9号土坑と出土遺物 …… 44
　　10号土坑と出土遺物 …… 44
　　11号土坑と出土遺物 …… 46

３　ピット …… 46
１・２・３・４・７・８・９・10・11・12・13・14・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27号ピットと出土遺物 …… 46
４　溝 …… 50
１号溝と出土遺物 …… 50
２号溝と出土遺物 …… 51
５　炭窯 …… 52
Ⅳ　結びにかえて …… 53
住居跡の変遷と出土遺物 …… 53

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 1
第２図　遺構位置図 …… 3
第３図　１号住居跡・出土遺物実測図 …… 5
第４図　２号住居跡・出土遺物実測図 …… 7
第５図　３号住居跡・出土遺物実測図 …… 8
第６図　４号住居跡実測図 …… 9
第７図　５号住居跡・出土遺物実測図 …… 11
第８図　６号住居跡・出土遺物実測図 …… 12
第９図　７号住居跡・出土遺物実測図 …… 14
第１０図　７号住居跡出土遺物実測図 …… 15
第１１図　８号住居跡実測図 …… 17
第１２図　９号住居跡・出土遺物実測図 …… 18
第１３図　１０号住居跡・出土遺物実測図 …… 19
第１４図　１１号住居跡実測図 …… 20
第１５図　１２号住居跡・出土遺物実測図 …… 21
第１６図　１３号住居跡・出土遺物実測図 …… 22
第１７図　１４号住居跡・出土遺物実測図 …… 23
第１８図　１５号住居跡・出土遺物実測図 …… 25
第１９図　１６号住居跡・出土遺物実測図 …… 27
第２０図　１７号住居跡実測図 …… 29
第２１図　１７号住居跡出土遺物実測図 …… 29
第２２図　１８号住居跡・出土遺物実測図 …… 30
第２３図　１９号住居跡実測図 …… 31
第２４図　１９号住居跡出土遺物実測図 …… 32
第２５図　２０号住居跡・出土遺物実測図 …… 34
第２６図　２１号住居跡実測図 …… 35
第２７図　２２号住居跡・出土遺物実測図 …… 36
第２８図　２３号住居跡・出土遺物実測図 …… 38
第２９図　２４号住居跡・出土遺物実測図 …… 40
第３０図　1.2.3.4.5.6.11号土坑・7.8.9.10.11.12.13.14号ピット実測図 … 43
第３１図　７．９．１０号土坑実測図・７号土坑出土遺物実測図 …… 45
第３２図　1.2.3.4.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26号ピット実測図 … 46
第３３図　３号ピット・１．２号溝実測図 …… 51
第３４図　１号炭窯実測図 …… 52
第３５図　住居跡変遷図 …… 54

図 表 目 次

第 1 表　1号住居跡出土遺物観察表 …… 6
第 2 表　2号住居跡出土遺物観察表 …… 8
第 3 表　3号住居跡出土遺物観察表 …… 9
第 4 表　5号住居跡出土遺物観察表 …… 10
第 5 表　6号住居跡出土遺物観察表 …… 13
第 6 表　7号住居跡出土遺物観察表 …… 16
第 7 表　9号住居跡出土遺物観察表 …… 18
第 8 表　10号住居跡出土遺物観察表 …… 20
第 9 表　12号住居跡出土遺物観察表 …… 21
第10表　13号住居跡出土遺物観察表 …… 22
第11表　14号住居跡出土遺物観察表 …… 24
第12表　15号住居跡出土遺物観察表 …… 25
第13表　16号住居跡出土遺物観察表 …… 28
第14表　17号住居跡出土遺物観察表 …… 30
第15表　18号住居跡出土遺物観察表 …… 31
第16表　19号住居跡出土遺物観察表 …… 33
第17表　20号住居跡出土遺物観察表 …… 34
第18表　22号住居跡出土遺物観察表 …… 37
第19表　23号住居跡出土遺物観察表 …… 39
第20表　24号住居跡出土遺物観察表 …… 41
第21表　7号土坑出土遺物観察表 …… 44

図 版 目 次

PL1　調査区全景　右上西側調査区 …… 57
PL2　1号住居跡竈・1号住居跡完掘・2号住居跡竈・2号住居跡完掘・3号住居跡完掘・1・2・3号住居跡完掘・4号住居跡出土遺物・5号住居跡出土遺物 …… 58
PL3　5号住居跡竈・5・6・7号住居跡完掘・6号住居跡竈・6号住居跡完掘・7号住居跡竈・7号住居跡完掘・8号住居跡竈・8号住居跡完掘 …… 59
PL4　9号住居跡出土遺物・9号住居跡完掘・10号住居跡完掘・11号住居跡完掘 12号住居跡完掘・13号住居跡竈・6・14・7・9号住居跡完掘 …… 60
PL5　13·15号住居跡出土遺物・14号住居跡竈・15号住居跡完掘・16号住居跡出土遺物・16号住居跡完掘・17号住居跡出土遺物・17号住居跡完掘・18号住居跡完掘 … 61
PL6　19号住居跡出土遺物・20号住居跡貯蔵穴・18・19・20・21号住居跡・22号住居跡完掘・23・24・19号住居跡完掘・23号住居跡竈・23号住居跡完掘・24・19号住居跡完掘 …… 62
PL7　1号土坑完掘・7号土坑出土遺物・10号土坑土層、10号土坑完掘・2号溝完掘・ピット群・炭窯土層　同完掘 …… 63
PL8　SI1・SI2・SI3・SI5・SI6・SI7・SI12・SI13・SI14出土遺物 …… 64
PL9　SI15・SI16・SI17・SI18・SI19・SI20・SI22・SI23・SI24・SK7・炭窯出土遺物 …… 65

Ⅰ　遺跡の位置と史的環境　（第１図）

本遺跡は、茨城県行方市麻生字岩ノ入2772-2番地に所在する。遺跡の所在する行方市は茨城県の東南部に位置し、東側を北浦、西側を霞ヶ浦（西浦）に面し、台地中央部に源を発する中小河川によって樹枝状に支谷が解析され凹凸、屈曲の多い地形を呈している。

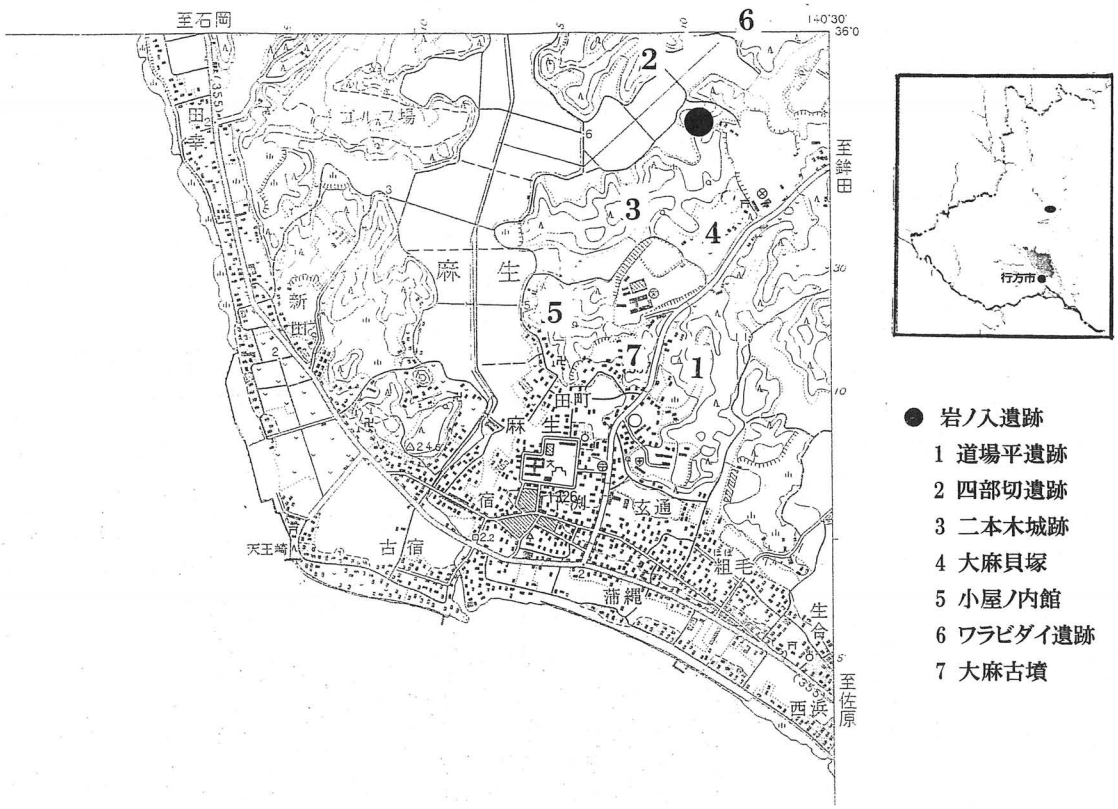
遺跡の大半は、これらの支谷縁辺または半島状、北浦、西浦に面する舌状台地上や沖積平野などに縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が存在している。霞ヶ浦や北浦に面する湖岸沖積地は古来より水田として利用され、こうした恵まれた自然環境の中に縄文時代から近世まで多くの遺跡が残されており、当時の人々の営みを知る事が出来る。

今回調査対象になった岩ノ入遺跡は、霞ヶ浦（西浦）に流れ込む城下川左岸の馬の背状台地先端部の標高３４ｍ程の台地に占地し、周辺には、縄文時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が存在している。南側３００ｍの半島状台地基部には大麻貝塚（縄文時代中期、後期と古墳時代）西側には小屋ノ内館、二本木城跡、南側には小支谷を挟んで道場平貝塚と遺跡、東側にもワラビ台遺跡、北西側に谷を挟んで四部切貝塚（縄文後期、古墳時代）がある。（注1）

城下川下流部には中世行方四頭の１人麻生氏の居城「麻生城跡」や南側の沖積地には（現麻生小学校）江戸時代の麻生藩陣屋跡など古代から近世まで多くの遺跡が存在し恵まれた自然環境を物語る。

岩ノ入遺跡は今回の試掘調査によって確認された遺跡のため、現在まで調査や報文、資料は無い。

注１　麻生町の遺跡　1997年　麻生町教育委員会　編集　茨城大学人文学部考古学教室
２　道場平遺跡発掘調査報告書　1996年　麻生町遺跡調査会
３　四部切遺跡発掘調査報告書　1990年　麻生町遺跡調査会
４　二本木城跡発掘調査報告書　1991年　麻生町遺跡調査会
５　大麻貝塚発掘調査報告書　1990年　麻生町遺跡調査会
６　小屋ノ内館発掘調査報告書　1970年　麻生町遺跡調査会
７　ワラビダイ遺跡発掘調査報告書1996年　麻生町遺跡調査会
８　大麻古墳発掘調査報告書　1999年　麻生町遺跡調査会



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

II　調査に至る経偉

平成１９年11月、株式会社ＹＡＳＵ（代表取締役茂木康明）より　市内麻生字岩ノ入２７７２－２外３筆について土採取事業の計画に対する埋蔵文化財の所在の有無と取扱いについて照会があった。行方市教育委員会で確認調査の試掘を行ったところ遺構と遺物が確認されたため調査結果を報告し株式会社ＹＡＳＵと協議を行なった。

その結果計画変更による現状保存は困難との結論となり、開発業者である株式会社ＹＡＳＵが調査費用を負担し、発掘調査を行い記録保存することとなった。

行方市遺跡調査会が平成２０年３月２５日より５月９日の予定で調査を開始した。調査対象面積約１０００㎡であったが、茨城県教育庁文化課の指導により面積は１１００㎡に拡大、調査は６月２６日までの５０日間となった。

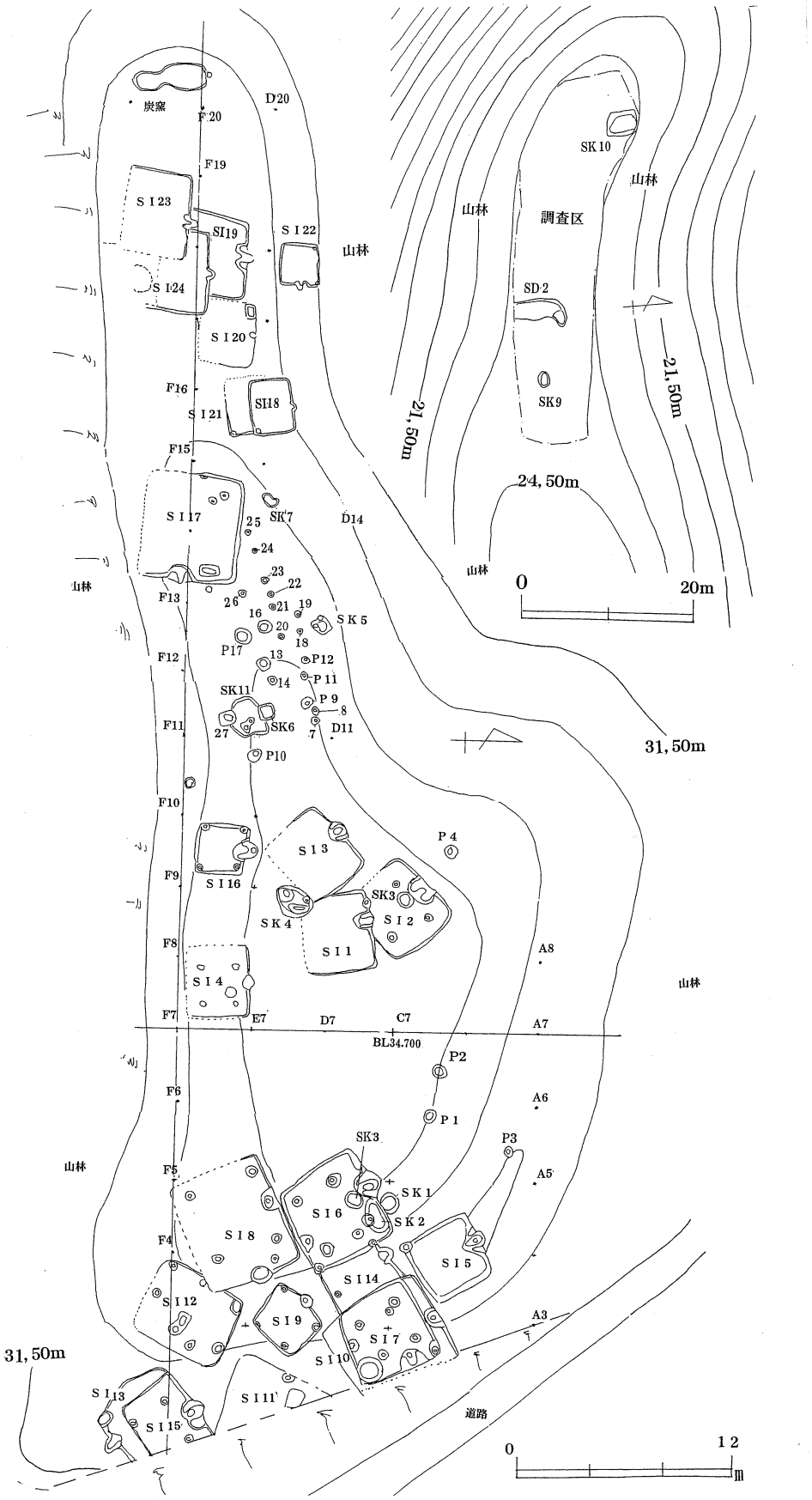
1　確認調査と調査日誌

調査は平成１９年１２月１７日にトレンチ２本を設定し試掘調査を行なった。その結果奈良時代～平安時代の住居跡３軒とピット1基が認められた。以下、調査経過を抜粋し箇条書に述べる。

３月２５日　確認調査トレンチに従って重機により表土除去。諸道具搬入。
３月２６日　本日より遺構確認作業を開始。プレハブ搬入。表土除去。
３月２７日　雑木の根株除去と遺構確認作業。
４月　１日　グリット設定、遺構確認作業。複合関係が見られる。立木根株除去が大変。
４月　２日　中央部の遺構から１号住居跡として調査開始。
４月　７日　５・６号住居跡調査、１・２号住居跡竈調査。
４月１１日　降雨の為午後より調査。２号住居跡竈平面図作成。５号住居跡竈調査。６号住居跡調査。
４月１４日　７号住居跡調査、６号住居跡土層作図、３号住居跡竈調査。雨多く作業進まず半日。
４月１６日　６号住居跡遺物上げ、４・７号住居跡土層作図。各遺構浅いが立木根株が多い。
４月２１日　５・６号住居跡竈調査。８・９・１１・１４号住居跡調査。
４月２８日　１３・１４号住居跡土層作図。９号住居跡平面図作成。
５月　１日　１３号住居跡遺物上げ。６・１１号住居跡柱穴調査。
５月　７日　１４・１６号住居跡土層作図。１６は深い。調査区東側大半目途が付く。
５月　９日　１４号住居跡竈調査。１６号住居跡土層作図。１７号住居跡調査開始。
５月１２日　１４・１６・１７号住居跡竈、平面図、調査。県文化課指導により西側部分表土除去し住居跡確認。
５月１７日　１４・１５号住居跡平面図作成。１７・１８号住居跡調査。炭窯の調査終わる。
５月２１日　１７号住居跡遺物平面図作成。１８・１９号住居跡土層ベルト除去。ピット調査。
５月２３日　１９号住居跡土層作図。ピット調査。
５月２６日　１８・１９号住居跡竈調査。２０号住居跡平面図作成。貯蔵穴調査。
５月２８日　２２号住居跡竈調査。１６号住居跡柱穴調査。１９号住居跡南側表土除去。
文化課後藤氏視察。エリア外西側の調査を要請される。
６月　１日　１６・２２・２３号住居跡柱穴、壁溝、竈確認調査。
６月　５日　県文化課指導の西側エリア調査。土坑、溝有り。全員での作業終了。
６月　６日　西側エリア測量。写真。２２号住居跡遺物平面図作成。１９号住居跡竈調査。
６月１０日　１１・１２・１３・１４号住居跡掃除と確認調査、写真撮影。
６月１４日　１７号住居跡南側確認。壁溝、柱穴、貯蔵穴調査。
６月１６日　２３号住居跡調査。
６月２６日　２４号住居跡調査。本日で現場作業終了。

Ⅲ　調査の概要（第２図）

調査区は、城下川から分かれた支谷に面する馬背台地で、標高３４．７ｍを測る。中央部がさも高



第２図　遺構位置図

く弱く反「く」の字状に屈曲、中央部から東西南北にそれぞれ比高差１.５ｍ程の弱い傾斜を示す。面積と地形は東西８０ｍ南北１０～２０ｍと西側の標高２５ｍの１０ｍ程低い地区に分れ、この部分は幅５～１０ｍ、長さ２０ｍの馬の背状部分である。

確認調査によって４軒前後の住居跡が推定されており、本調査もこのトレンチに拠って表土を除去し、遺構確認に務めたところ１５軒前後の住居跡が認められた。その後、更に西側周辺の表土を除去し確認調査を行った結果住居跡２４軒、土坑１１基、ピット１５、溝２条、炭窯１基が認められた。西側では確認面が灰褐色粘土であった。

住居跡の分布は、中央部の平坦部には少なく東側と西側の緩やかな傾斜面に認められた。西側の幅狭な部分からは古墳時代後期の鬼高、真間期の住居跡５軒と平安時代の住居跡２軒、東側では奈良～平安時代の住居跡が９軒認められ、共に複合関係がみられる。中央部には奈良～平安時代の住居跡５軒が検出され、住居跡は三ヶ所に偏在を示していた。また西側の一部は炭窯の粘土採取の為かなり撹乱が見られた。

住居跡プランは方形状が大半を占めたが長方形プランも２軒みられた。竈は北側ないし北西側が大半を占めたが１５、１７、２２号住居跡のように東壁側に付設するものもあった。また竈はローム層を掘りこんだ円形炉状のものと逆「U」字状に粘土を用いて付設するもの、袖部のみ粘土を使用するなどの特徴も認められた。

柱穴は小型の住居跡では隅部に掘り込むもの、検出でされなかった住居跡などもあり、全体に浅い掘り込みが多かった。

遺物は各遺構とも少なく、土師器に比べ須恵器の割合も多かったが大半は破片であり、接合により器形の窺えるものも少なかった。

鉄器は３点、石器は２点と非常に少なかった。

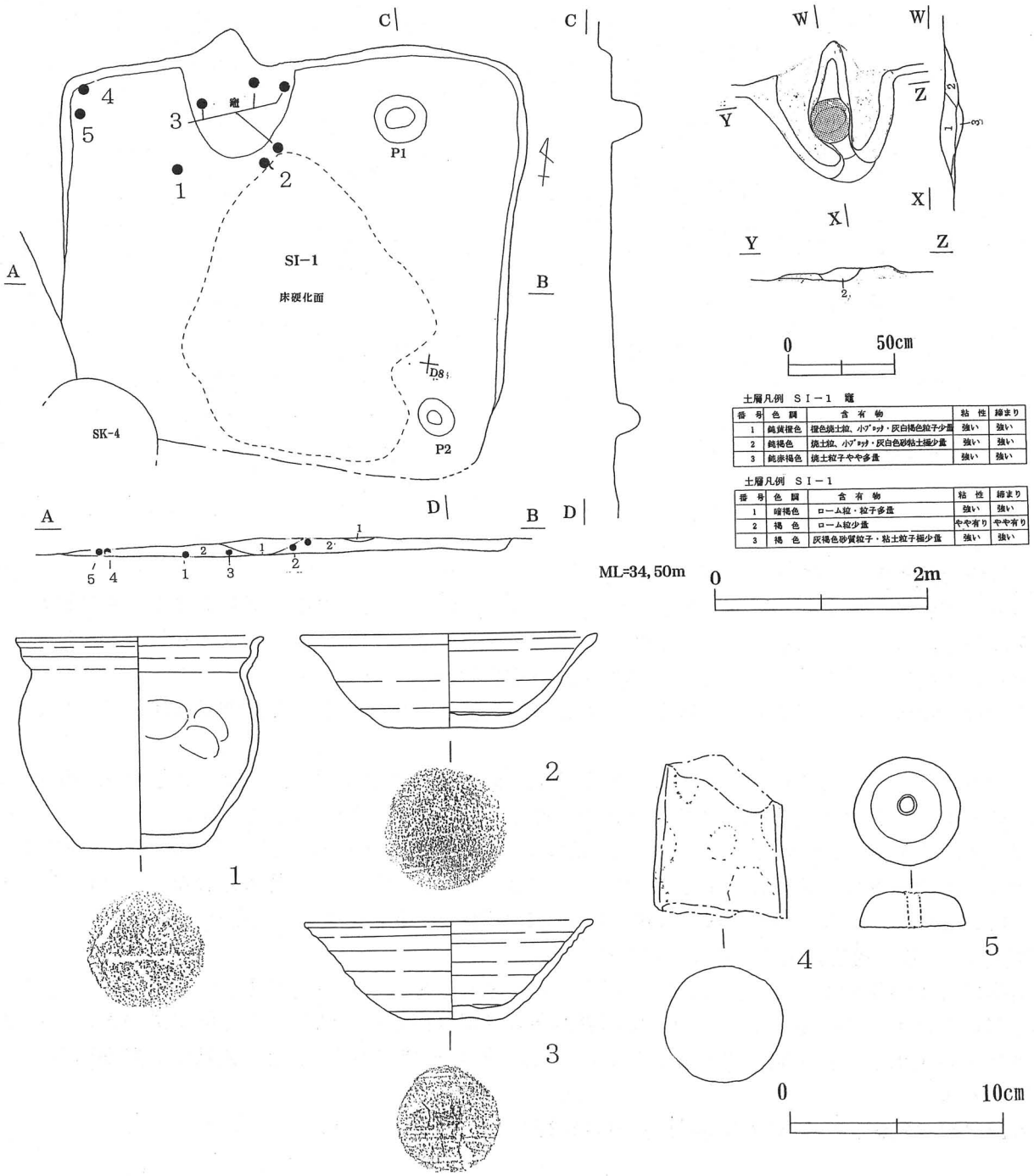
以下、各住居跡の概要について述べる。

1　住居跡と出土遺物

1号住居跡と出土遺物（第３図・図版２、８）

本跡は調査区中央部グリットＤ８区に位置し、西南側にゆるく傾斜する。北側では２号住居跡を掘り込み西側では３号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。規模は東西４．４ｍ、南北４．１ｍの方形状プランを呈し主軸をＮ－１°－Ｗに置く。壁高は北側で１５cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈の前面及び中央部が良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。ピットは、２ヶ所東壁側に認められＰ１は径５０cm、深さ３０cmの長円状。Ｐ２は径３５cm、深さ２５cm。



第３図　１号住居跡・出土遺物実測図

竈は、北壁の西寄りに位置して半円状に付設され焚口から煙道部まで１３０cm、袖部幅７０cm、外部への掘り込みは３０cm、火床部は中央に位置し１０cm程掘り込み、火熱を受け赤褐色を呈し硬い。

覆土は、３層であるが大半は２層が占め、竈前面では砂質粘土がみられた。全体に粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片１２０（甕１１０・坏１０）須恵器片２１（甕２・坏１９）がみられた。いずれも竈周辺または内部から出土している。１は竈前面から出土した小型の甕形土器で、口唇部は尖り開き器肉は薄い。２・３は須恵器坏でロクロ成形、口縁部は開く。４・５は西北隅部から出土している支脚と紡錘車で土製。

本跡は複合関係、出土遺物から１０世紀初頭の時期が考えられる。

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 甕	A　11,5 B　10 C　5.5	器肉の薄い小型甕 頚部の括れは弱く安定した平底 木葉痕　口唇部は外反尖る	ヘラナデ 指頭調整	細石多量 暗褐色 良	60% 床直
2	須恵器 坏	A　14 B　4,5 C　5,5	安定した平底 体部は外反して立ち上がる 口唇部は弱く膨らむ	静止ヘラ切り ナデ調整	細石多量 灰青色 良	60% 覆土
3	須恵器 坏	A　13,5 B　4,5 C　4,5	小さめの底部から直線的に開く 口唇部は弱く膨らむ	静止ヘラ切り ナデ調整	細石中量 灰白色 良	60% 床直
4	支脚	径　5,5 遺存長7	上下欠失、円形	ナデ調整	精選 暗褐色 良	20% 床直
5	紡錘車	径　3,3 高さ 1,5 底径 5	土製でほぼ円形 孔径0,6ｃｍ	ナデ調整	雲母少量 黒褐色 良	完形 床直

第１表　１号住居跡出土遺物観察表

２号住居跡と出土遺物（第４図・図版２、８）

本跡は調査区中央部グリットＣ８区に位置し、南側にゆるく傾斜する。南側では１号住居跡の一部を埋めて複合関係にある。プランは東西４.５ｍ、南北４ｍの方形状を呈し主軸をＮ－４０°－Ｗに置く。壁高は東側で１５cmと低い。南西側は明確ではない。

床面は、ほぼ平坦で竈前面から南側の中央部が良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

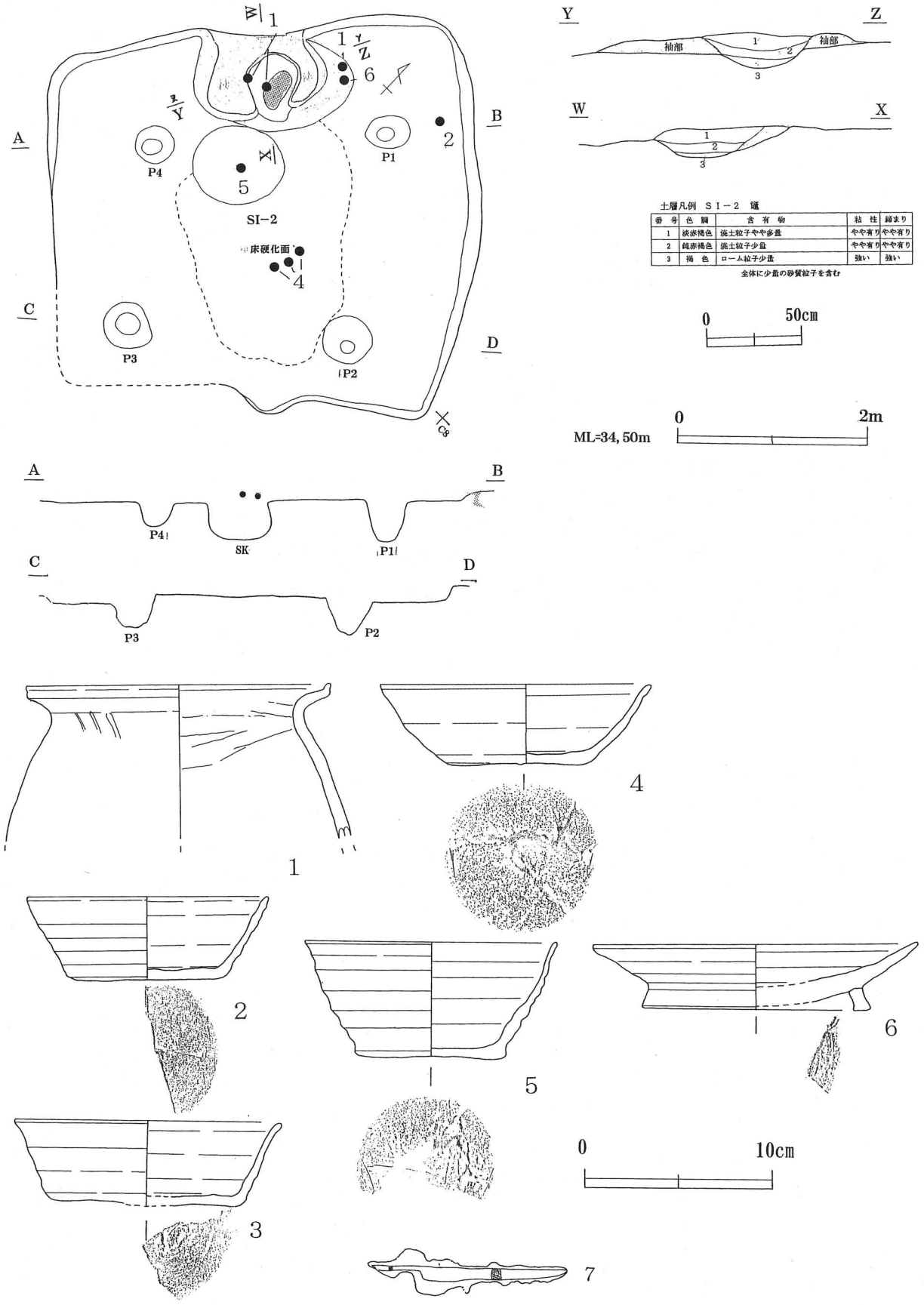
ピットは、４ヶ所認められ、Ｐ１は長径５０cm、深さ４５cmの長円形。Ｐ２は径５０cm、深さ３０cmの円形。Ｐ３は径５０cm、深さ３０cmの円形。Ｐ４は径４０cm、深さ２５cmの円形。「U」字状掘り込みで主柱穴と考えられる。その他、竈前に土坑状のピットが有り径１.５cmの円形を呈する。

竈は、北西側壁面中央部に位置して楕円状に付設され明確な煙道部は認められない。焚口は一段低く中央部を３５cmほど掘り込み、火床部は中央に位置、火熱を受けて赤褐色を呈し、硬い。

覆土は、1層で褐色、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片１７４（甕１５６・坏１８）須恵器片２７（甕９・坏１８）がみられた。中央部と竈から出土している。２・３・４は須恵器坏、底部は回転ヘラ切り、５は鉢に近い器形。６は竈袖部から出土した台付皿。鉄器は長さ１０.５cm、四角形で長さ７.８cm。先端は丸味を帯び刀子と思われる。

本跡は複合関係、出土遺物の特徴から９世紀初頭の時期が考えられる。



第４図　２号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 甕	A　16 B	口縁部強く外反、口唇部尖る 剥落多く成形調整痕不明確	外面不明 内面ナデ	細石極少量 鈍い赤褐色 普通	20% 竈中
2	須恵器 坏	A　12,5 B　4,3 C　7,5	安定した平底から緩く立ち上がる ロクロ成形痕を顕著に残す 底部ナデ	ナデ	細石少量 灰青色 良	50% 覆土
3	須恵器 坏	A　14 B　4,5 C　10	やや凹凸気味の底部から直立 弱く内湾して立ち上がる 口唇部は丸く収める	回転ヘラ切り ナデ	細石少量 灰青色 良	20% 竈袖
4	須恵器 坏	A　14,4 B　4,2 C　6,5	外反して立ち上がり器肉は一定 口唇部は丸く収め成形痕は不明瞭 底部は回転ヘラ切り痕を残す	回転ヘラ切り ナデ	細石・雲母中量 灰青色 普通	60% 覆土
5	須恵器 坏	A　13,5 B　6 C　8	安定した平底から内湾気味に 器肉を減じて立ち上がる 口唇部は丸く収める　浅鉢状	回転糸切り ナデ 成形痕顕著	細石少量 灰白色 良	60% 覆土
6	須恵器 台付皿	A　17 B　3,5 C　12	脚部は短くハの字状　付け高台	回転ヘラ切り ナデ	細石極少量 灰白色 良	20% 竈袖

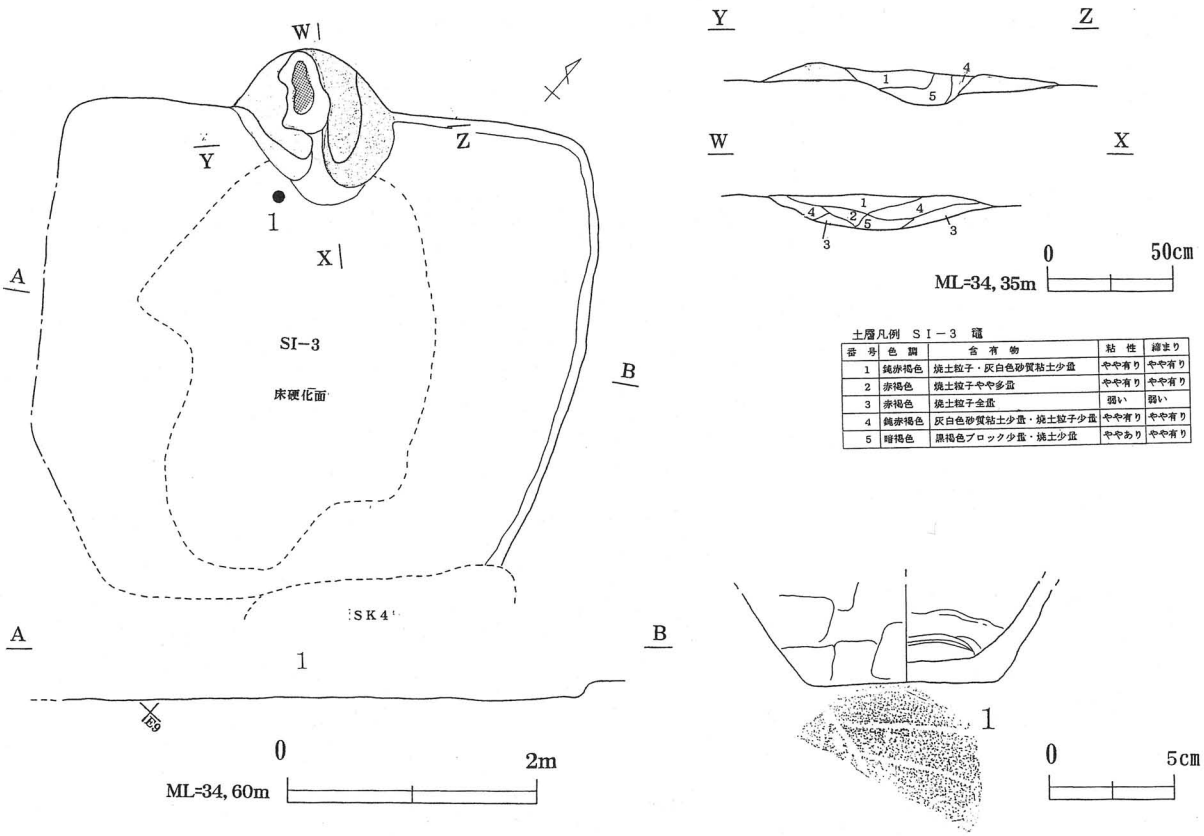
第２表　２号住居跡出土遺物観察表

３号住居跡と出土遺物（第５図・図版２、８）

本跡は調査区中央部グリットＥ９区に位置し、南西側にゆるく傾斜をしている。東側では１号住居跡を掘り込み４号土坑に掘り込まれ、複合関係にある。プランは東西約４．４ｍ、南北約４ｍの方形状と推察される。主軸をＮ－３０°－Ｗに置く。壁高は北側で１０cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈の前面及び中央部が良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

柱穴は、認められなかった。



第５図　３号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 甕	A B C　7,5	底部木葉痕　横位にヘラ削り 長胴形器形か .	ヘラ削り ナデ	砂中量 赤褐色 良	10% 竈前

第３表　３号住居跡出土遺物観察表

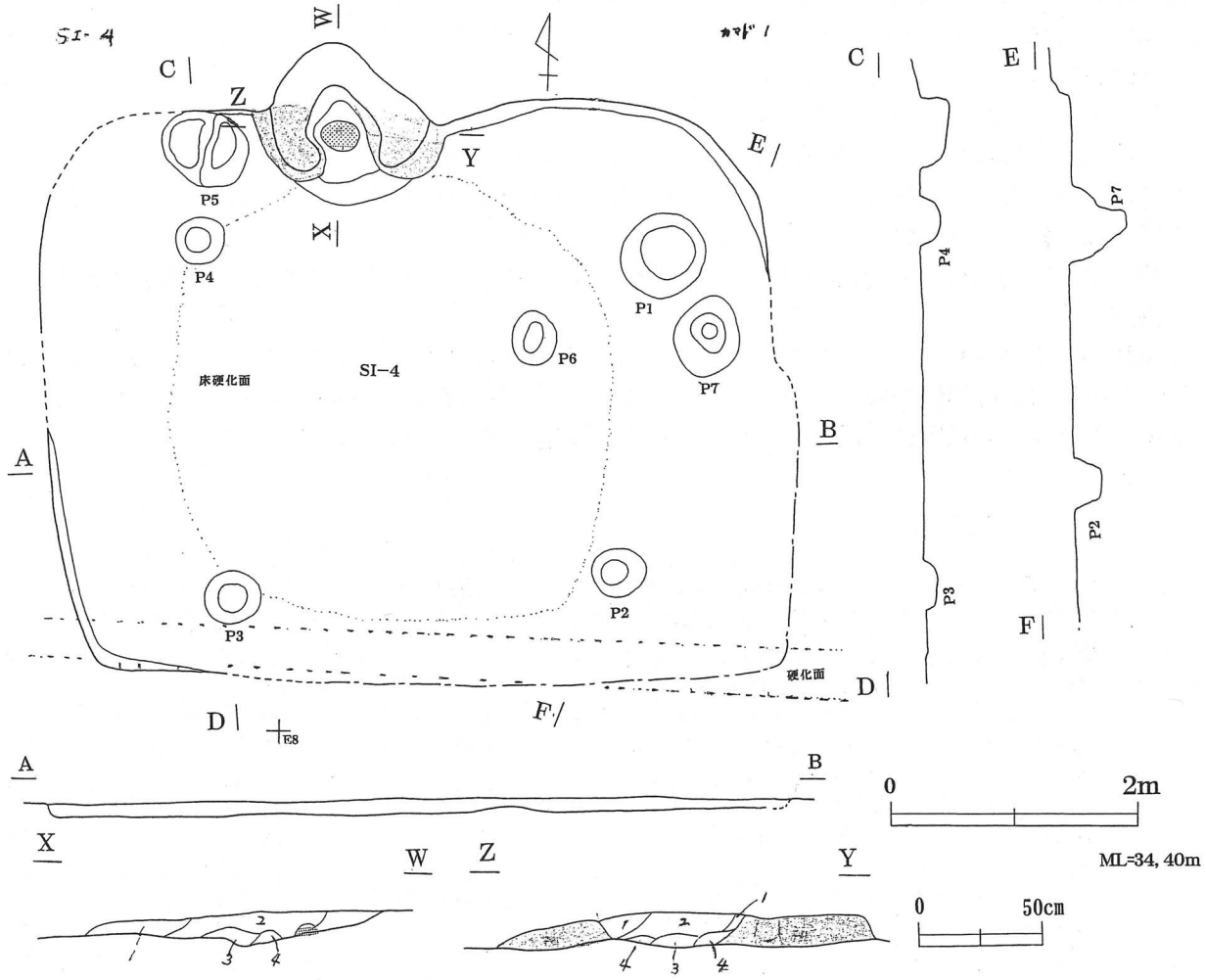
竈は、北西側の壁面中央部に位置して円形状に付設され、焚口から煙道部まで１００cm、袖部幅８０cm、外部には４０cm程張出す。焚口部は狭く火床部は長円状で１０cm程掘り込み、火熱を受け赤褐色を呈しやや硬い。

遺物は、土師器片５２（甕５０・坏２）須恵器片４（甕２・坏２）がみられた。１は竈前面から出土した。土師器甕底部で木葉痕を持つ。

本跡は複合関係、出土遺物から８世紀初頭の時期が考えられる。

４号住居跡と出土遺物（第６図・図版２）

本跡は調査区中央南側グリットＦ７区に位置し、南側にゆるく傾斜をしている。複合関係はなく単独。



第６図　４号住居跡実測図

プランは東西約６ｍ、南北約４．８ｍの長方形を呈し主軸をＮ－１°－Ｗに置く。壁高は北側と南西側で１０cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈の周辺から南にかけて良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

ピットは、６ヶ所認められＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４が主柱穴で１は径７０cm、深さ２０cmで円形、２は径４０cm、深さ２０cmの楕円形、３は径４５cm、深さ１３cmの円形、４は径４０cm、深さ１５cmの円形。Ｐ５は長径７０cm、深さ２０cmで２段に掘り込まれている。貯蔵穴の名残か。Ｐ７は支柱穴か、径７０cm、深さ４５cm。南側に硬化面が認められ旧道の跡と思われる。

竈は、北壁の中央部西寄りに位置し楕円状に付設され、焚口から煙道部まで１２０cm、袖部幅１５０cm、外部へは半円状に５０cm張出す。袖は火床部を抱える感じに付設、焚口部はやや高く、火床部は中央に位置し５cm程掘り込み、火熱を受け淡い赤褐色を呈し焼き締まりは弱い。

覆土は、１層で褐色、粘性、締まりはやや強い。

遺物は、土師器片１１９（甕１１１・坏８）須恵器片１０（甕１・坏９）がみられたが図示出来る物はなかった。

本跡は確認調査時に中央部を試掘溝で床面が検出され、掘り込みは浅く遺物も器形を窺えるものが少なかった。プラン、竈、主軸などから８世紀中葉から後半の時期と思われる。

５号住居跡と出土遺物（第７図・図版２、８）

本跡は調査区東北側グリットＢ４区に位置し、東北側にゆるく傾斜している。北西側の１号溝を掘り込み複合関係にある。プランは東西３．４ｍ、南北３．４ｍの方形状を呈し、主軸をＮ－１３°－Ｗに置く。壁高は西側で３０cm、東側で１５cmを測る。

床面は、竈前面のみが良く踏み固められている。壁溝は南側中央部のみで幅１５～２０cm、深さは５cm前後。

ピットは、南西に１ヶ所認められＰ１径４５cm、深さ１５cmの円形状。

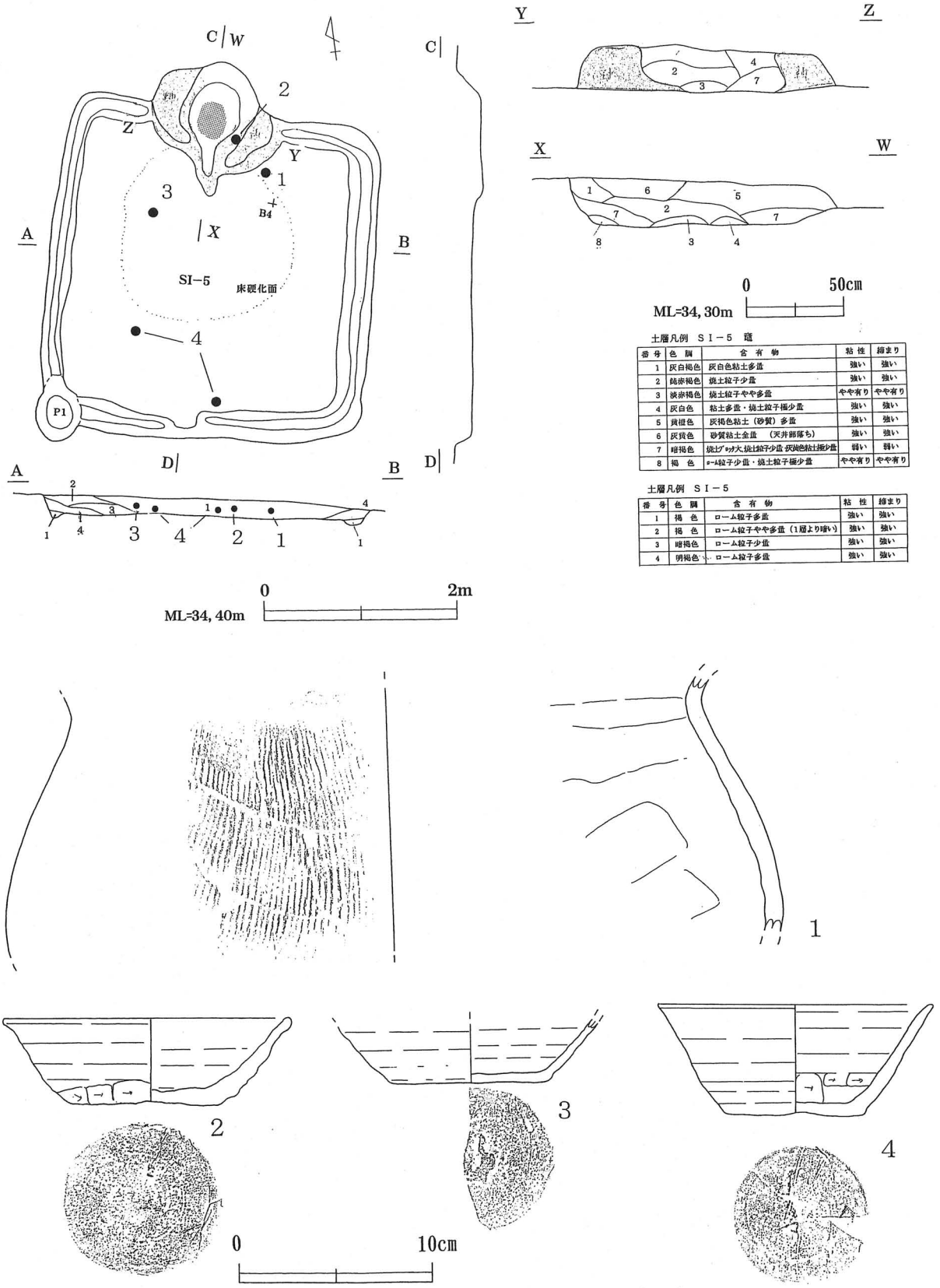
竈は北壁中央部に位置して楕円状に付設され、焚口から煙道部まで１３０cm、袖部幅１３５cmで大半は壁外に掘り込み焚口部は幅が１５cmと狭い。火床部は円形状に掘り込み、火熱を受け赤褐色を呈し焼き締まりは弱い。

覆土は、８層に分けられたが大半は１層で灰白色の粘土粒子を含む層で２・３層は西壁にみられ人為的。

遺物は、土師器片２６８（甕２２３・坏４５）須恵器片６４（甕３８・坏２６）がみられ、図示したものには須恵器甕の縦位の叩き目、坏は底部にヘラ切り痕、ヘラ削りがみられる。
本跡はプラン、須恵器の特徴などから８世紀末の時期が考えられる。

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	須恵器 甕	A B C	頚部32cm大甕と考えられる 外面平行沈線タタキ目 内面ヘラ削り調整	タタキ目 ヘラ削り	雲母極少量 灰褐色 普通	胴10% 竈袖
2	須恵器 坏	A 14,7 B 4,5 C 7,5	底部回転ヘラ切り　体部外反し 器肉を減じて立ち上がる ﾛｸﾛ成形痕が内外顕著	回転ヘラ切り 手持ちヘラ削り	細石・長石中量 灰青色 良	ほぼ完 竈中
3	須恵器 坏	A B C 8	底部から外反して立ち上がる 器肉は全体に薄い	回転ヘラ切り ナデ	細石多量 灰青色 良	60% 覆土
4	須恵器 坏	A 14 B 5,7 C 6,8	小型の鉢状器形 体部の成形痕は弱い	回転ヘラ切り ナデ 内面ヘラナデ	細石中量 鈍い黄橙色 良	50% 覆土

第４表　５号住居跡出土遺物観察表



土層凡例　ＳＩ－５　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	灰白褐色	灰白色粘土多量	強い	強い
2	鈍赤褐色	焼土粒子少量	強い	強い
3	淡赤褐色	焼土粒子やや多量	やや有り	やや有り
4	灰白色	粘土多量・焼土粒子極少量	強い	強い
5	黄褐色	灰褐色粘土（砂質）多量	強い	強い
6	灰黄色	砂質粘土全量　（天井部落ち）	強い	強い
7	暗褐色	焼ブロック大、焼土粒子少量 灰褐色粘土極少量	弱い	弱い
8	褐　色	ローム粒子少量・焼土粒子極少量	やや有り	やや有り

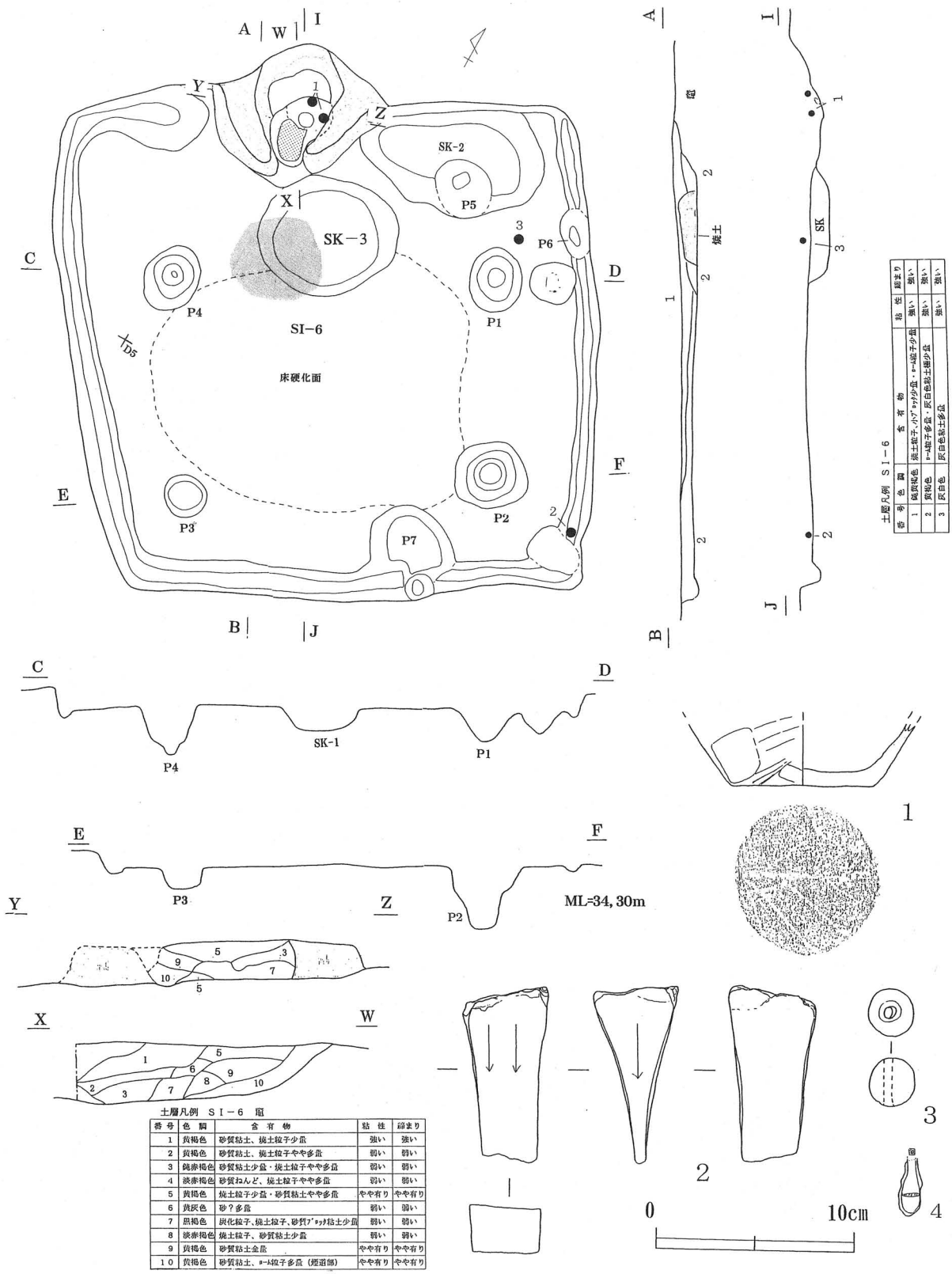
土層凡例　ＳＩ－５

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐　色	ローム粒子多量	強い	強い
2	褐　色	ローム粒子やや多量（1層より暗い）	強い	強い
3	暗褐色	ローム粒子少量	強い	強い
4	明褐色	ローム粒子多量	強い	強い

第７図　５号住居跡・出土遺物実測図

６号住居跡と出土遺物（第８図・図版３、８）

本跡は調査区東側グリットＤ４区に位置し、東側にゆるく傾斜している。東側で１４号住居跡と複合関係にありプランは東西５．４ｍ、南北５ｍの方形状を呈し主軸をＮ－３３°－Ｗに置く。壁高は西側２５㎝、東側１５㎝を測り、本遺跡では高い部類に入る。



土層凡例　ＳＩ－６

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黄褐色	砂質粘土、焼土粒子少量	強い	強い
2	黄褐色	砂質粘土、焼土粒子やや多量	弱い	弱い
3	鮮赤褐色	砂質粘土少量・焼土粒子やや多量	弱い	弱い
4	淡赤褐色	砂質ねんど、焼土粒子やや多量	弱い	弱い
5	黄褐色	焼土粒子少量・砂質粘土やや多量	やや有り	やや有り
6	黄灰色	砂？多量	弱い	弱い
7	黒褐色	炭化粒子、焼土粒子、砂質ブロック粘土少量	弱い	弱い
8	淡赤褐色	焼土粒子、砂質粘土少量	弱い	弱い
9	黄褐色	砂質粘土全量	やや有り	やや有り
10	黄褐色	砂質粘土、ローム粒子多量（煙道部）	やや有り	やや有り

土層凡例　ＳＩ－６

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	鮮黄褐色	焼土粒子、ハードロック少量、ローム粒子少量	強い	強い
2	黄褐色	ローム粒子多量・灰白色粘土微少量	強い	強い
3	灰白色	灰白色粘土多量	強い	強い

第８図　６号住居跡・出土遺物実測図

床面はほぼ平坦、中央部が楕円状に良く踏み固められている。壁溝は幅１５～２０cm程で「U」字状に巡る。

ピットは、５ヶ所認められＰ１は径６０cm、深さ３５cmの円形。Ｐ２は径７０cm、深さ６５cmの楕円形で２段に掘り込む。Ｐ３は径４５cm、深さ２０cmの円形状で浅い。Ｐ４は径７０cm、深さ４５cmで長円形。Ｐ５は竈東側にみられる径５５cm、深さ４０cm。南壁面に貯蔵穴状の掘り込みＰ７が見られた。

竈は、北壁に位置して楕円状に付設され、焚口から煙道部まで１４０cm、袖部幅１７０cmと広い。外部へはゆるく張出す。焚口部は３０cmと狭い。火床部は中央部に位置し、火熱を受け赤褐色を呈し焼き締まりは強い。

覆土は、３層で焼土粒子、灰白色粘土が含まれ人為的。粘性、締まりは強い。

遺物は、土師器片８２６（甕７３５・坏９１）須恵器片１２２（甕３９・坏８３）がみられたが図示できるものは少ない。本遺跡では唯一の砥石がみられ、良く使い込まれている。４は鉄族の一部で遺存長２.７cmで西壁、壁溝から出土。

本跡は複合関係、出土遺物プランの特徴から９世紀初頭の時期と考えられる。

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 甕	A B C　7,2	底部のみ やや外反気味に 立ち上がる　器肉は薄い 底部に木葉痕	ヘラ削り ナデ	細石多量 黒褐色 普通	10% 竈中
2	砥石	長さ　8,7 最大幅 4,2	四面に使用痕有 三角形状に薄くなり使い込まれている	凝灰岩		ほぼ完形 壁溝
3	丸玉	径2,2×2,4 孔径0,4 重さ12ｇ	やや長円状　不整形	ナデ	砂多量 鈍い橙色	ほぼ完形 覆土

第５表　６号住居跡出土遺物観察表

７号住居跡と出土遺物（第８図・図版３、８）

本跡は調査区東端グリットＣ３区に位置し、東側にゆるく傾斜している。１０号住居跡を掘り込み西側では１４号住居跡と複合関係にある。プランは東西４.９m、南北４.６mで隅丸方形状を呈し主軸をＮ－３０°－Wに置く。壁高は西側で３０cm、東側で２５cmで本遺跡では高い。

床面は、ほぼ平坦で中央部が良く踏み固められている。壁溝は東側を除き幅１０～１５cm、深さ５cm程で「U」字状に巡る。

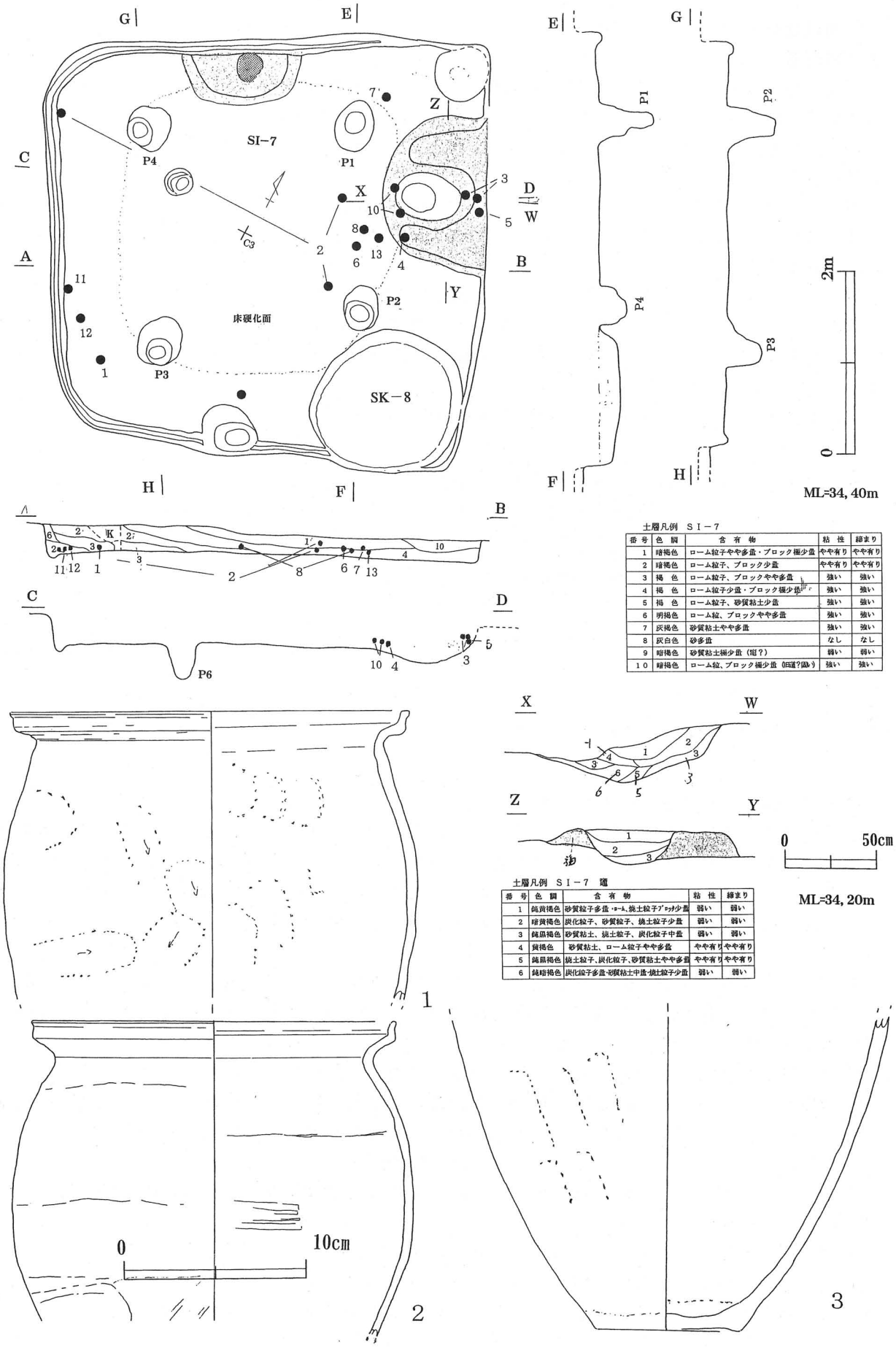
ピットは、４ヶ所認められ、Ｐ１は長径５５cm、深さ６０cmの長円形、Ｐ２は径５０cm、深さ３０cmで２段に掘り込む。Ｐ３は径５０cm、深さ４０cmの円形。Ｐ４は径４５cm、深さ５０cmの楕円形状。掘り方は「U」字状を呈する。

竈は東側と北側の２ヵ所にみられ共に半円状に付設、外部への掘り込みは無い。東側の竈は焚口から煙道部まで９０cm、袖部幅１７０cm。焚口部は５０cmと広い。火床部は前面に位置、火熱を受け赤褐色を呈し焼き締まりは強い。北竈は砂質粘土で覆われ袖部、焚口は明確でなく中央下部に火床部らしい赤褐色の焼土が認められたが焼き締まりは弱い。

覆土は、１０層に分けられ、ほぼ東側に流れるような自然埋積を示し大半は暗褐色、褐色層で粘性、締まりはやや強い。

遺物は、土師器片５９０（甕５０６・坏８４）須恵器片１２３（甕２６・坏９７）がみられた。図示したものは竈又は前面、西壁側から出土。１・２の甕は器肉が薄く長胴形、口唇部は開き気味で尖る。須恵器坏は口縁部が開き器肉は薄く、底部は回転ヘラ切り。また手捏土器、土製丸玉が７点出土している。不明の鉄片１８が見られた。鎌か。

本跡は複合関係、土師器甕、須恵器坏などの特徴から８世紀中葉の時期が考えられる。



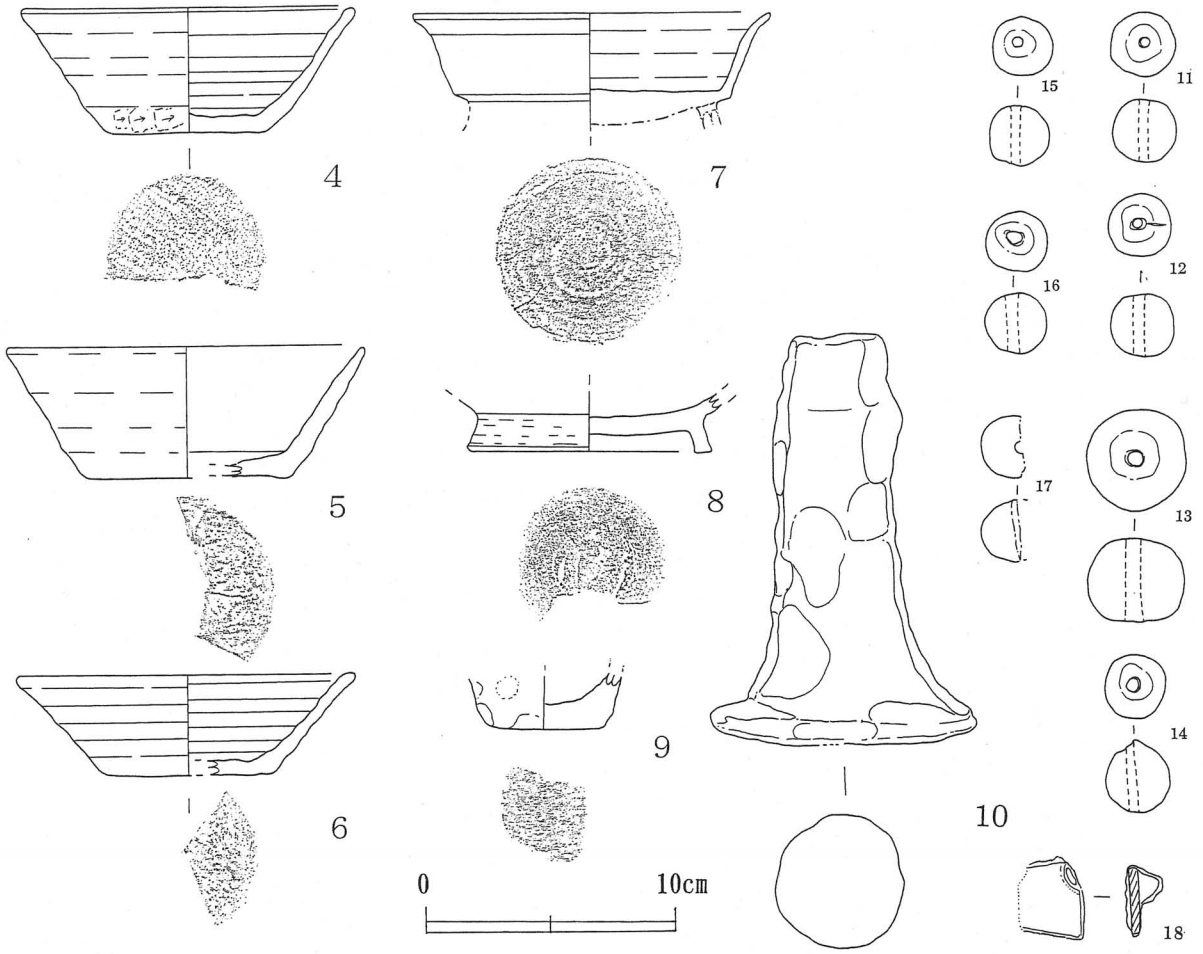
土層凡例　ＳＩ－７

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	暗褐色	ローム粒子やや多量・ブロック極少量	やや有り	やや有り
2	暗褐色	ローム粒子、ブロック少量	やや有り	やや有り
3	褐色	ローム粒子、ブロックやや多量	強い	強い
4	褐色	ローム粒子少量・ブロック極少量	強い	強い
5	褐色	ローム粒子、砂質粘土少量	強い	強い
6	明褐色	ローム粒、ブロックやや多量	強い	強い
7	灰褐色	砂質粘土やや多量	強い	強い
8	灰白色	砂多量	なし	なし
9	暗褐色	砂質粘土極少量（焜？）	弱い	弱い
10	暗褐色	ローム粒、ブロック極少量（旧道？踏み）	強い	強い

土層凡例　ＳＩ－７　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	鈍黄褐色	砂質粒子多量・ローム、焼土粒子ブロック少量	弱い	弱い
2	暗黄褐色	炭化粒子、砂質粒子、焼土粒子少量	弱い	弱い
3	鈍黒褐色	砂質粘土、焼土粒子、炭化粒子中量	弱い	弱い
4	黄褐色	砂質粘土、ローム粒子やや多量	やや有り	やや有り
5	鈍黒褐色	焼土粒子、炭化粒子、砂質粘土やや多量	やや有り	やや有り
6	鈍暗褐色	炭化粒子多量・砂質粘土中量・焼土粒子少量	弱い	弱い

第９図　７号住居跡・出土遺物実測図



第１０図　７号住居跡出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 甕	A　23 B C	胴部の張は弱く口縁部「く」の字状 外反　口唇部つまみ出す 内外に輪積調整痕を残す	ナデ調整	細石・雲母中量 暗褐色 普通	20% 床直
2	土師器 甕	A　20 B C	１同様の器形で口唇部は上方に つまみ出す　器肉は5mmと薄い 器面は二次焼成で粗雑	ナデ 指頭圧痕	細石・長石多量 外橙色　内暗褐色 普通	40% 竈中
3	土師器 甕	A B C　8	口頸部欠失しているが長胴形か 小さめの底部から内湾して立ち 上がる　器肉はやや厚く　器面粗雑	ナデ 押圧	細石多量 灰褐色　内明褐色 普通	50% 竈中
4	土師器 坏	A　13,4 B　5 C　6,4	平底から外反して立ち上がり 口唇部は丸く収まる 体部にはﾛｸﾛ成形痕が顕著	ナデ 回転ヘラ切り ヘラ調整	細石中量 暗褐色 普通	50% 竈袖
5	須恵器 坏	A　14,4 B　5,2 C　8	内外底とも剥落多く調整痕不明 体部から器肉を減じて口縁部に移行	不明	雲母極少量 灰褐色 普通	40% 竈中
6	須恵器 坏	A　13,5 B　4 C　6,5	体部は強く外反 口唇部は弱く膨らむ 内外ともﾛｸﾛ成形痕を顕著に残す	回転ヘラ切り	雲母・細石少量 灰褐色 良	30% 覆土
7	須恵器 高台坏	A　14,2 B　4,5 C　9,5	高台を欠失　体部は弱く外反 口縁部は開き口唇部は丸く収める 底部は回転ヘラ切り　付け高台	回転ヘラ切り ナデ	雲母・細石多量 青褐色 良	60% 覆土
8	須恵器 高台坏	A B C　9,7	高台は「ハ」の字状に弱く開き短い 体部は欠失　№.７に近い器形か 付け高台	回転糸切り ナデ	細石極少量 灰緑色 良	30% 覆土
9	土師器 手捏	A B C　4,3	口縁部欠失　底部は平底ナデ調整 約1/2程を欠失　形状は不明	手捏 指頭圧痕	砂中量 淡い赤褐色 普通	50% 覆土
１０	土製 支脚	A　3,7 B　16,5 C　10,5	竈焚口から上下分かれて出土 指頭などの押圧で凹凸が激しい 不整形　底部は鍔状に広い	圧痕	砂・細石・雲母少量 鈍い赤褐色 普通	ほぼ完 竈前
１１	土製 丸玉	径2,5×2,6 孔径　0,4	球形状　やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色　普通	覆土 12ｇ
１２	〃 〃	径2,5×2,6 孔径　0,4	球形状　やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色　普通	覆土 13ｇ
１３	〃 〃	径 5×3,3 孔径　0,6	潰れた球形状　やや磨耗	ナデ	砂中量 淡い橙色　普通	覆土 42ｇ
１４	〃 〃	径2,4×2,8 孔径　0,4	孔部尖る　球形状　やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色　普通	覆土 10ｇ
１５	〃 〃	径2,4×2,3 孔径　0,4	ほぼ球形状　やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色　普通	覆土 10ｇ
１６	〃 〃	径2,4×2,3 孔径　0,6	孔長円　ほぼ球形状　やや磨耗	ナデ	砂中量 黄褐色　普通	覆土 10ｇ
１７	〃 〃	径2,6×2,4 孔径　0,4	ほぼ球形状　やや磨耗　1/2欠	ナデ	砂中量 黄褐色　普通	覆土 8ｇ

第６表　７号住居跡出土遺物観察表

８号住居跡と出土遺物（第１１図・図版３）

本跡は調査区東南側グリットＥ４区に位置し、南側にゆるく傾斜している。東隅部で１２号住居跡と複合関係にある。プランは東西６．３ｍ、南北５．２ｍの長方形状を呈し主軸をＮ－２２°－Ｗに置く。確認時床面が検出され明確に壁高を測れる所はなかった。

床面は、ほぼ平坦で隅部を除き良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

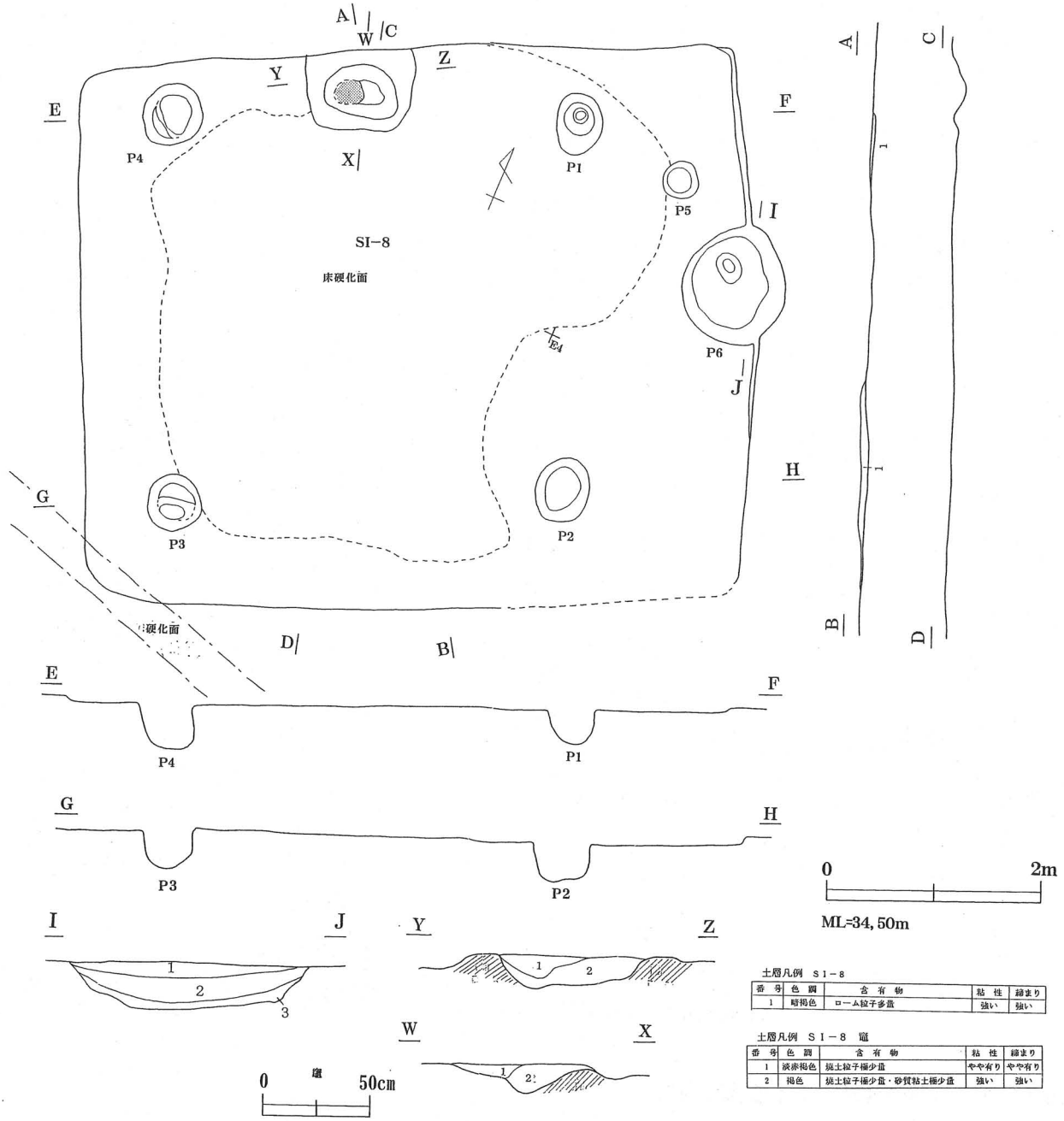
ピットは、６ヶ所認められＰ１は長径５０cm、深さ３０cmの楕円形、Ｐ２は長径６０cm，深さ３５cmの楕円形、Ｐ３は径４５cm、深さ３５cmＮＯ円形状、Ｐ４は径５０cm，深さ４０cmの円形状、Ｐ５は径３０cm、深さ２５cm、Ｐ６は東西９５cm、南北１１０cm、深さ５０cmの楕円形で土坑状。本跡に伴うものか不明。

竈は、北壁中央やや西寄りに位置し半円状に付設され、外部への張り出しは認められなかった。袖部が楕円形状に巡り明確な焚口、煙道部は把握できなかった。火床部は中央に位置し火熱を受け淡い赤褐色を呈し焼き締まりは弱い。

覆土は、１層で褐色、粘性、締まりはやや強い。

遺物は、土師器片１４（甕１２・坏２）須恵器の甕、坏は認められなかった。図示できるものは無い。

本跡は遺構プラン竈や複合関係、出土遺物から８世紀中葉から後半の時期が考えられる。



第１１図　８号住居跡実測図

９号住居跡と出土遺物（第１２図・図版４）

本跡は調査区東側のグリットＥ３区に位置し、東側にゆるく傾斜している。住居跡、土坑等との複合関係は無い。プランは辺３ｍ、隅丸方形状を呈する小型の遺構。主軸をＮ－４９°－Ｗに置く。壁高は西側で１５㎝、東側で１０㎝と低め。

床面は、中央部がやや低く、竈前面及び中央部が踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

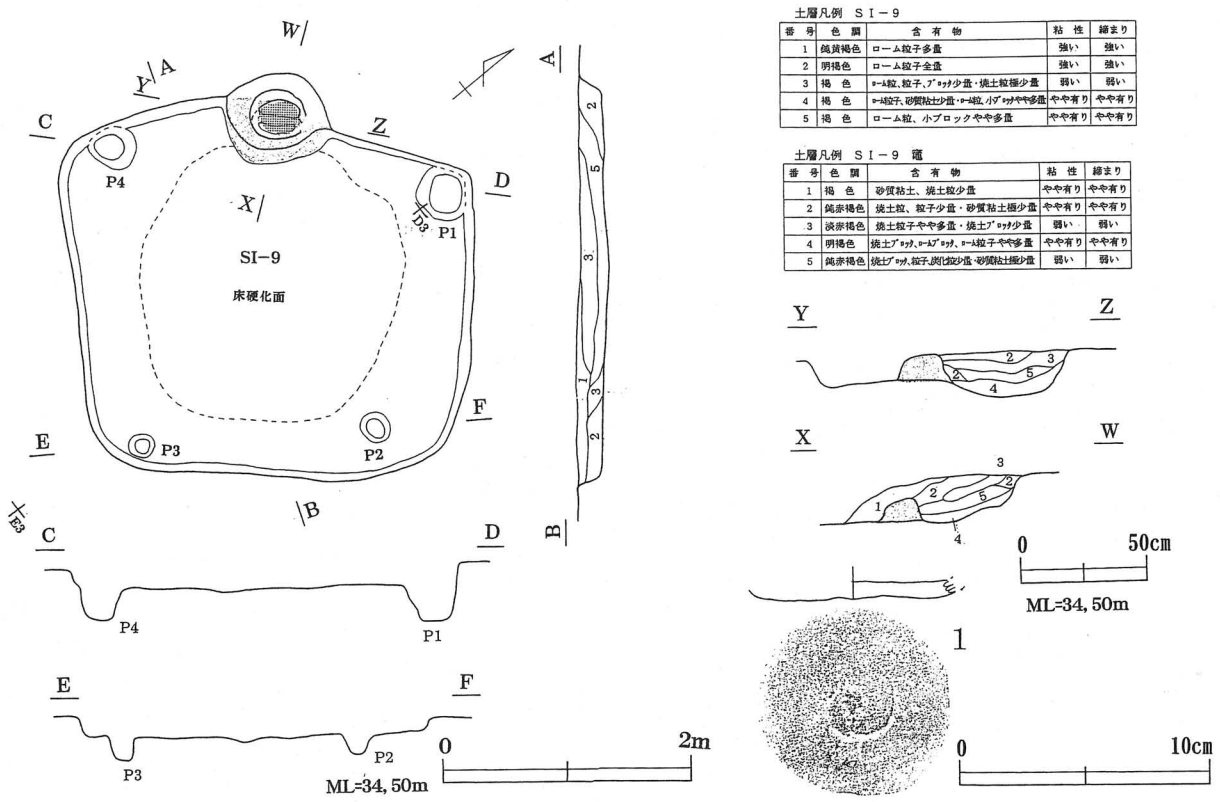
ピットは、４ヶ所認められＰ１は径４０㎝、深さ３０㎝円形、隅部に位置。Ｐ２は２５㎝、深さ１５㎝円形。Ｐ３は径２０㎝、深さ２０㎝の円形状。Ｐ４は径４０㎝、深さ２５㎝の楕円形。掘りこみはいずれ「Ｕ」字状を示す。

竈は北西の壁面に位置し円形状に付設され、外部にも半円状に３０㎝程張り出す。袖部幅８０㎝、火床部は中央に位置し径４５㎝程で円形状に掘込まれ、下部は火熱を受け赤褐色を呈しているが焼き締まりは弱い。

覆土は、５層に分けられたが大半は３・５層が占め、レンズ状の自然埋積を示す。粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片９８（甕８２・坏１６）須恵器片１１（甕３・坏８）がみられた。いずれも小片で図示できるものは少なく、底部の回転ヘラ切りのみ。

本跡は、プラン、竈の付設状態、主柱穴、遺物の特徴などから１０世紀末の時期が考えられる。



土層凡例　ＳＩ－９

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	鈍黄褐色	ローム粒子多量	強い	強い
2	明褐色	ローム粒子全量	強い	強い
3	褐色	ローム粒、粒子、ブロック少量・焼土粒極少量	弱い	弱い
4	褐色	ローム粒子、砂質粘土少量・ローム粒、小ブロックやや多量	やや有り	やや有り
5	褐色	ローム粒、小ブロックやや多量	やや有り	やや有り

土層凡例　ＳＩ－９　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	砂質粘土、焼土粒少量	やや有り	やや有り
2	鈍赤褐色	焼土粒、粒子少量・砂質粘土極少量	やや有り	やや有り
3	淡赤褐色	焼土粒子やや多量・焼土ブロック少量	弱い	弱い
4	明褐色	焼土ブロック、ロームブロック、ローム粒子やや多量	やや有り	やや有り
5	鈍赤褐色	焼土ブロック、粒子、炭化粒少量・砂質粘土極少量	弱い	弱い

第１２図　９号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	須恵器 坏？	A B C　7,5	底部のみ 器形不明 坏か	回転ヘラ切り	細石・雲母少量 灰褐色 良	15% 覆土

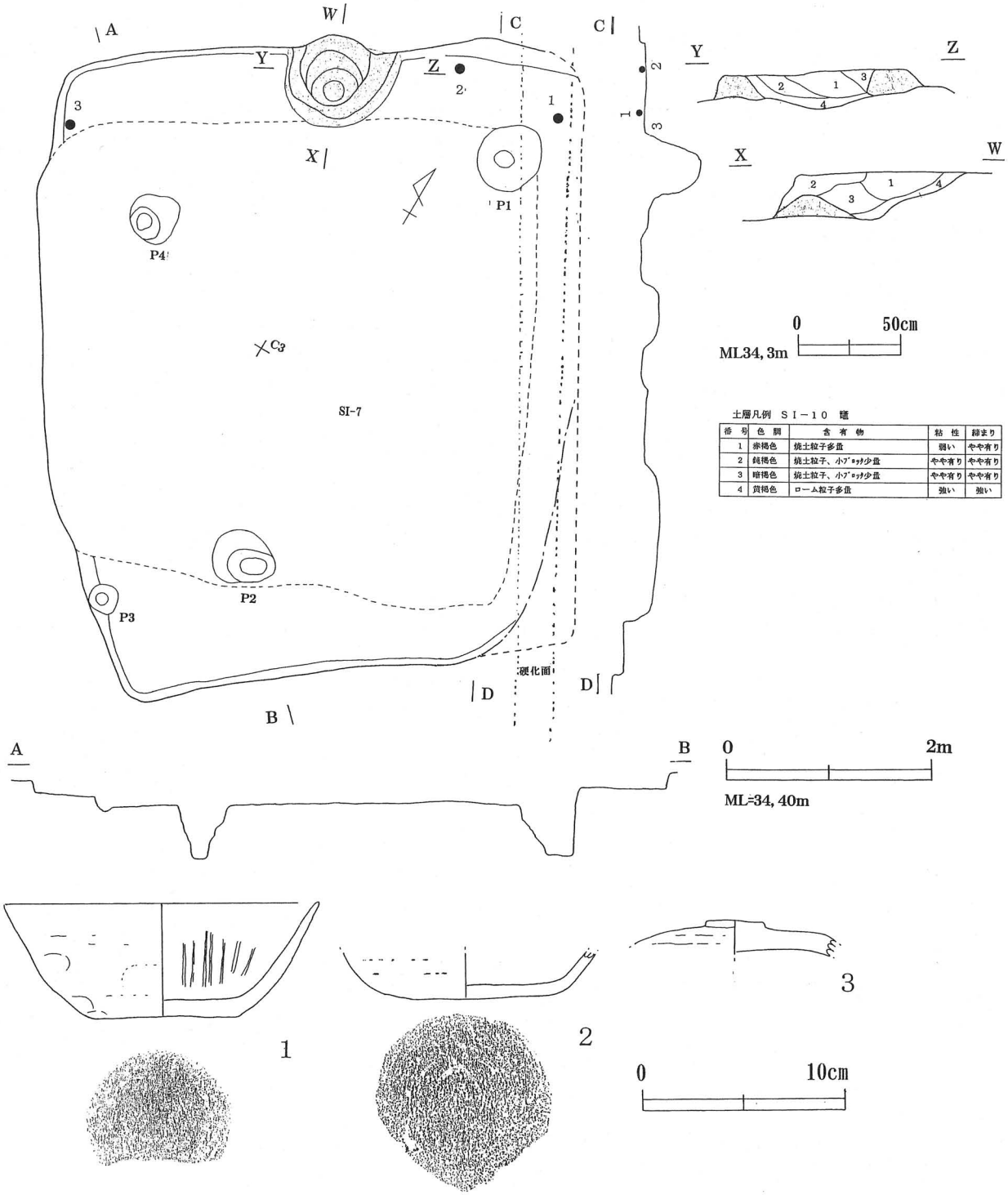
第７表　９号住居跡出土遺物観察表

１０号住居跡と出土遺物（第１３図・図版４）

本跡は調査区東側グリットＣ３７区に位置し、東側にゆるく傾斜している。中央部大半は７号住居跡に掘り込まれ東側と南北に幅狭く遺存する。プランは東西５．２ｍ、南北６．１ｍの不整形な長方形か。東側の一部は道路によって削平されている。主軸をＮ－６０°－Ｗに置く。壁高は南側で１５cm、北側で５cmと低い。

床面の大半は欠失。南北の遺存部では締まりが悪い。壁溝は認められなかった。

ピットは、４ヶ所認められたが主柱穴は１・２・４でＰ１は径６０cm、深さ６０cmの円形状。Ｐ２は長径６０cm、深さ７０cmの楕円。Ｐ４は長径５０cm、深さ６０cmの楕円。いずれも「Ｕ」字状の掘り込み。Ｐ３は西側壁面竈に掘り込まれた径３０cm、深さ１５cm程の小穴。



第１３図　１０号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 碗	A　14,3 B　6 C　7	丸底気味の底部から弱く外反して 口縁部に移行 口唇部は器肉を減じ 丸く収める 内面縦位のヘラ磨き	ヘラ削り ナデ　ヘラ磨き 回転糸きり	精選 黄褐色 良	30% 覆土
2	須恵質 坏	A B C　8	やや凹凸気味の底部から外反し 立ち上がる　口縁部欠失	ナデ 回転ヘラ切り	雲母・細石中量 鈍い橙色 普通	40% 床直
3	土師器 蓋	摘み径 3 〃　高0,4	摘みは扁平　膨らみは弱い	ナデ	細石多量雲母少量 黄橙色 良	10% 床直

第８表　１０号住居跡出土遺物観察表

竈は北壁中央に位置し半円状に付設され、袖部幅１００cm、外部へは１０cm程張り出す。焚口部はやや高く、火床部は中央やや前に位置し火熱を受け赤褐色を呈する。

覆土は、４層確認されたがいずれも南北側１ｍ程で赤褐色、暗褐色、黄褐色で粘性、締まりはやや有る。東側道路に沿って表土から幅３０cm程の硬化面が南北に認められた。(旧道)

遺物は、土師器片３４（甕１５・坏１９）須恵器は認められなかった。図示した坏はヘラけずり、ヘラ磨き、底部はナデ調整。蓋の摘みは扁平。

本跡は複合関係、出土遺物の特徴などから８世紀初頭が考えられる。

１１号住居跡と出土遺物（第１４図・図版４）

本跡は調査区東側端部グリットＥ２７区に位置し、東側にゆるく傾斜をしている。ほぼ１／２を道路によって欠失。プランは明確ではないが竈と床面の硬化度から主軸をＮ－６０°－Ｗに置くと思われる。壁高は南側で５cmを測るが、他方位では確認できなかった。複合関係は無い。

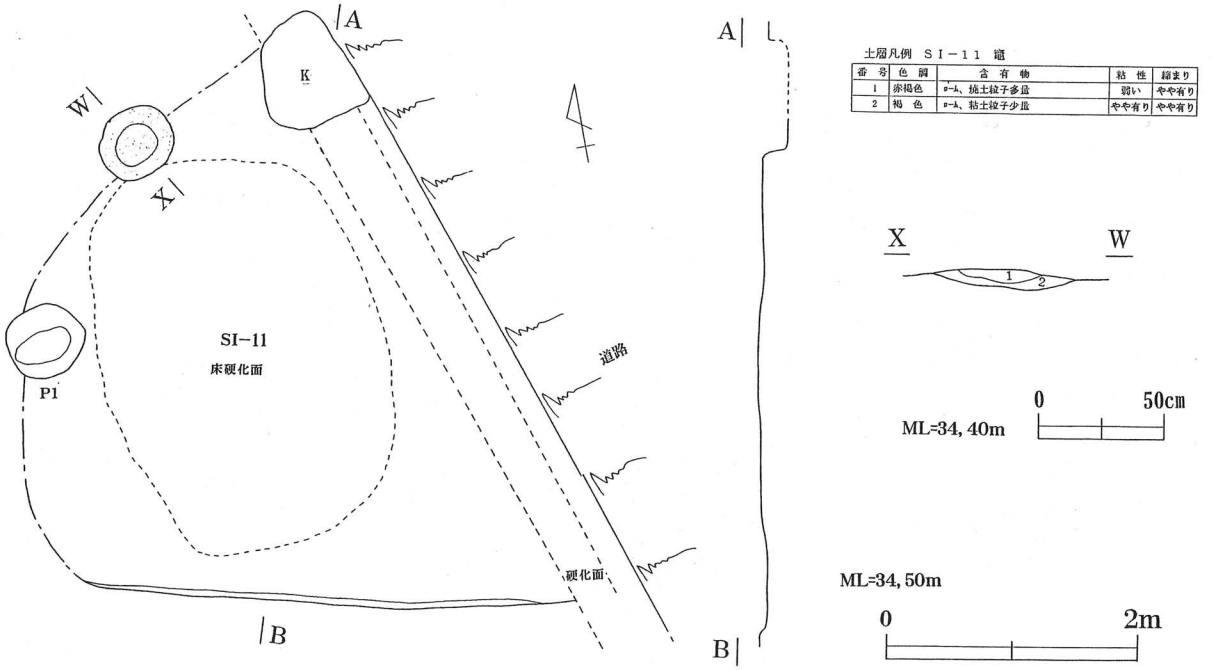
床面は、ほぼ平坦で竈前から南側に良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

ピットは、竈西側に１ヶ所認められ径６０cm、深さ２０cmの円形。反対側には抜根による撹乱抗がみられた。

竈は、北壁に位置し砂質粘土が少量認められた。楕円形状で袖部幅６０cm。明確な焚口、煙道部は認められず、赤褐色の焼土が中央に見られ火床部と思われる。火熱を受け赤褐色を呈し、焼き締まりは無い。

覆土は１層、最大厚さ５cmで褐色、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片３９（甕３３・坏6）須恵器片９（甕４・坏５）がみられた。いずれも細片で



第１４図　１１号住居跡実測図

図示できるものは無かった。
本跡は出土遺物、竈の特徴から８世紀から９世紀代と思われる。

１２号住居跡と出土遺物（第１５図・図版４、８）

本跡は調査区東側グリットＦ３区に位置し、南側にゆるく傾斜している。西側で８号住居跡に一部を埋め複合関係にある。プランは東西４．２ｍ、南北４．９ｍを呈し、隅丸方形。主軸をＮ－３２°－Ｅに置く。壁高は北側で５cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈前面及び中央が円形状に良く踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

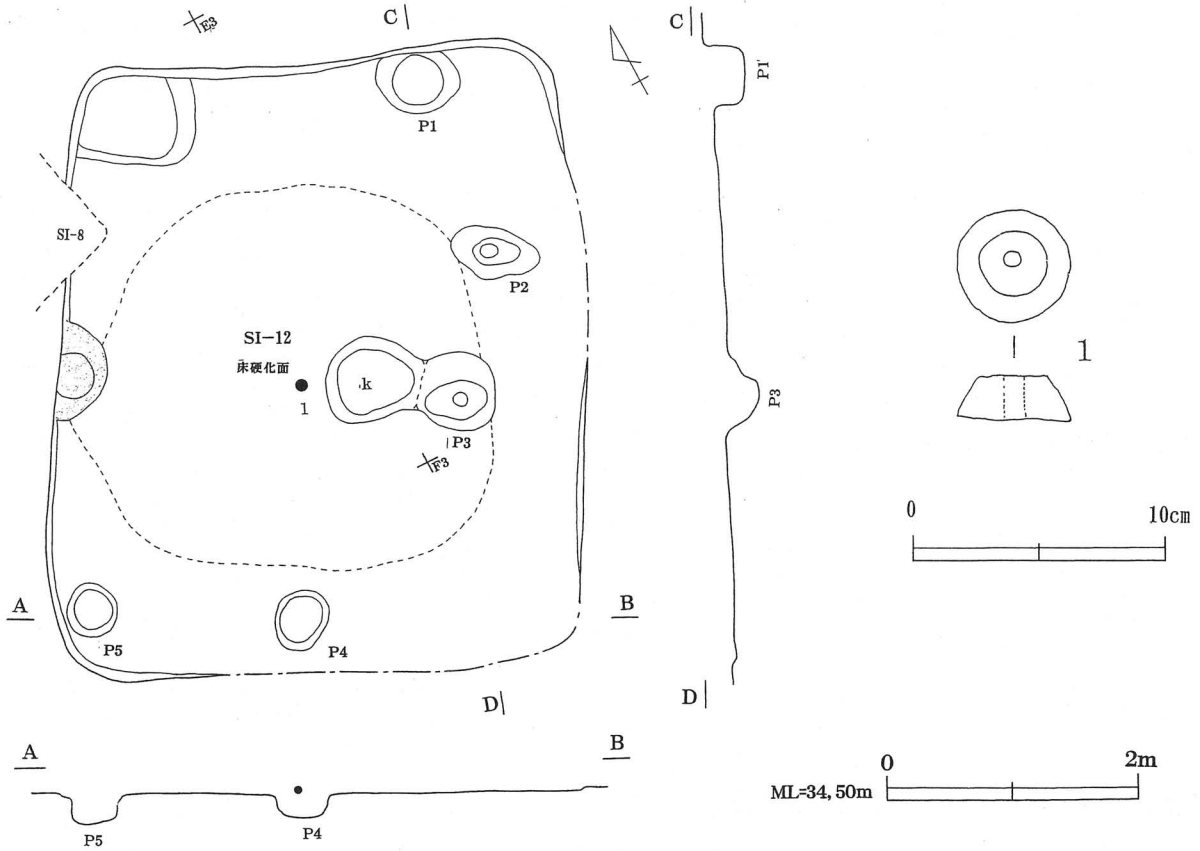
ピットは、５ヶ所認められたが主柱穴と思われるものは無い。Ｐ１は長径７０cm、深さ３５cm。Ｐ２は長径７０cm、短径４０cmの長円状。中央部が深さ２０cmと深い。Ｐ３は径６０cm、深さ３０cmでＰ２と似た掘り方をもつ。Ｐ４は径４０cm、深さ１５cm、Ｐ５は径４０cm、深さ２０cmで鍋底状の掘り方。

竈は、西壁中央に位置し半円状に付設され、外部への張り出しは無い。袖部幅８０cm、中央に円形状の焼土がみられ火床部と思われた。火熱を受け淡い赤褐色を呈し焼き締まりは弱い。

覆土は、１層で褐色、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片５７（甕３２・坏２５）須恵器片８（甕４・坏４）、中央床面から石製紡錘車が出土している。

本跡は複合関係、竈、方位、出土遺物から９世紀初頭の時期が考えられる。



第１５図　１２号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	色調	備考
1	紡錘車 滑石製	径2,8×4,5 高1,8孔0,7	ほぼ正円で台形状		灰白色	床直 46g

第９表　１２号住居跡出土遺物観察表

１３号住居跡と出土遺物（第１６図・図版４、５、８）

本跡は調査区東側のグリットＦ２区に位置し、南東側にゆるく傾斜している。北東側では１５号住居跡を埋めている。プランは東西３ｍ、南北４．５ｍの長方形状を呈し主軸をＮ－４５°－Ｗに置く。壁高は１５cmと低い。

床面は、ほぼ平坦で竈の前面から南壁まで踏み固められている。壁溝は認められなかった。

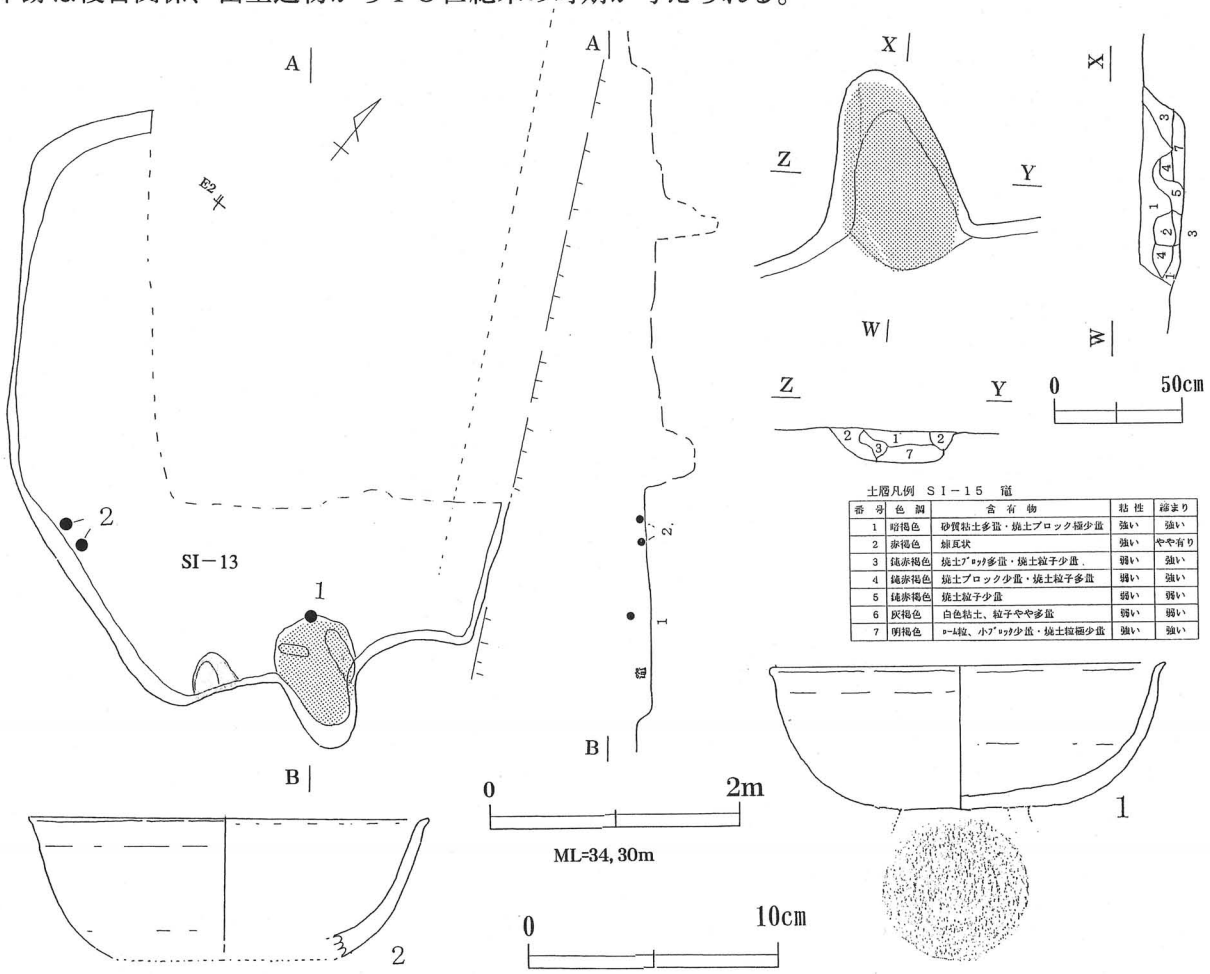
ピットは、認められなかった。

竈は、南壁に位置「Ｕ」字状に付設され、焚口から煙道部まで１００cm、袖部幅７０cmで外部へは「Ｕ」字状に６０cm張出す。火床部は５cm程掘り込み中央に位置、火熱を受け赤褐色を呈し焼き締まりは強い。

覆土は、２層に分けられたが一部人為的な部分もみられるが大部分を占める１層は褐色で自然埋積、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片２９（甕２７・坏２）須恵器片３（甕１・坏２）がみられた。また碗形土器は回転糸切り痕を残している。

本跡は複合関係、出土遺物から１０世紀末の時期が考えられる。



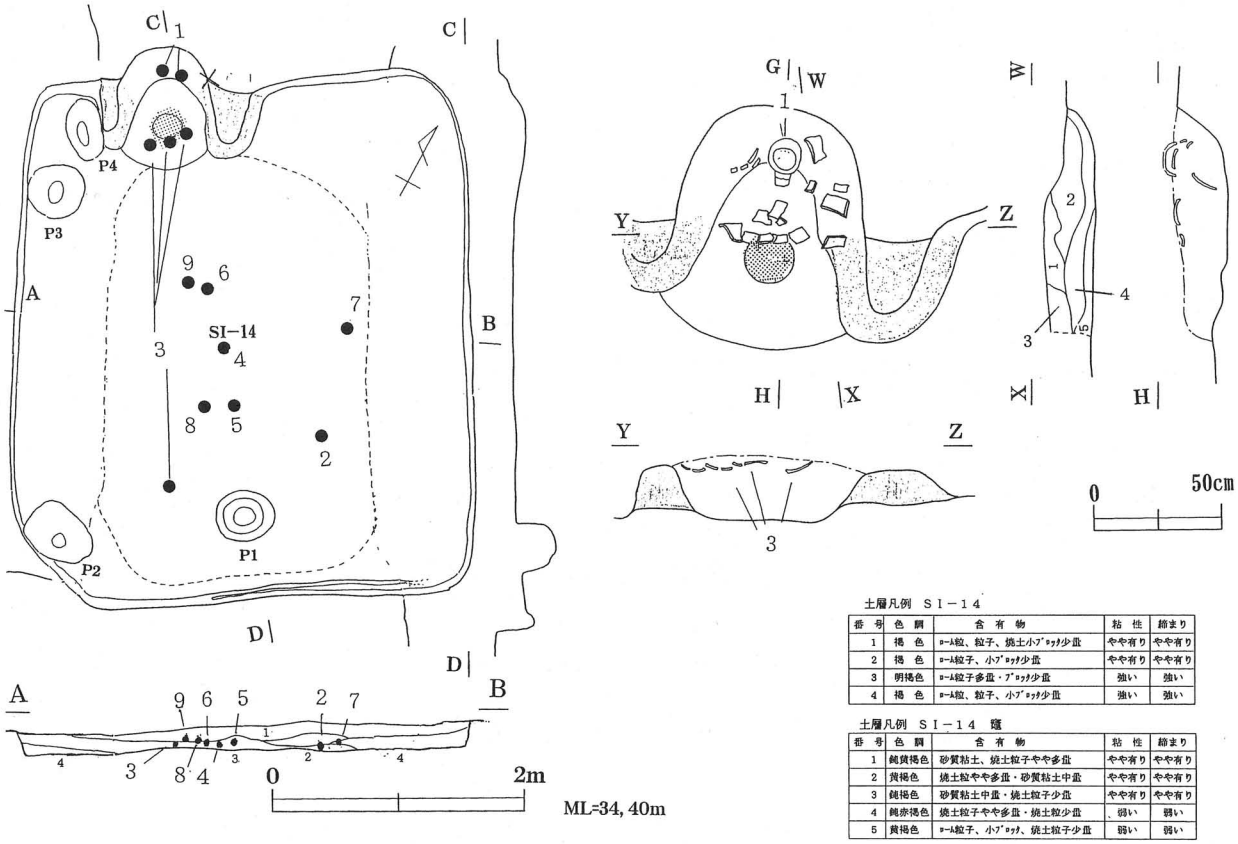
第１６図　１３号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 高台坏	A　15,8 B　5,7 C　7	弱く内湾気味に立ち上がる 口唇部外反尖り気味 ﾛｸﾛ成形痕を残す	ナデ	砂中量 黄褐色・内黒褐色 良	50% 竈中
2	土師器 碗	A　16 B C	底部が欠失しているが台付と思われる　体部は内湾気味に立ち上がり口唇部は開く二次焼成	ナデ	細石少量 鈍い黄褐色 普通	40% 覆土

第１０表　１３号住居跡出土遺物観察表

１４号住居跡と出土遺物（第１７図・図版５、８）

本跡は調査区東側のグリットＥ２区に位置し、東南側にゆるく傾斜している。東側では７号住居跡、西側では６号住居跡を掘り込んでいる。プランは東西３．５ｍ南北４ｍの方形状を呈し主軸をＮ

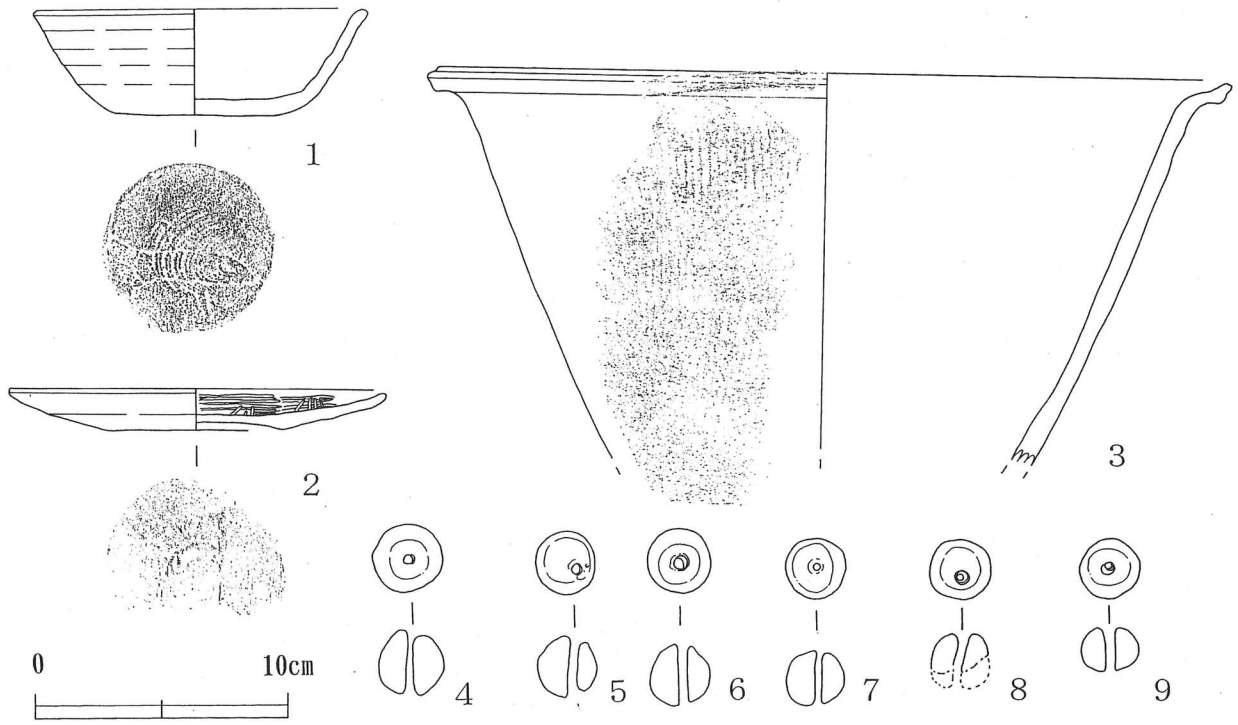


土層凡例　ＳＩ－１４

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	ﾛｰﾑ粒、粒子、焼土小ﾌﾞﾛｯｸ少量	やや有り	やや有り
2	褐色	ﾛｰﾑ粒子、小ﾌﾞﾛｯｸ少量	やや有り	やや有り
3	明褐色	ﾛｰﾑ粒子多量・ﾌﾞﾛｯｸ少量	強い	強い
4	褐色	ﾛｰﾑ粒、粒子、小ﾌﾞﾛｯｸ少量	強い	強い

土層凡例　ＳＩ－１４　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	鈍黄褐色	砂質粘土、焼土粒子やや多量	やや有り	やや有り
2	黄褐色	焼土粒やや多量・砂質粘土中量	やや有り	やや有り
3	鈍褐色	砂質粘土中量・焼土粒子少量	やや有り	やや有り
4	鈍赤褐色	焼土粒子やや多量・焼土粒少量	弱い	弱い
5	黄褐色	ﾛｰﾑ粒子、小ﾌﾞﾛｯｸ、焼土粒子少量	弱い	弱い



第１７図　１４号住居跡・出土遺物実測図

－３０°－Wに置く。壁高は２０cmと高い。

床面は、ほぼ平坦で竈の前面から南壁まで良く踏み固められている。壁溝は南壁面に一部認められた。

ピットは、４ヶ所認められＰ１は長径５０cm、深さ３０cmの楕円形状。Ｐ２は２５cm、Ｐ３は２６cm。Ｐ４は竈西側に位置する長円状の小穴。

竈は、北壁に位置「U」字状に付設され、焚口から煙道部まで１００cm、袖部幅１４０cmで外部へは半円状に５０cm張出す。火床部は中央に位置、５cm程掘り込み火熱を受け赤褐色を呈し焼き締まりは弱い。

覆土は、４層に分けられたが一部人為的な部分もみられるが大部分を占める１・２層は褐色で自然埋積、粘性、締まりはやや有る。

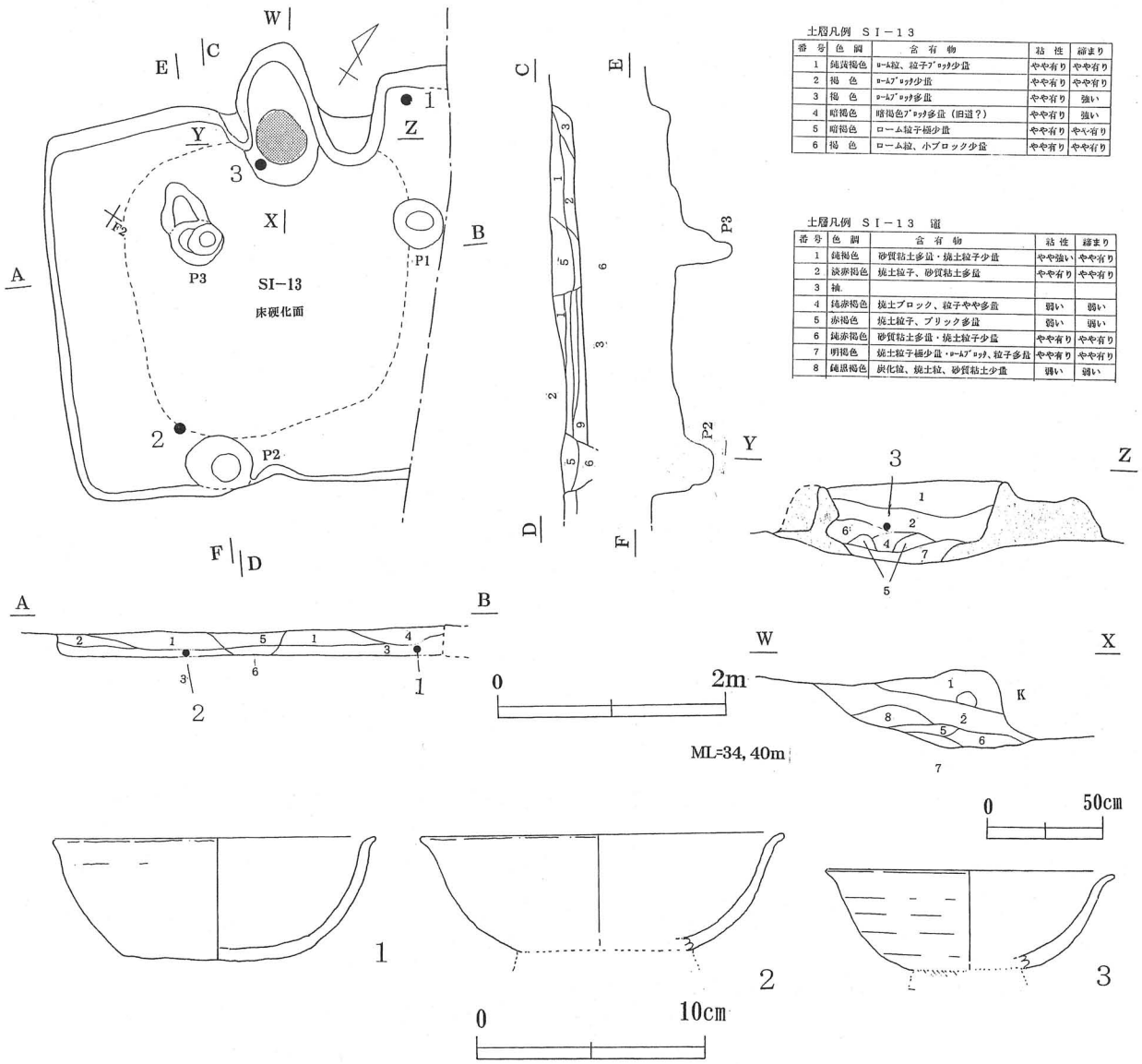
遺物は、土師器片２５１（甕１７０・坏８１）須恵器片４２（甕２０・坏２２）がみられた。本遺跡では唯一の皿が出土している。また坏形土器は回転糸切り痕を残している。
本跡は複合関係、出土遺物から９世紀末の時期が考えられる。

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 坏	A　13,5 B　4,2 C　6,5	平底から内湾気味に立ち上がり 口唇部は外反し丸く収める 回転糸切り痕を残す	回転糸切り ナデ	砂少量 鈍い黄橙色 普通	90% 竈中
2	土師器 皿	A　15 B　1,7 C　7	底部は上底気味 体部はほぼ 水平に近い 内面は黒色 細かな ヘラ磨きが施される	回転ヘラ切り ナデ ヘラ磨き	精選 鈍い黒褐色 良	60% 床直
3	須恵質 甑	A　32 B C	三角形状で口縁部は水平に開き 口唇部はつまみ出し気味 沈線タタキ目内面は指頭圧痕	タタキ目 ナデ 指頭押圧	雲母・細石少量 鈍い橙色 良	20% 竈中
4	土製 丸玉	径2,8×2,6 孔径0,3	ほぼ球形状　一部磨耗	ナデ調整	砂やや多量 橙色　良	覆土 15ｇ
5	〃 〃	径2,4×2,4 孔径0,4	ほぼ球形　孔部偏る　磨耗	ナデ調整	砂やや多量 橙色　良	覆土 11ｇ
6	〃 〃	径2,5×2,5 孔径0,5	ほぼ球形　孔部尖る　磨耗	ナデ調整	砂やや多量 橙色　良	覆土 13ｇ
7	〃 〃	径2,3×2,2 孔径0,3	孔は小さめ　磨耗	ナデ調整	砂やや多量 橙色　良	覆土 11ｇ
8	〃 〃	径2,4×2,3 孔径0,5	30%欠失　磨耗	ナデ調整	砂やや多量 橙色　良	覆土 8ｇ
9	〃 〃	径2,3×1,7 孔径0,4	潰れた球形状　磨耗	ナデ調整	砂やや多量 橙色　良	覆土 8ｇ

第１１表　１４号住居跡出土遺物観察表

１５号住居跡と出土遺物（第１８図・図版５、９）

本跡は調査区東側グリットＥ２区に位置し、南側にゆるく傾斜している。南側で１３号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。東側の一部が道路によって削平されているがプランは東西約３．５ｍ、南北３．４ｍの方形状を呈すると思われ、主軸をＮ－４０°－Ｗに置く。壁高は北側で２０cmとやや高い。



土層凡例　ＳＩ－１３

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	純黄褐色	ﾛｰﾑ粒、粒子ﾌﾞﾛｯｸ少量	やや有り	やや有り
2	褐　色	ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ少量	やや有り	やや有り
3	褐　色	ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ多量	やや有り	強い
4	暗褐色	暗褐色ﾌﾞﾛｯｸ多量（旧道？）	やや有り	強い
5	暗褐色	ローム粒子極少量	やや有り	やや有り
6	褐　色	ローム粒、小ブロック少量	やや有り	やや有り

土層凡例　ＳＩ－１３　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	純褐色	砂質粘土多量・焼土粒子少量	やや強い	やや有り
2	淡赤褐色	焼土粒子、砂質粘土多量	やや有り	やや有り
3	補.			
4	純赤褐色	焼土ブロック、粒子やや多量	弱い	弱い
5	赤褐色	焼土粒子、ブリック多量	弱い	弱い
6	純赤褐色	砂質粘土多量・焼土粒子少量	やや有り	やや有り
7	明褐色	焼土粒子極少量・ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ、粒子多量	やや有り	やや有り
8	純黒褐色	炭化粒、焼土粒、砂質粘土少量	弱い	弱い

第１８図　１５号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 碗	A 14 B 5,3 C 7	内湾気味に立ち上がり口唇部外反 底部は凹凸気味で内側黒褐色	ナデ	雲母・砂少量 褐色　内黒褐色 良	60% 竈袖
2	土師器 台付碗	A 16 B C	弱く外反し口縁部は開く 口唇部は丸く収める　内側煤付着 底部に付け高台痕有り	ナデ	スコリア少量 鈍い黄褐色 内灰青色　良	20% 床直
3	土師器 台付碗	A 12,5 B C	2をやや小型にした器形 ロクロ成形痕を残す 底部に付け高台痕有り	ナデ	砂多量 橙色 良	20% 竈中

第１２表　１５号住居跡出土遺物観察表

床面は、浅い凹凸がみられるが、竈前面から良く踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

ピットは、３ヶ所認められＰ１は径４０cm、深さ５０cmの楕円形。Ｐ２は径５０cm、深さ４０cmで楕円形。Ｐ３は長径４５cm、深さ５０cmの楕円形。いずれも主柱穴と思われる。１ヶ所は欠失部に位置するか。

竈は、北壁中央に位置し長円状に付設され、焚口から煙道部まで１２０cm、袖部幅１４０cm、外部へは半円状に５０cm張出す。左袖部は小さい。焚口部は広く、火床部は前面に位置し火熱を受け赤褐色を呈し焼き締まりは強い。

覆土は、６層で褐色と焼土粒子、ブロック等を含む赤褐色等がみられ、一部近世の掘り込みがみられた。他はレンズ状の自然埋積、粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片３０２（甕２４８・坏５４）須恵器片２４（甕６・坏１８）がみられた。図示したものは土師器で碗形台付。

本跡は複合関係、出土遺物から９世紀末の時期と考えられる。

１６号住居跡と出土遺物（第１９図・図版５、９）

本跡は調査区中央部南側グリットＦ９区に位置し、南側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは東西３ｍ、南北３ｍの方形を呈し主軸をＮ－２°－Ｅに置く。壁高は４０cmと高い小型の住居跡である。

床面は、ゆるく東側に傾斜、白色粘土が認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は幅１５cmから２５cmで巡り掘り込みは１０cm前後と深い。これは粘土層のためと思われる。

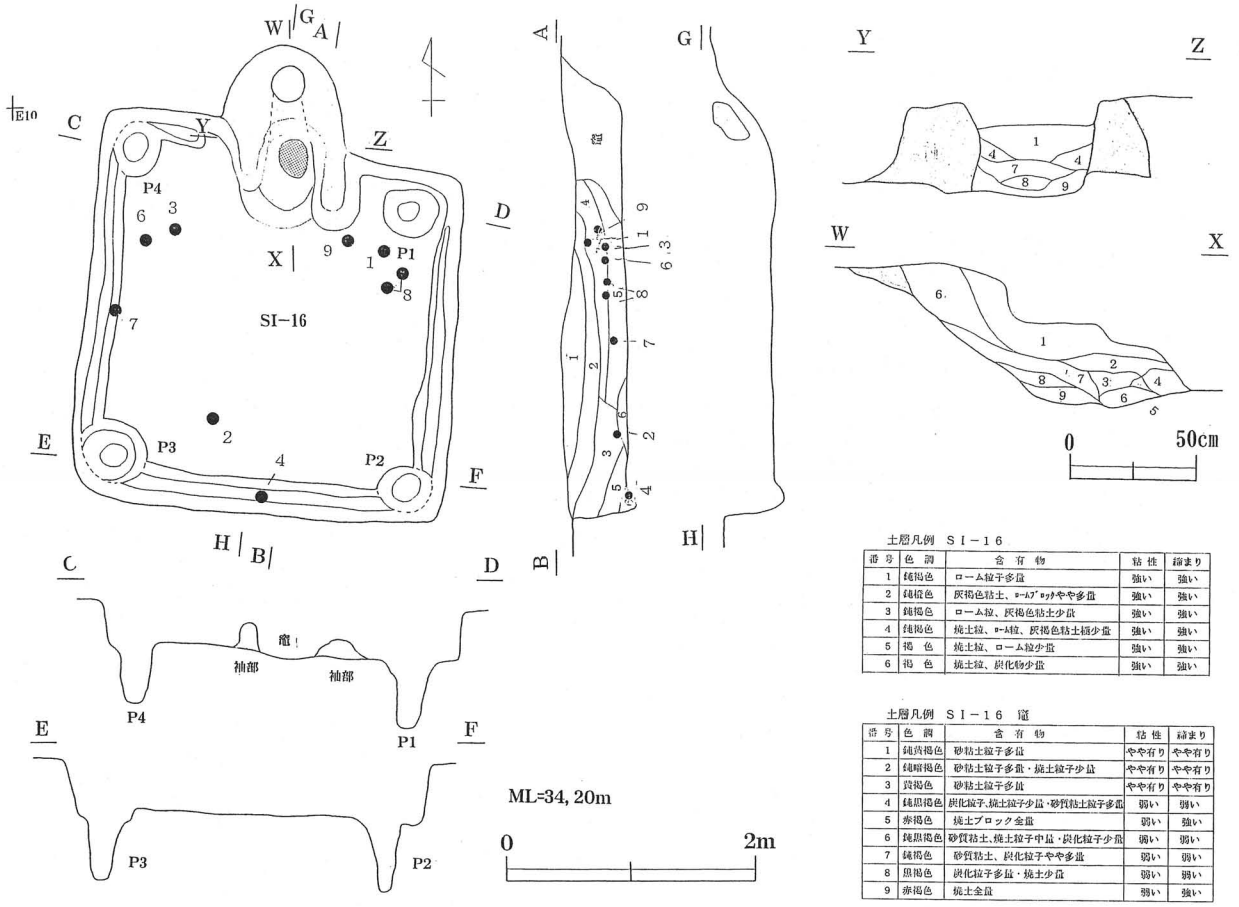
ピットは各隅部に位置して４ヶ所認められた。Ｐ１は径４５cm、深さ５５cmの円形。Ｐ２は４５cm、深さ５５cmの円形。Ｐ３は径５０cm、深さ６０cmの円形状。Ｐ４は径４０cm、深さ５０cmの円形でほぼ共通した掘り込みをもつ。

竈は、北壁中央部に位置し「U」字状に付設され、焚口から煙道部まで１５０cm、袖部幅１００cm、外部へは半円状に７０cm張出す。焚口部は直線的に伸び、火床部は中位に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強く、煙道部を残す。

覆土は、６層で２・３・４層は灰褐色粘土粒を含み、粘性、締まりはやや強い。層序はレンズ状の自然埋積。

遺物は、土師器片２５２（甕２２８・坏２４）須恵器片７８（甕３５・坏４３）が認められた。図示したものは須恵器甕、坏、台坏で底部は回転糸切り、ヘラ切り、ナデ調整などがみられる。竈の隣覆土から出土した１０は、刀子の一部で遺存長５．２cm。かなり細く使い込まれている。

本跡は出土遺物から８世紀末の時期が考えられる。

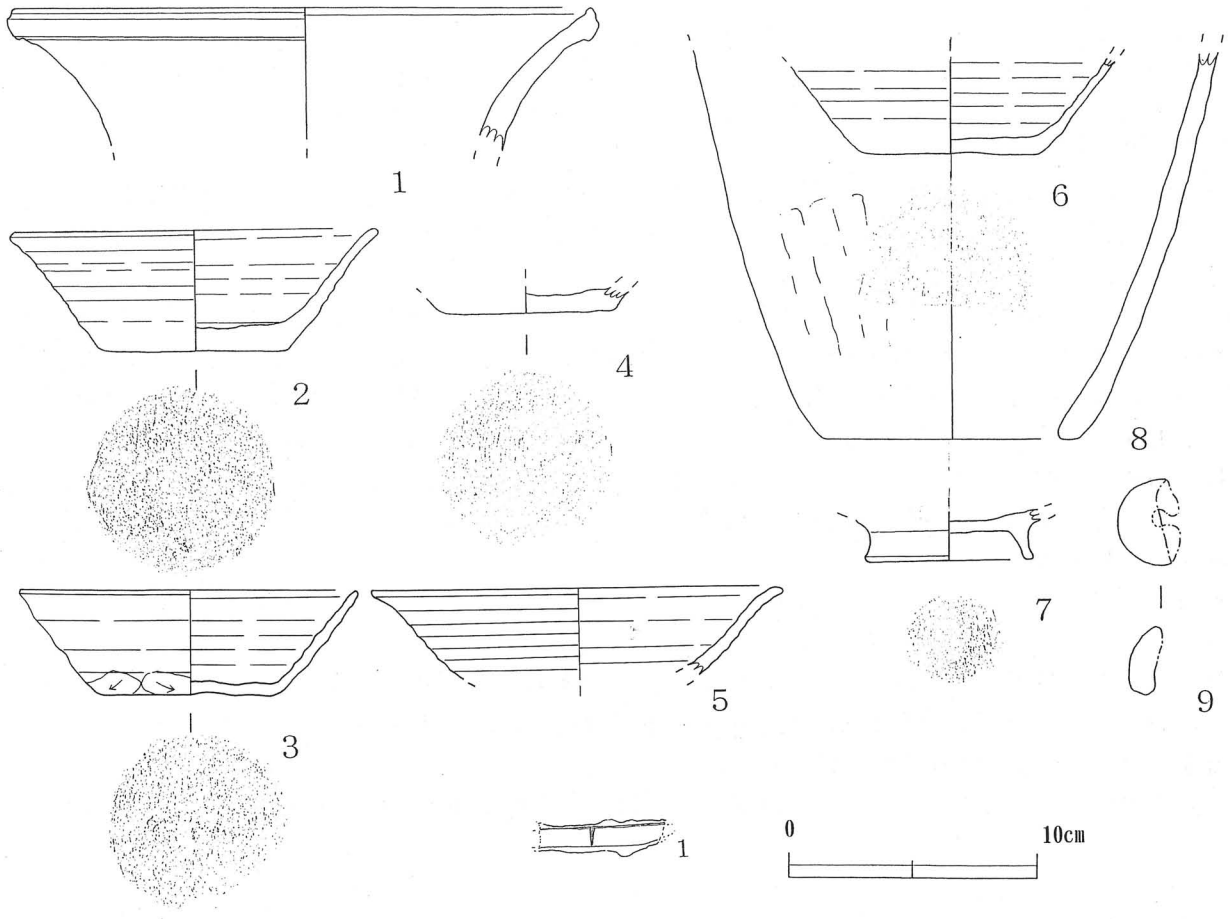


土層凡例　ＳＩ－１６

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	鈍褐色	ローム粒子多量	強い	強い
2	鈍橙色	灰褐色粘土、ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸやや多量	強い	強い
3	鈍褐色	ローム粒、灰褐色粘土少量	強い	強い
4	鈍褐色	焼土粒、ﾛｰﾑ粒、灰褐色粘土塊少量	強い	強い
5	褐　色	焼土粒、ローム粒少量	強い	強い
6	褐　色	焼土粒、炭化物少量	強い	強い

土層凡例　ＳＩ－１６　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	鈍黄褐色	砂粘土粒子多量	やや有り	やや有り
2	鈍暗褐色	砂粘土粒子多量・焼土粒子少量	やや有り	やや有り
3	黄褐色	砂粘土粒子多量	やや有り	やや有り
4	鈍黒褐色	炭化粒子,焼土粒子少量・砂質粘土粒子多量	弱い	弱い
5	赤褐色	焼土ブロック全量	弱い	強い
6	鈍黒褐色	砂質粘土、焼土粒子中量・炭化粒子少量	弱い	弱い
7	鈍褐色	砂質粘土、炭化粒子やや多量	弱い	弱い
8	黒褐色	炭化粒子多量・焼土少量	弱い	弱い
9	赤褐色	焼土全量	弱い	強い



第１９図　１６号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	須惠質 甕	A　23 B C	器肉は厚く器形から大型の甕か 口縁部外反　口唇部摘み出す	ナデ 横ナデ	雲母・砂少量 鈍い黒褐色 普通	10% 覆土
2	須惠器 坏	A　14,7 B　4,7 C　7,2	体部は外反　口唇部は丸く収める 成形痕は微妙　ナデ	回転ヘラ切り ナデ	精選 灰褐色 良	80% 覆土
3	須惠器 坏	A　13,5 B　4,2 C　7	器肉は薄く体部外反 口唇部丸く収める成形痕内外 面に顕著に残る体部ヘラ削り	回転ヘラ切り ナデ	雲母・細石多量 灰褐色 良	50% 竈中
4	須惠器 坏	A B C　7	底部のみ器肉は７㎜とやや厚い 回転糸きり痕を明瞭に残す	回転糸きり ナデ	細石中量 灰褐色 良	30% 壁溝
5	須惠器 坏	A　16,5 B C	体部は強く外反　口縁部は 水平に近い口唇部は丸く収める 成形痕顕著	ナデ	雲母・細石少量 淡い灰褐色 良	10% 覆土
6	土師器 坏	A B C　6,8	体部は外反　内面に成形痕顕著 底部回転ヘラ切り痕	回転ヘラ切り ナデ	細石・雲母中良 黒褐色・内面黄褐色 普通	40% 覆土
7	須惠器 高台坏	A B C　6,7	高台は「ハ」の字状やや長め 器肉は総じて薄い　付け高台	回転ヘラ切り ナデ	細石中量 青灰褐色 良	30% 覆土
8	土師器 甑	A B C　10	弱く外反して立ち上がる 孔部肥厚　長胴形か 器面凹凸	ナデ ヘラ削り	細石・雲母多量 橙色 良	20% 覆土
9	土製 丸玉	径3,5× 孔径0,6	1/2欠失　孔部磨耗	カット状 指頭押圧	砂やや多量 橙色　良	11ｇ 覆土

第１３表　１６号住居跡出土遺物観察表

１７号住居跡と出土遺物（第２１図・図版５、９）

本跡は調査区西側グリットＥ１４区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは東西５．８ｍ、南北約５．３ｍの方形状を呈し、主軸をＮ－９２°－Ｅに置く。壁高は東側で２０cmとやや高い。

床面は、ゆるく南側に傾斜、２／５程撹乱。一部に白色粘土が認められた。明確な硬化面は無い。壁溝は北、東西に幅１５cmから２０cmで巡り、掘り込みは１０cm前後と深い。これは粘土層のためと思われる。

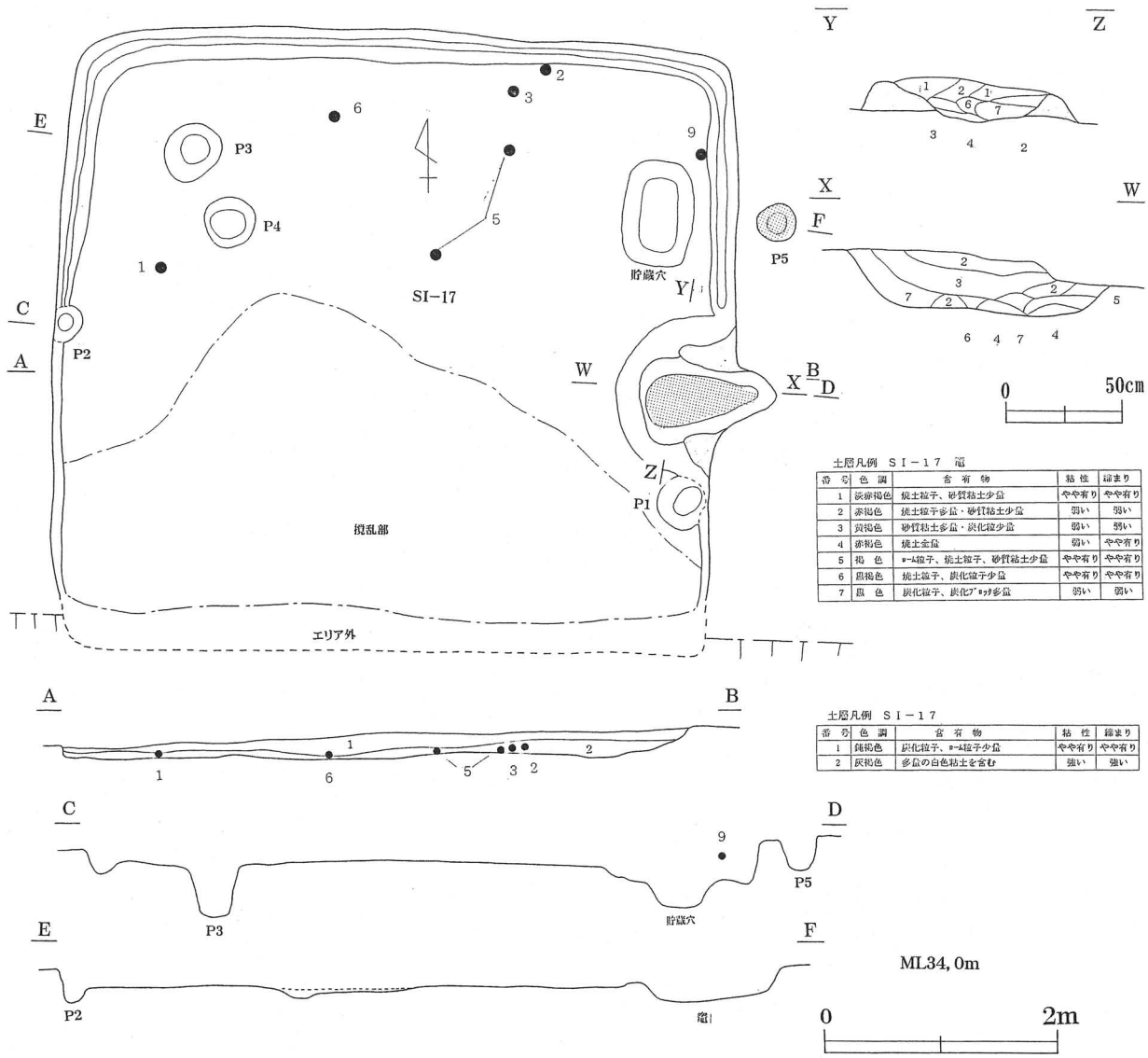
ピットは４ヶ所認められた。Ｐ１は竈右側に位置し径４０cm、深さ１５cmの円形。Ｐ２は西壁中央に位置し径２０cm、深さ１５cmの円形。Ｐ３は西隅に位置し径４５cm、深さ４５cmの円形状。Ｐ４は径４０cm、深さ１０cmの円形で主柱穴と思われるものはＰ３のみ。竈左側には長方形状の貯蔵穴がみられ長辺９０cm、短辺６０cm、深さ４０cm。遺構東側にＰ５が認められ焼土が充満していた。

竈は、東壁中央部に位置し袖部は短く付設され、焚口から煙道部まで１２０cm、袖部幅１２０cm、外部へは「U」状に３０cm張出す。焚口部は弱く「ハ」の字状に開く、火床部は奥まで伸び火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。

覆土は２層、大半を占める１層は多量の白色粘土粒を含み、粘性、締まりは強い。自然埋積と思われる。

遺物は、土師器片４７６（甕３７４・坏１０２）須惠器片２（甕１・坏１）が認められた。図示したものはすべて土師器で小形の坏と壺と碗、器形は浅く口縁部内傾し、肩部に弱い稜をもつ坏、口縁部が水平にちかく外反する高坏がみられた。

本跡は東側に竈をもつ住居跡で出土遺物も多かった。７世紀初頭の時期が考えられる。



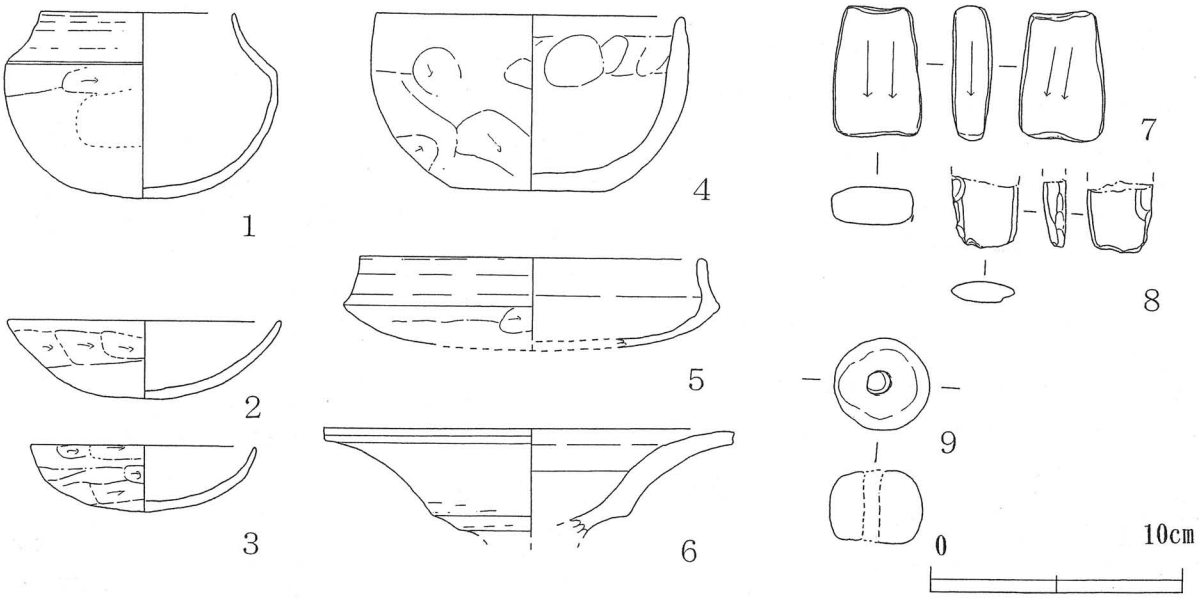
土層凡例　ＳＩ－１７　電

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	淡赤褐色	焼土粒子、砂質粘土少量	やや有り	やや有り
2	赤褐色	焼土粒子多量・砂質粘土少量	弱い	弱い
3	黄褐色	砂質粘土多量・炭化粒少量	弱い	弱い
4	赤褐色	焼土全量	弱い	やや有り
5	褐　色	ﾛｰﾑ粒子、焼土粒子、砂質粘土少量	やや有り	やや有り
6	黒褐色	焼土粒子、炭化粒子少量	やや有り	やや有り
7	黒　色	炭化粒子、炭化ﾌﾞﾛｯｸ多量	弱い	弱い

土層凡例　ＳＩ－１７

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	純褐色	炭化粒子、ﾛｰﾑ粒子少量	やや有り	やや有り
2	灰褐色	多量の白色粘土を含む	強い	強い

第２０図　１７号住居跡実測図



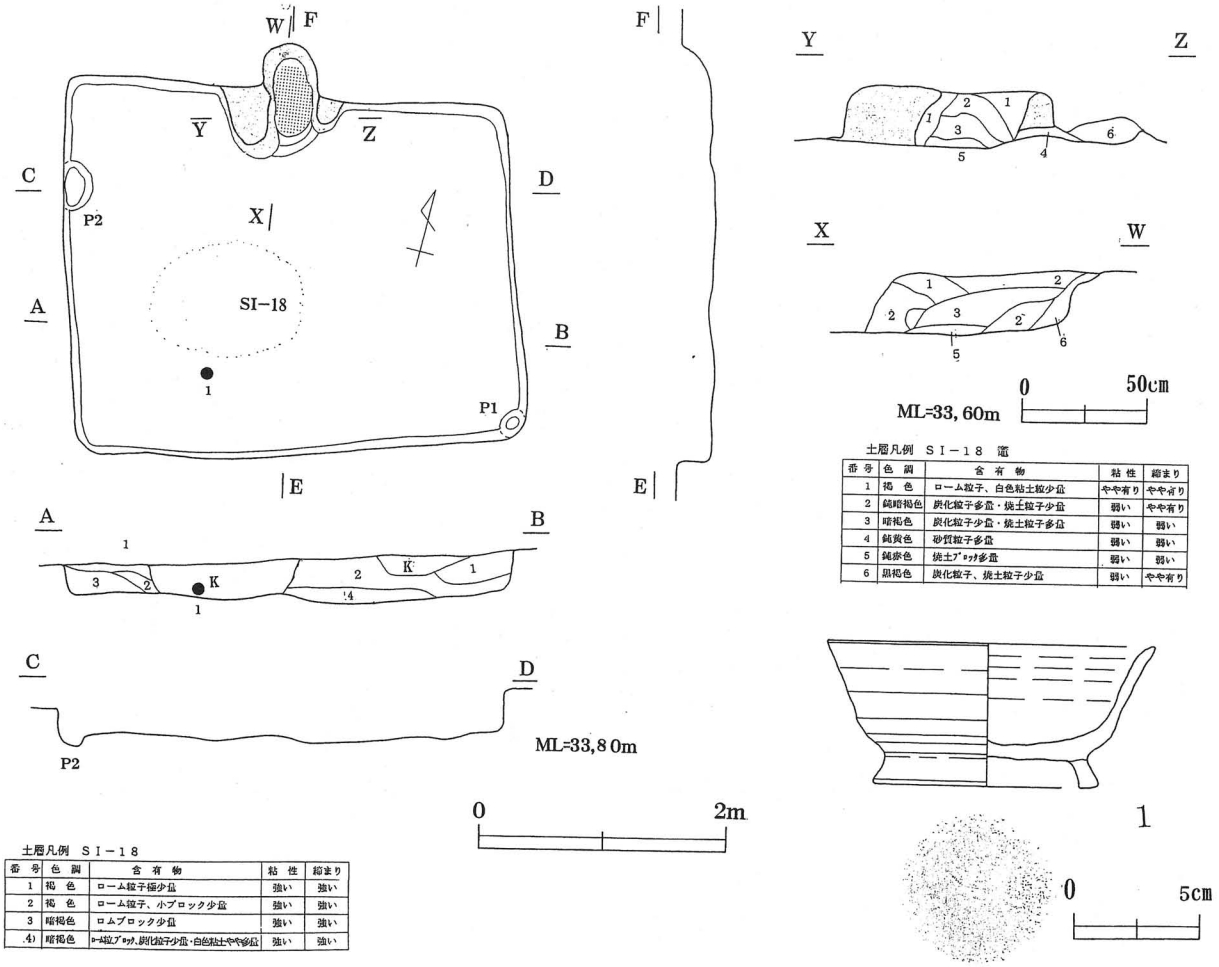
第２１図　１７号住居跡出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 小形壺	A　7,7 B　7,6 C　1	丸底状 弱く外反して立ち上がり 肩部で内湾 器肉は３㎜と薄い	ヘラ削り 横ナデ・ナデ	細石・砂中量 鈍い黄橙色 普通	95% 床直
2	土師器 坏	A　10,9 B　3,2 C　1,5	半円状器形　口唇部丸く収める 器肉は４㎜でほぼ一定	ヘラ削り ナデ ヘラ磨き	砂・細石中量 鈍い黒褐色 普通	完 床直
3	土師器 坏	A　9 B　2,6 C　2	体部ほ外反はやや弱い 口唇部は尖り気味 器形から皿より碗に近い	ヘラ削り ナデ	砂・細石中量 鈍い黒褐色 普通	90% 床直
4	土師器 碗	A　12,3 B　7,1 C　6,2	平底体部は直立口縁部内傾気味 口唇部やや尖り気味器肉８㎜ 前後と厚め　やや粗雑	ヘラ削り ナデ指頭調整	砂・細石中量 鈍い黄橙色 普通	40% 撹乱
5	土師器 坏	A　14 B C	肩部にやや顕著な稜を持つ 口縁部内傾　口唇部は丸く収める 器面粗雑	ヘラ削り 横ナデ・ナデ	砂多量 橙色 普通	20% 床直
6	土師器 高坏	A　16,5 B C	坏底部を欠失するが体部は強く 外反 弱い稜を残す 器面粗雑	横ナデ・ナデ	砂多量 赤褐色 普通	10% 覆土
7	石器 砥石？	長5,4厚1,5 幅3,3	粘板岩　三方に使用痕有り 磨耗進まず　粘板岩?		完	44ｇ
8	石器	長2,6厚0,8 幅2,5	基部欠失 刃部両端剥離面を残す 緑泥岩			9ｇ
9	土製 丸玉	径3,7×2,8 孔径0,9	両端カット状　一部磨耗	ナデ調整	砂多量 鈍い橙色 普通	覆土 36ｇ

第１４表　１７号住居跡出土遺物観察表

１８号住居跡と出土遺物（第２２図・図版５、６、９）

本跡は調査区西側グリットＥ１６区に位置し、北側にゆるく傾斜している。南側で２１号住居跡



土層凡例　ＳＩ－１８　道

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	ローム粒子、白色粘土粒少量	やや有り	やや有り
2	鈍暗褐色	炭化粒子多量・焼土粒子少量	弱い	やや有り
3	暗褐色	炭化粒子少量・焼土粒子多量	弱い	弱い
4	鈍黄色	砂質粒子多量	弱い	弱い
5	鈍赤色	焼土ﾌﾞﾛｯｸ多量	弱い	弱い
6	黒褐色	炭化粒子、焼土粒子少量	弱い	やや有り

土層凡例　ＳＩ－１８

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	ローム粒子極少量	強い	強い
2	褐色	ローム粒子、小ブロック少量	強い	強い
3	暗褐色	ロムブロック少量	強い	強い
4	暗褐色	ローム粒ﾌﾞﾛｯｸ、炭化粒子少量・白色粘土やや多量	強い	強い

第２２図　１８号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	須恵器 台坏	A　13,2 B　5,6 C　9	脚は短め「ハ」の字状に開く 体部は弱く外反 口唇部は開く 内外成形痕	回転糸きり 付け高台	雲母極少量 灰褐色 良	70% 床直

第１５表　１８号住居跡出土遺物観察表

を掘り込み複合関係にある。プランは東西３．６ｍ、南北２．８ｍの長方形状を呈し主軸をＮ－９°－Ｗに置く。壁高は３０cmと高い小型の住居跡である。

床面は、東側がやや低く白色粘土は認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は確認できなかった。

ピットは南東隅部と西壁に位置して２ヶ所認められた。Ｐ１は径２０cm、深さ１５cmの円形。Ｐ２は長径３５cm、深さ１０cmの長円形で主柱穴とは考えられなかった。

竈は、北壁中央部に位置し「Ｕ」字状に付設され、焚口から煙道部まで９０cm、袖部幅１００cm、外部へは「Ｕ」字状に３０cm張出す。袖部は直線的に伸び、左右で大きさに違いがある。火床部は全面にみられ火熱を受け赤褐色で焼き締まりはやや強い。

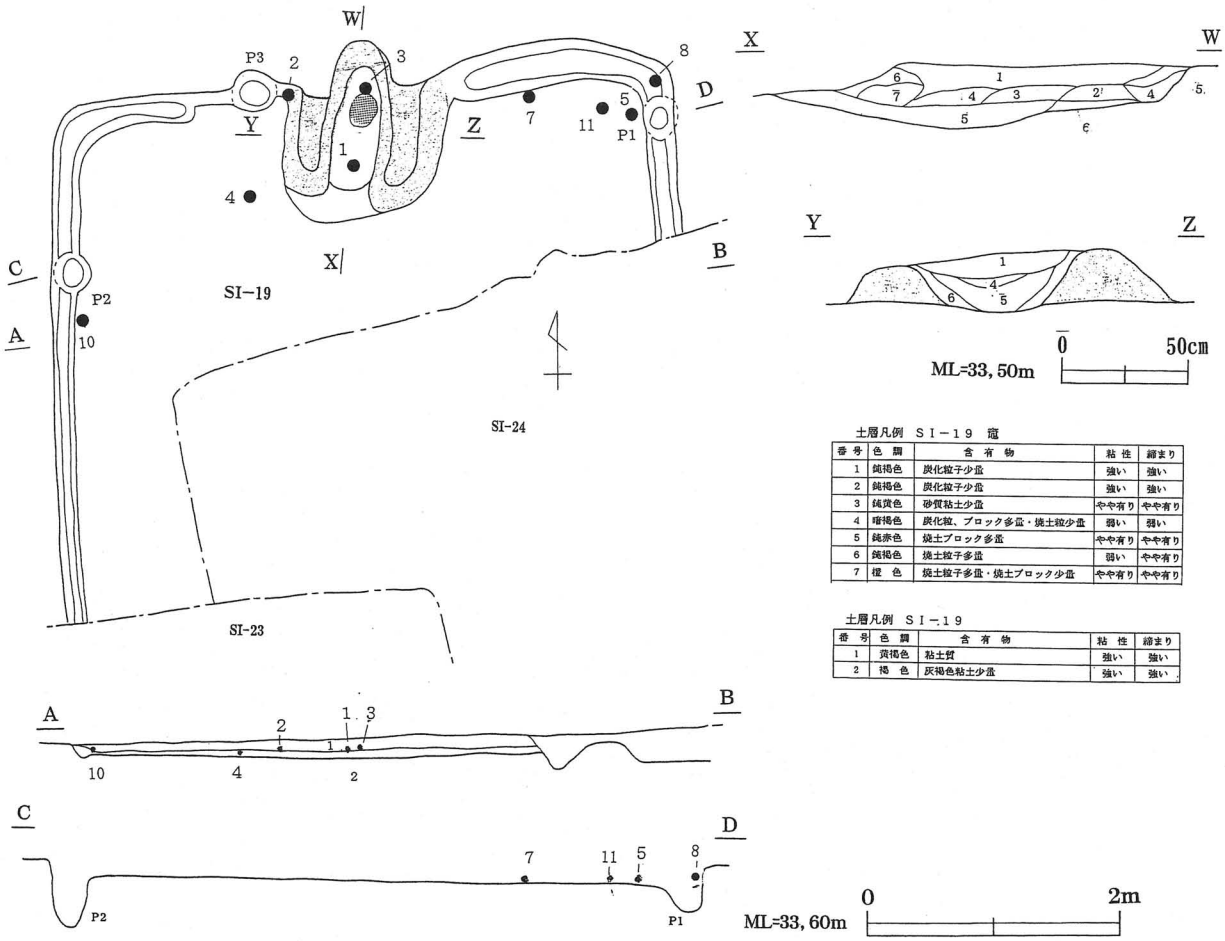
覆土は、４層で中央部に円形状の撹乱が認められた。層序からは人為的な埋積と考えられ白色粘土粒を含む。粘性、締まりは強い。

遺物は、土師器片８６（甕７８・坏８）須恵器片１（坏１）が認められた。図示出来たものは台坏の須恵器のみで少ない。

本跡は出土遺物から８世紀末の時期が考えられる。

１９号住居跡と出土遺物（第２３図・図版６、９）

本跡は調査区西側グリットＥ１７区に位置し、ほぼ平坦。南側で２４・２３号住居跡に掘り込ま



第２３図　１９号住居跡実測図

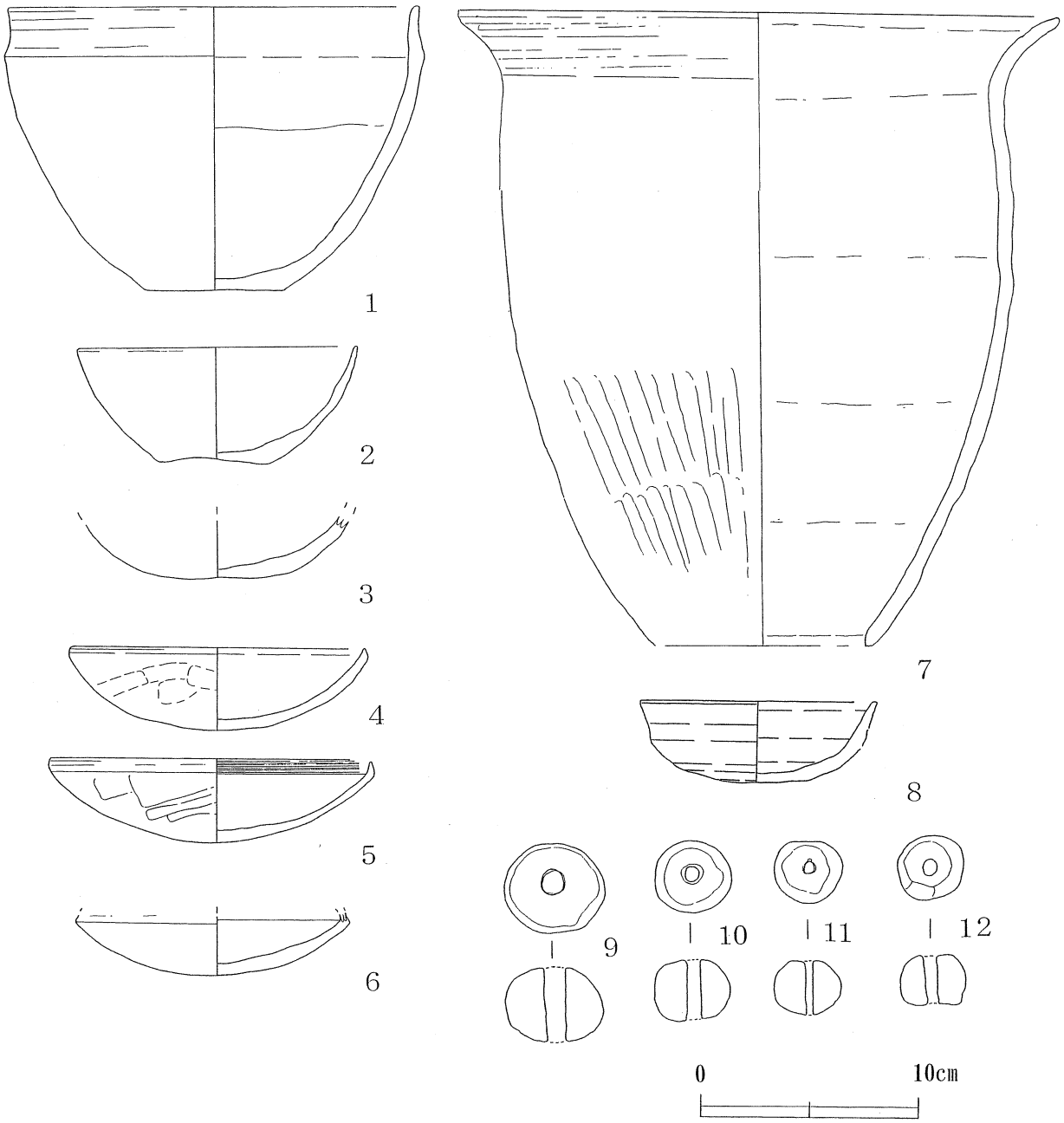
れ複合関係にある。プランは東西５ｍ、南北は掘り込まれて不明。主軸をＮ－５°－Ｗに置く。壁高は東側で１５cmと浅い。

床面は、ほぼ平坦で竈前面が踏み固められている。壁溝は遺存する西、北、東に幅１５cmから２５cmでみられた。

ピットは３ヶ所でいずれも壁溝内で認められたが主柱穴とは考えられない。Ｐ１は径２５cm、深さ１５cmの円形。Ｐ２は径３０cm、深さ４０cmの円形。Ｐ３は径３５cm、深さ１５cmの円形。「Ｕ」字状掘り込み。

竈は、北壁中央部に位置し「Ｕ」字状に細長く付設され、焚口から煙道部１３０cm、袖部幅１３０cmで外部へ４０cm張り出す。袖部は直線的に伸びる。火床部は奥位に認められ火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。

覆土は、２層で水平に堆積している。灰褐色の粘土を含み粘性、締まりは強い。



第２４図　１９号住居跡出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 鉢	A　19 B　13 C　6,4	小さめの底部から外反して立ち上がる 口縁部直立 口唇部弱く開く 内外剥落多 二次焼成	ナデ	砂中量 鈍い赤褐色 普通	80% 竈中
2	土師器 碗	A　13 B　5 C　5	体部内湾気味に立ち上がる 器肉は薄く口唇部尖り気味 内外剥落 二次焼成	ナデ	砂中量 鈍い赤褐色 不良	60% 竈袖
3	土師器 坏	A B C　5	体部は不安定な底部から開いて 立ち上がる 口縁部欠失 内外剥落多 二次焼成	ナデ	砂・細石中量 鈍い赤褐色 不良	30% 竈中
4	土師器 坏	A　13,7 B　3,8 C　3	半球形状 体部は開く 口唇部は短く直立し尖る 内外は一部剥落	ヘラ削り 横ナデ・ナデ	砂少量 黄褐色 良	90% 床直
5	土師器 坏	A　14,7 B　3,8 C　2	半球形状 体部は開く 口唇部は直立し尖る	ヘラ削り 横ナデ・ナデ	砂・スコリヤ中量 暗褐色 普通	70% 床直
6	土師器 坏	A B C　3	半球形状 体部は開く 口唇部は欠失 №4と同様か 二次焼成	ナデ	砂少量 淡い赤褐色 普通	30% 竈中
7	土師器 甑	A　28 B　29,3 C　10	孔部三角形 胴部内湾気味 最大径は胴部上位 口縁部「く」の字状 長胴形	横ナデ・ナデ ヘラ削り	細石中量 鈍い黄褐色 普通	95% 床直
8	須恵器 坏	A　3 B　3,7 C　11	碗状で端部は開き気味 隅部覆土から出土	ナデ	細石・雲母極少量 青灰色 良	70% 覆土
9	土製 丸玉	径4,7×3,5 孔径 1,0	楕円　孔部磨耗　粗雑	ナデ	砂中量 鈍い赤褐色　普	55g 覆土
10	〃 〃	径3,7×2,9 孔径 0,6	楕円　粗雑	ナデ	砂中量 黄褐色　普	30g 覆土
11	〃 〃	径3,0×2,6 孔径 0,4	楕円　孔部カット状　不整形 粗雑	ナデ	砂中量 黄褐色　普	18g 覆土
12	〃 〃	径3,0×2,3 孔径 0,6	両端カット　粗雑	ナデ	砂中量 鈍い黄褐色　普	18g 覆土

第１６表　１９号住居跡出土遺物観察表

遺物は、土師器片２３５（甕２２２・坏１３）須恵器片６（甕２・坏４）が認められた。図示したものは須恵器坏１点、坏はいずれも丸底の球形状。口唇部は尖り直立する。鉢は安定した平底、甑は口縁部は強く外反し長胴形。

本跡は複合関係、出土遺物から７世紀中葉の時期が考えられる。

２０号住居跡と出土遺物（第２５図・図版６、９）

本跡は調査区西側グリットＥ１６区に位置し、ほぼ平坦。南側で２４号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。プランは東西約４．１ｍ、南北約３．８ｍの方形を呈し、主軸をＮ－９°－Ｗに置く。壁高は確認できなかった小型の住居跡である。

床面は、ほぼ平坦で中央部のみ踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

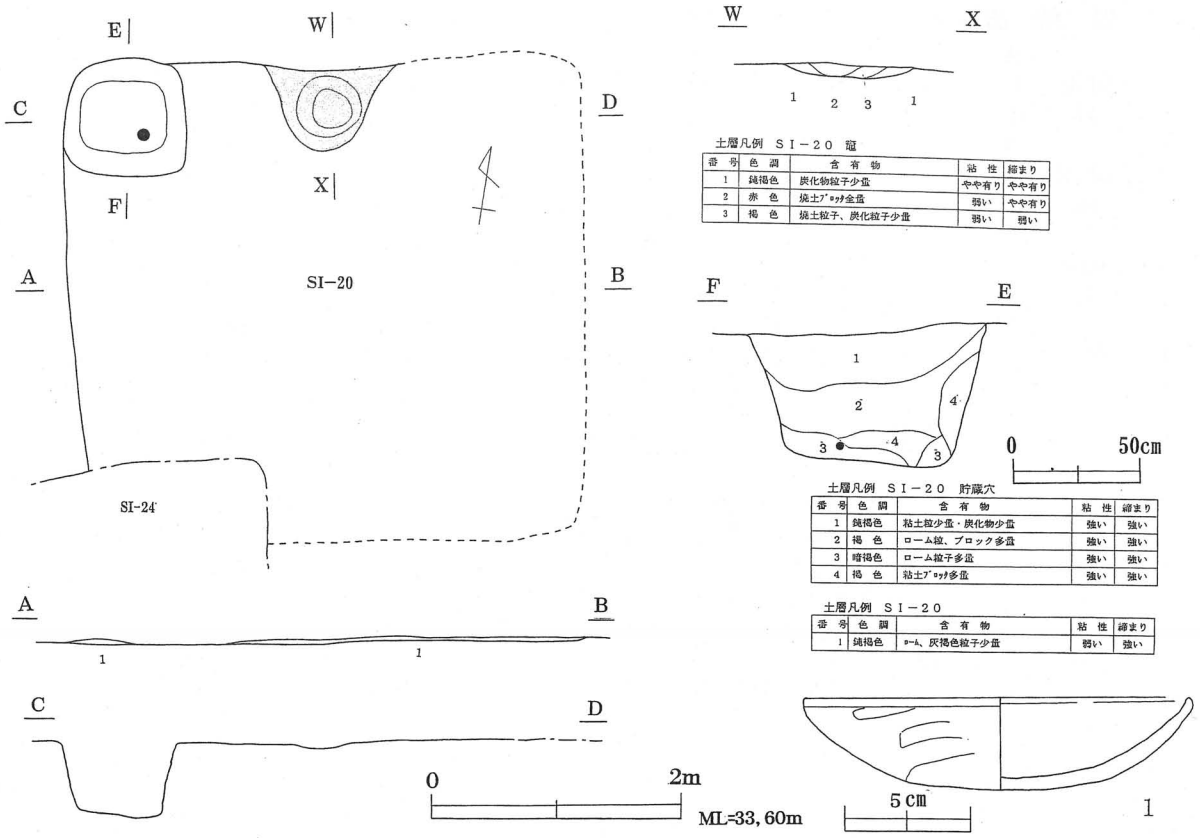
ピットは確認されず竈西側に貯蔵穴がみられた。東西、南北９０cmの方形状で１１０cmと深い。

竈は、北壁中央部に位置し半円状に付設され外部への張り出しは無い。中央に径５０cmの円形状の掘り込みに焼土がみられた。上部はすべて欠失しているため明確な形態は不明。円形内が火床部か。赤褐色で焼き締まりは弱い。（上部欠失のためか）

覆土は、１層、５cm以下で鈍い褐色で粘性は弱く、締まりは強い。

遺物は、土師器片２７（甕１９・坏８）が認められた。須恵器片は無い。図示したものは貯蔵穴内から出土した土師器坏で口唇部は尖り直立する。

本跡は複合関係、出土遺物から７世紀初頭の時期が考えられる。



第２５図　２０号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 坏	A　15,2 B　3,7 C　6	丸底気味で体部は外反して立ち上がる　口唇部は直立し尖る 一部剥落	ナデ　横ナデ ヘラ削り	細石極少量 暗褐色 良	70% 貯蔵穴

第１７表　２０号住居跡出土遺物観察表

２１号住居跡と出土遺物（第２６図・図版６）

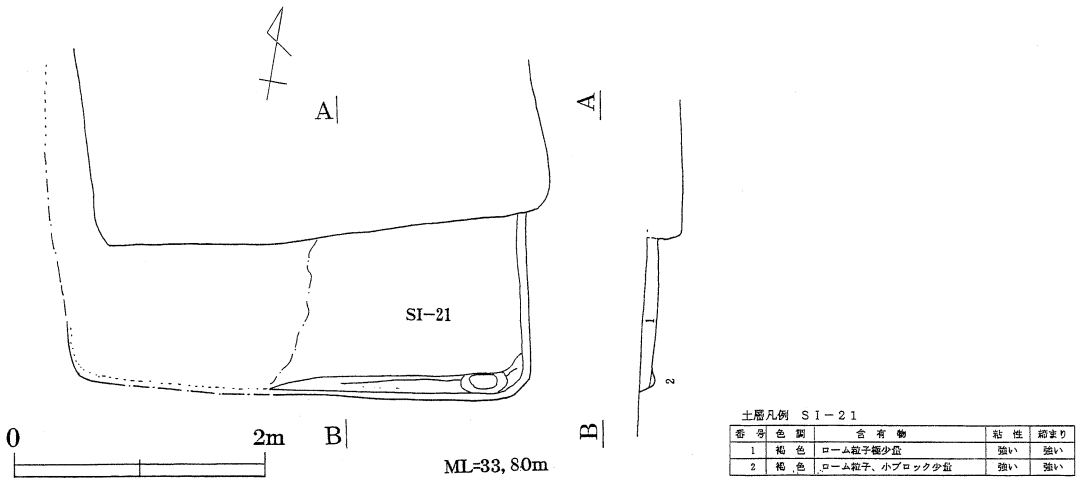
本跡は調査区西側グリットＦ１６区に位置し、ほぼ平坦。北側で１８号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。プランは東西３．７ｍ、北側は１８号住居跡に掘り込まれ不明。主軸をＮ－１０°－Ｗに置くと思われ、壁高は１０cmと低く、大半は欠失しているが、小型の住居跡と思われる。

床面はゆるく西側に傾斜、半分撹乱され欠失、白色粘土が認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は一部認められた。

ピットは隅部に１ヶ所認められ長径４０cm、深さ１０cmの長円形。

遺物は、土師器片５（甕５）が認められた。須恵器片は無い。図示できる物はなかった。

本跡は出土遺物から７世紀末の時期が考えられる。



第２６図　２１号住居跡実測図

２２号住居跡と出土遺物（第２７図・図版６、９）

本跡は調査区西側グリットＥ１５区に位置し、北側に傾斜している。複合関係は無い。プランは東西２．９ｍ、南北２．８ｍの方形を呈し、主軸をＮ－１５°－Ｗに置く。壁高は南側３５cm、北側２０cmと高い。小型の住居跡である。

床面は、ほぼ平坦。白色粘土は認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は幅１５cmから２５cmで巡り掘り込み５cm前後と浅い。

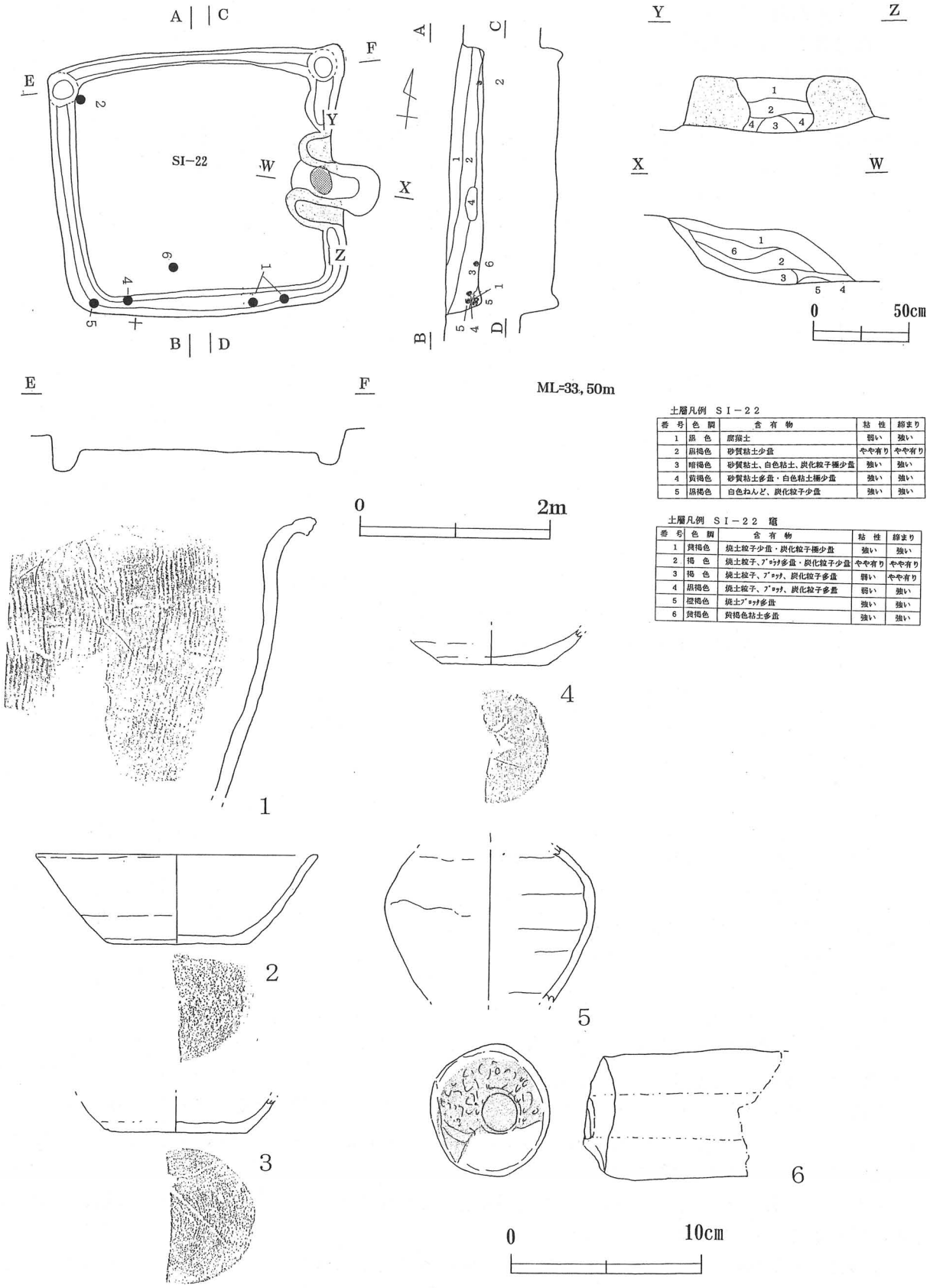
ピットは北側隅壁溝に位置して２ヶ所認められた。Ｐ１は径３０cm、深さ１０cmの円形。Ｐ２は径３０cm、深さ２０cmの円形。掘り込みは「Ｕ」字状。

竈は、東壁中央部に位置し「Ｕ」字状に付設され、焚口から煙道部まで９０cm、袖部幅１０５cm、外部へは「Ｕ」字状に４０cm張り出す。袖部はわずかに北側に曲がり付設。火床部は中位に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。

覆土は、５層で１・２・５層は黒色、黒褐色。砂質粘土を含み、粘性、締まりは強い。層序は北側に流れるように自然埋積。

遺物は、土師器片８７（甕４２・坏４５）須恵器片２６（甕１８・坏８）が認められた。図示したものは須恵器甕、坏、底部回転糸切りや灰釉の陶器が１点、また羽口などが出土している。

本跡は出土遺物から９世紀中葉の時期が考えられる。



土層凡例　ＳＩ－２２

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黒色	腐蝕土	弱い	強い
2	黒褐色	砂質粘土少量	やや有り	やや有り
3	暗褐色	砂質粘土、白色粘土、炭化粒子極少量	強い	強い
4	黄褐色	砂質粘土多量・白色粘土極少量	強い	強い
5	黒褐色	白色ねんど、炭化粒子少量	強い	強い

土層凡例　ＳＩ－２２　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黄褐色	焼土粒子少量・炭化粒子極少量	強い	強い
2	褐色	焼土粒子、ﾌﾞﾛｯｸ多量・炭化粒子少量	やや有り	やや有り
3	褐色	焼土粒子、ﾌﾞﾛｯｸ、炭化粒子多量	弱い	やや有り
4	黒褐色	焼土粒子、ﾌﾞﾛｯｸ、炭化粒子多量	弱い	強い
5	橙褐色	焼土ﾌﾞﾛｯｸ多量	強い	強い
6	黄褐色	黄褐色粘土多量	強い	強い

第２７図　２２号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	須恵器 甕	A B C	胴部は外反して立ち上がり頸部は 「く」の字状縦位平行タタキ目 甑か	タタキ ナデ 内面押圧	雲母極少量 灰褐色 良	10% 覆土
2	須恵器 坏	A　14,5 B　4,7 C　7,3	器肉は薄く体部は外反　口唇部は 開き気味に丸く収める	内外面ナデ 回転ヘラ切り	砂・細石中量 黒褐色 良	20% 床直
3	土師器 坏	A B C　7	底部体部とも器肉は4mmと薄い 皿に近い器形か	回転糸きり ナデ	精選 黒褐色 良	20% 竈中
4	須恵器 坏	A B C　5,3	底部は薄く体部は開き皿に近い 器形	回転ヘラ切り ナデ	細石極少量 灰褐色 良	30% 覆土
5	陶器 小壺	A B C	最大径を胴部上位に置く 口縁部底部とも欠失 肩部に自然の灰釉	ナデ 内面押圧	精選 緑灰褐色 良	10% 覆土
6	羽口	長さ　11 径　6,2 孔　1,9	送風部欠失　孔部にはノロが付着	ナデ	小石少量 孔部黒褐色 鈍い黄褐色	50% 床直

第１８表　２２号住居跡出土遺物観察表

２３号住居跡と出土遺物（第２８図・図版６、９）

本跡は調査区西側グリットＦ１８区に位置し、南側にゆるく傾斜している。２４・１９号住居跡を掘り込み複合関係にある。プランは東西５ｍ、南側は欠失し不明。主軸をＮ－３０°－Ｗに置く。壁高は北側で４０cmと高い。

床面は、大半が欠失。北、西壁側に一部認められる。壁溝は幅１０cmから１５cmで巡り掘り込みは、５cm前後と浅いが床面が削平されているため明確ではない。

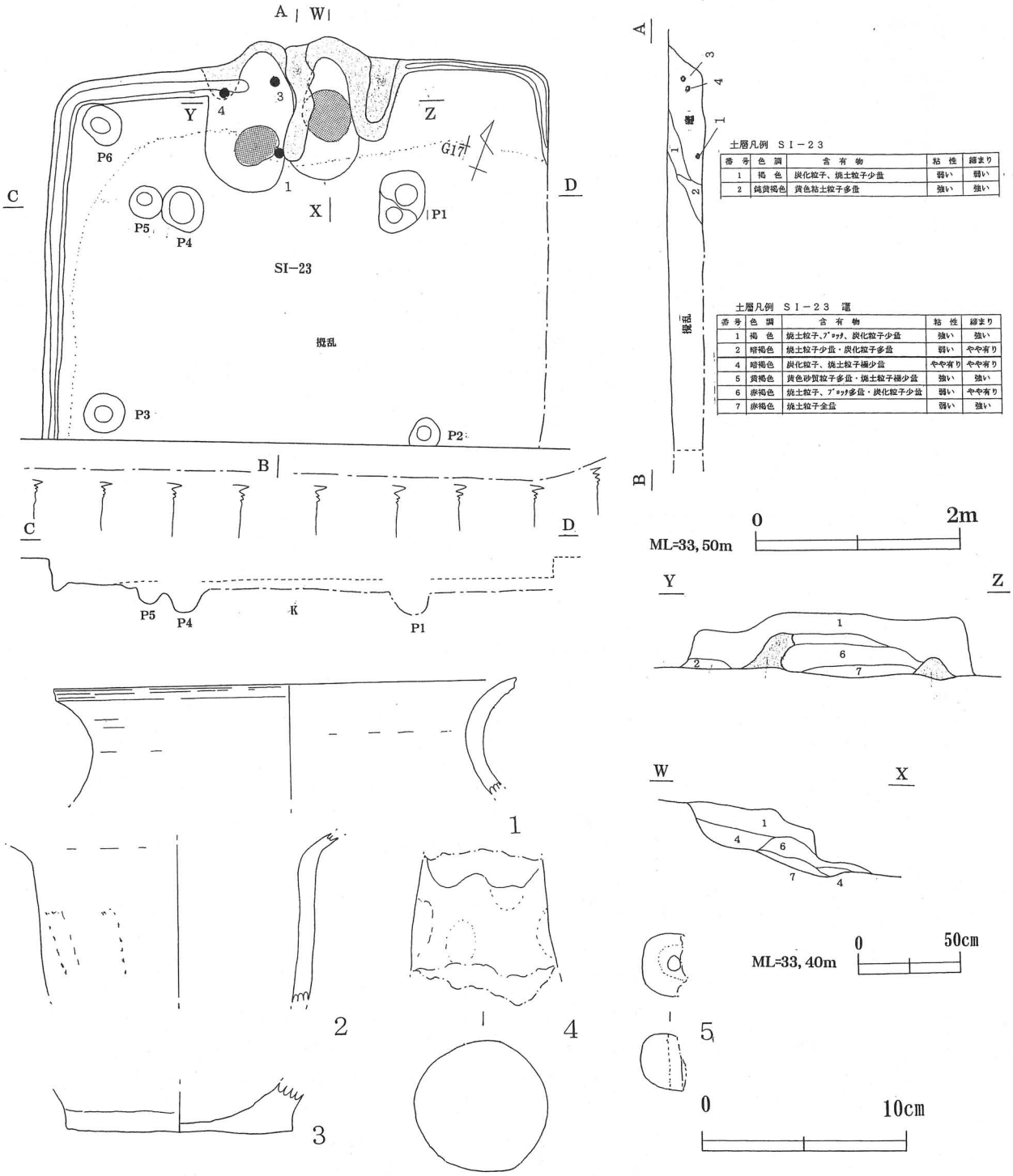
ピットは６ヶ所認められた。主柱穴と思われるＰ１は径５０cm、深さ２０cmの楕円形。Ｐ２は径３０cm、深さ１５cmの円形。Ｐ３は径４０cm、深さ２０cmの円形状。Ｐ４は径４０cm、深さ３０cmの円形でいずれも削平され浅い。Ｐ５は径３０cm、深さ１０cmの円形。Ｐ６は北西隅部に位置し長径４０cm、深さ１５cm。

竈は、北壁中央部に位置し隣接して並列して２ヶ所「U」字状に付設され、東側は焚口から煙道部まで１１０cm、袖部幅１１０cm、外部へは２０cm張り出す。火床部は中位に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。西側は焚口から煙道部まで１２０cm、袖部幅１００cm、西袖は短く東側との間の袖は細長く伸びる。火床部は前面に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。竈より炉状か。

覆土は、大半が撹乱のため不明。竈部分に２層認められたに過ぎない。

遺物は、土師器片１７３（甕１５６・坏１７）が認められた。須恵器は無かった。図示したものは土師器甕、支脚の一部。

本跡は複合関係、出土遺物から７世紀末の時期が考えられる。



土層凡例　ＳＩ－２３

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	炭化粒子、焼土粒子少量	弱い	弱い
2	鈍黄褐色	黄色粘土粒子多量	強い	強い

土層凡例　ＳＩ－２３　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	焼土粒子、ﾌﾞﾛｯｸ、炭化粒子少量	強い	強い
2	暗褐色	焼土粒子少量・炭化粒子多量	弱い	やや有り
4	暗褐色	炭化粒子、焼土粒子極少量	やや有り	やや有り
5	黄褐色	黄色砂質粒子多量・焼土粒子極少量	強い	強い
6	赤褐色	焼土粒子、ﾌﾞﾛｯｸ多量・炭化粒子少量	弱い	やや有り
7	赤褐色	焼土粒子全量	弱い	強い

第２８図　２３号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 甕	A　23 B C	頚部「く」の字状　口唇部上方摘出 内面剥落	ナデ	細石多・雲母少量 暗褐色 普通	5％ 覆土
2	土師器 甕	A B C	胴頚部のみ「く」の字状 外面剥落　二次焼成	ナデ	精選 赤褐色 良	10％ 覆土
3	土師器 甕	A B C　11,2	底部のみ　剥落　二次焼成	ナデ	砂中量 黒褐色 普通	10％ 竈中
4	支脚	径　5,5 遺存長7,5	上下欠失　円形	ナデ 指頭押え	砂中量 赤褐色	20％ 覆土
5	土製 丸玉	径3,0×2,8 孔径 0,7	1/2欠失　楕円形　二次焼成	ナデ	砂中量 黄褐色　普通	覆土 15ｇ

第１９表　２３号住居跡出土遺物観察表

２４号住居跡と出土遺物（第２９図・図版６、９）

本跡は調査区西側グリットＦ１７区に位置し、南、西側にゆるく傾斜している。東北側で２０号住居跡、北側で１９号住居跡を掘り込み西側では２３号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。プランは東西６．１ｍ、南北は不明ながら本遺跡最大の遺構と思われる。主軸をＮ－２０°－Ｗに置く。壁高は３５cmと高い。

床面は、ほぼ平坦、南側の一部は撹乱されている。白色粘土が認められたが明確な硬化面は無い。壁溝は幅１０cmから１５cmで巡り、掘り込みは５cm前後と浅い。

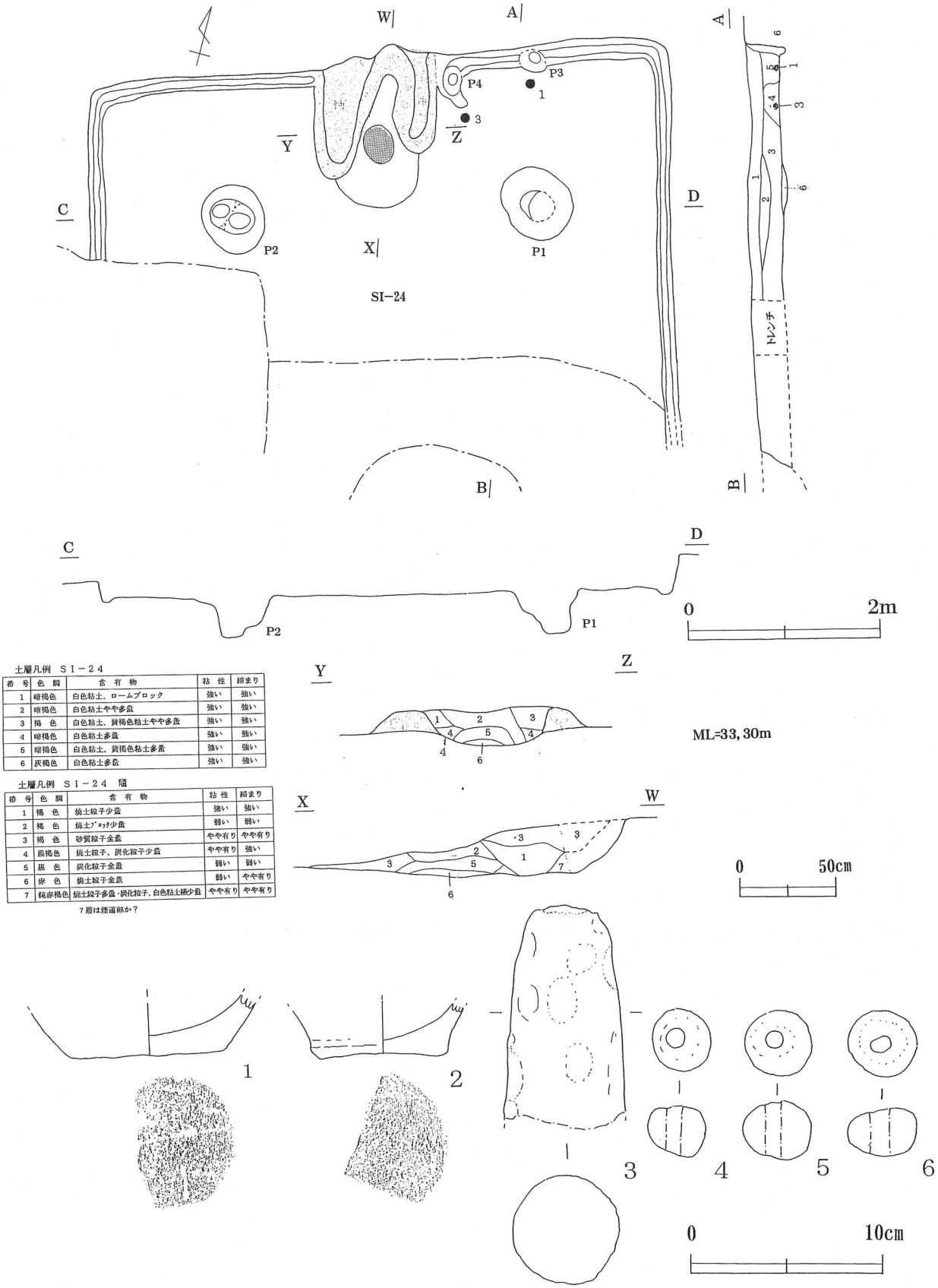
ピットは４ヶ所認められＰ１は長径８０cm、深さ４５cmの楕円形。Ｐ２は径７０cm、深さ４５cmの円形。「Ｕ」字状２段に掘り込みをもち主柱穴と考えられる。Ｐ３は北側壁溝内に位置し径２０cm、深さ１５cmの円形。Ｐ４は長径３０cm、深さ１５cm。

竈は、北壁中央部に位置し「Ｕ」字状に付設され、焚口から煙道部まで１４０cm、袖部幅１２０cm、外部へはわずかに張り出す。焚口部はやや西向きで袖部は直線的に伸びる。火床部は前面に位置し火熱を受け赤褐色で焼き締まりは強い。

覆土は、６層でいずれも白色粘土を含み、粘性、締まりは強い。層序は１層を除き人為的堆積。

遺物は、土師器片２５８（甕２２２・坏３６）が認められた。須恵器片は無い。図示できるものは少なく土師器甕底部、土製支脚などである。

本跡は複合関係、出土遺物から７世紀中葉から後半の時期が考えられる。



土層凡例　ＳＩ－２４

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	暗褐色	白色粘土、ロームブロック	強い	強い
2	暗褐色	白色粘土やや多量	強い	強い
3	褐　色	白色粘土、黄褐色粘土やや多量	強い	強い
4	暗褐色	白色粘土多量	強い	強い
5	暗褐色	白色粘土、黄褐色粘土多量	強い	強い
6	灰褐色	白色粘土多量	強い	強い

土層凡例　ＳＩ－２４　竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐　色	焼土粒子少量	強い	強い
2	褐　色	焼土ﾌﾞﾛｯｸ少量	弱い	弱い
3	褐　色	砂質粒子全量	やや有り	やや有り
4	黒褐色	焼土粒子、炭化粒子少量	やや有り	強い
5	黒　色	炭化粒子全量	弱い	弱い
6	赤　色	焼土粒子全量	弱い	やや有り
7	純赤褐色	焼土粒子多量・炭化粒子、白色粘土極少量	やや有り	やや有り

７層は煙道部か？

第２９図　２４号住居跡・出土遺物実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 甕	A B C　8	底部のみ1/2欠失　二次焼成 平底	ナデ	砂多量 赤褐色 やや不良	5% 覆土
2	土師器 甑	A B C　6,7	底部のみ　平底	ナデ	砂中量 外黒褐色・内褐色 普通	5% 覆土
3	支脚	径　5,7 遺存長11,6	下部欠失　円形　二次焼成　粗雑 剥落	ナデ 押圧	砂・長石少量 鈍い橙色　普通	60% 床直
4	土製 丸玉	径3,2×2,6 孔径　0,8	楕円形　磨耗		砂中量 黄褐色　普通	覆土 23ｇ
5	〃 〃	径3,4×2,8 孔径　0,8	孔部引き抜き痕　二次焼成　粗雑	ナデ 押圧	砂中量 暗褐色　普通	覆土 29ｇ
6	〃 〃	径3,5×2,5 孔径　1,0	孔部楕円　卵形　磨耗変形	ナデ	砂中量 鈍い暗褐色普通	覆土 26ｇ

第２０表　２４号住居跡出土遺物観察表

２　土坑

本遺跡から１１基の土坑が検出された。遺構は東側と中央部西側に認められた。形は円形状が大半で、掘り込みは浅い。西側の調査区には不整形なものもみられた。

１号土坑と出土遺物　（第３０図　図版７）

本跡は調査区東側グリットＣ４区に位置し、東側にゆるく傾斜している。南側の一部は６号住居跡を掘り込み、複合関係にある。プランは円形で径１．２５ｍ。底面はほぼ平坦で硬化は弱く壁高は１５cmと低い。

覆土は、１層でローム粒子を多量に含む。粘性、締まりは強い。人為的埋積。

遺物は、土師器、須恵器ともに認められなかった。

本跡は複合関係、出土遺物からは時期は把握できなかった。

２号土坑と出土遺物（第３０図）

本跡は調査区東側グリットＣ５区に位置し、１号土坑と隣接。６号住居跡内北側に位置し上部には焼土ブロック、砂質粘土がみられた。残部のプランは長径１．９ｍ、短径１．１ｍの卵形を呈する。

底面はほぼ平坦で硬化はやや弱い。壁高は３０cmと高い。

覆土は、５層に分けられた。１層は鈍い赤褐色で焼土ブロック、砂質粘土。２層は砂質粘土、ローム粒子で褐色、３層は砂質粘土が多量で焼土ブロックを含み明褐色。４層は３層に近い。５層はローム粒子を多量に含み明褐色。粘性、締まりは強い。人為的埋積。

遺物は、土師器、須恵器ともに無かった。

本跡は上部の砂質粘土の関係から６号住居跡と時期に大差はないと考えられる。

３号土坑と出土遺物（第３０図）

本跡は調査区東側グリットＣ５区に位置し、２号土坑の南側、６号住居跡内北側竈前に位置。上部には焼土が認められ、プランは長径１．４ｍ、短径１．２５ｍ。底面はほぼ平坦で硬化はやや有り壁高は３５cmと高い。

覆土は、３層でローム粒子を多量に含む。粘性、締まりは強い。人為的埋積。

遺物は、土師器、須恵器ともに認められなかった。

本跡は上部の砂質粘土の関係から６号住居跡と時期に大差はないと考えられる。

４号土坑と出土遺物（第３０図）

本跡は調査区中央南側グリットＥ８区に位置し、南側にゆるく傾斜している。北、西側の一部は１号住居跡と３号住居跡を掘り込み複合関係にある。プランは長形で径２．５ｍ、短径１．５５ｍ。底面は長円形状の浅い掘り込みが三ヶ所みられ、２ヶ所はピットか。硬化は弱く壁高は１５㎝と低い。

覆土は、６層で上部は撹乱層。１、２層はピットの可能性有り。３、４、５、６は片側からの人為的埋積。粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器ともに認められなかった。

本跡は覆土の埋積状態などから抜根跡も考えられる。

５号土坑と出土遺物（第３０図）

本跡は調査区中央やや西側グリットＥ１２区に位置し、西側にゆるく傾斜している。プランは方形状で東西０．８ｍ、南北０．９ｍ。底面には円形状の掘り込みが三ヶ所みられ３５㎝、３０㎝、２５㎝。硬化はやや有り壁高は１０㎝と低い。

覆土は、５層で焼土ブロック、焼土粒子、炭化粒子を含む。粘性、締まりは弱い。

遺物は、土師器、須恵器ともに認められなかった。

本跡は覆土の埋積状態から２時期のピットと土坑の可能性が考えられる。

６号土坑と出土遺物（第３０図）

本跡は調査区中央西側グリットＥ１１区に位置し、西側にゆるく傾斜している。南側の一部は１１号土坑に掘り込まれ、複合関係にある。プランは東西南北０．８５ｍの方形。底面は平坦で白色粘土、壁高は４５㎝と高い。

覆土は、３層で暗褐色にローム粒、粒子の混入の差で粘性、締まりはやや有る。自然埋積。

遺物は土師器、須恵器ともに認められなかった。

本跡は、複合関係から９世紀代の時期が考えられる。

７号土坑と出土遺物（第３１図　図版７、９）

本跡は調査区西側グリットＥ１７区に位置し、北側にゆるく傾斜している。プランは東西１．４ｍ、南北３ｍの長円形。底面は平坦で三ヶ所のピット状の掘り込みがある。硬化はやや有り壁高は６０㎝と高い。

覆土は、黄褐色層を確認の為掘り込んだところ遺物が検出された。よって未作成、断面図のみ。観察では白色粘土に黄褐色粘土が認められた。粘性、締まりはやや強い。

遺物は、土師器片２８（甕１０・坏１８）が認められた。６点ほどは土圧の為破片化し完形品は２点、他はやや散在気味で投げ込み状であった。すべての土器は底部から浮いた状態で検出されている。

本跡の性格は出土遺物の状態から隣接する１７号住居跡の貯蔵穴か。７世紀初頭の時期が考えられる。

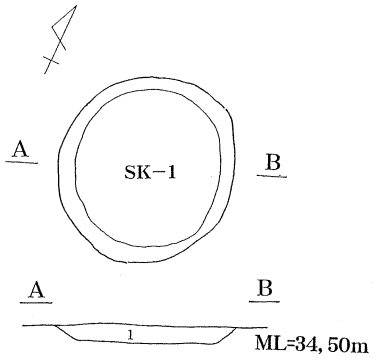
８号土坑と出土遺物（第９図）

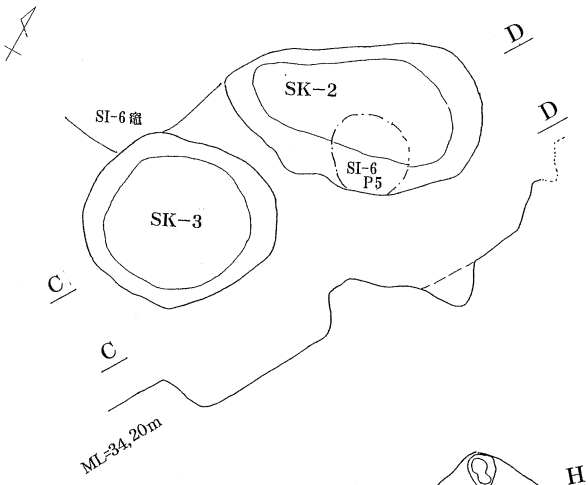
本跡は調査区中央東側グリットＣ２区、７号住居跡東南隅部に位置し、上部は住居跡で欠失。プランは径１．５ｍの円形。底面は皿状に中央部がやや深く締まりは弱い。壁高は４０㎝と高い。

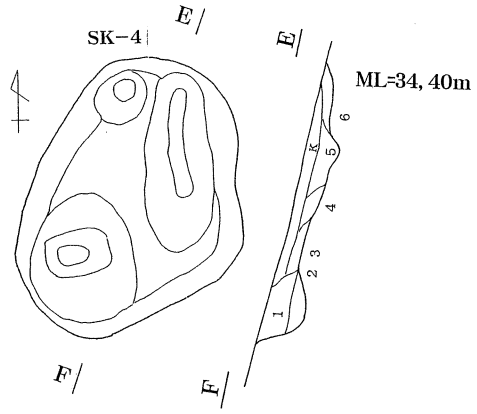
覆土は３層、１層は暗褐色で締まりはやや有る。２層は褐色、３層は明褐色いずれもローム粒、粒子、ブロックの混入の差で締まりはやや弱く自然埋積。

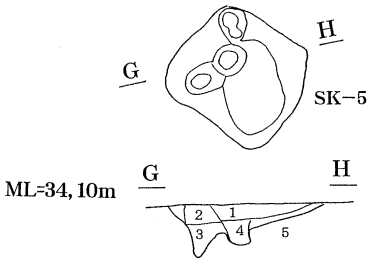
遺物は土師器片５（甕３・坏２）須恵器片１（坏１）弥生式土器壺胴部１片が認められた。

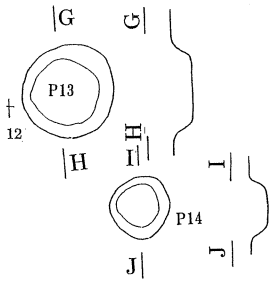
本跡は、複合関係から７世紀代の時期が考えられる。

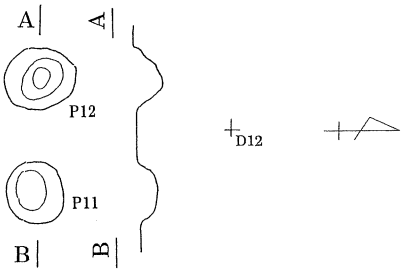










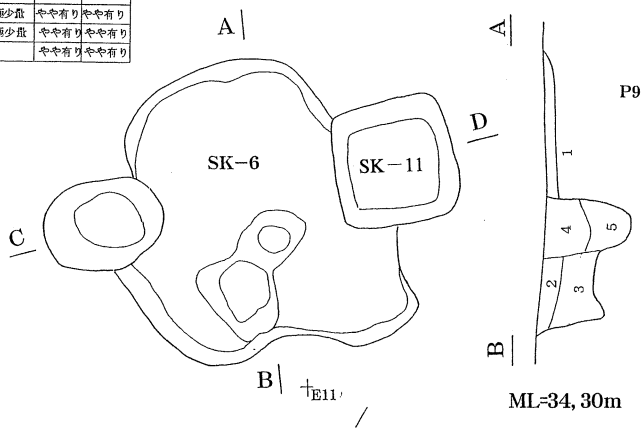


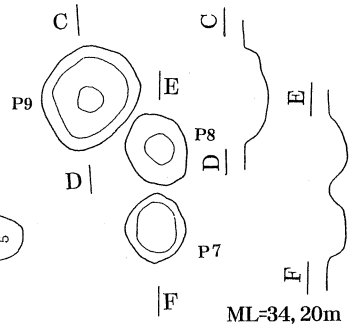
土層凡例　SK−1

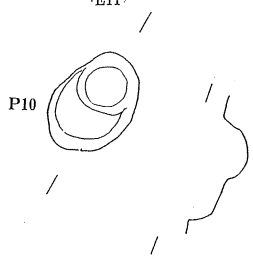
番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黄褐色	ﾛｰﾑ粒子多量	やや強い	やや強い

土層凡例　SK−4

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	暗褐色	砂質粒子多量	弱い	弱い
2	暗褐色	粘土ブロック多量	強い	強い
3	褐色	砂質粒子、粘土粒子極少量	やや有り	やや有り
4	褐色	砂質粒子、粘土粒子、粘土ﾌﾞﾛｯｸ極少量	やや有り	やや有り
5	褐色	砂質、粘土、焼土、炭化粒子極少量	やや有り	やや有り
6	黄褐色	砂質粒子、粘土粒子極少量	やや有り	やや有り





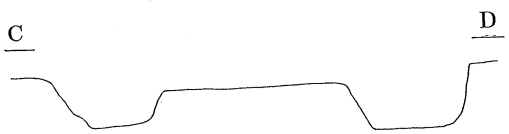


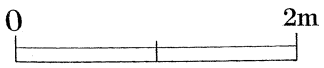
土層凡例　SK−11

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黄褐色	ﾛｰﾑ粒、黄褐色粘土粒子少量	強い	強い
2	鈍褐色	ﾛｰﾑ粒、粒子多量	やや有り	やや有り
3	褐色	ﾛｰﾑ粒子、黄褐色粘土粒子少量	やや有り	やや有り
4	鈍暗褐色	ﾛｰﾑ粒、粒子少量	やや有り	やや有り
5	暗褐色	ﾛｰﾑ粒子少量	弱い	やや有り

土層凡例　SK−5

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	赤褐色	焼土粒子、炭化粒子多量	弱い	弱い
2	褐色	炭化粒子少量	やや有り	やや有り
3	鈍暗褐色	炭化粒子少量	やや有り	やや有り
4	暗褐色	炭化粒子多量	やや有り	やや有り
5	黄褐色	粘土ﾌﾞﾛｯｸ多量	強い	強い





第30図　1．2．3．4．5．6．11号土坑・7．8．9．10．11．12．13．14号ピット実測図

番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土.色調.焼成	備考
1	土師器 坏	A 12,0 B 4,5 C 5,0	丸底気味からゆるく立ち上がる 口縁部は内湾　肩部に弱い稜 口唇部は丸く収める	横ナデ ナデ ヘラ削り	ｽｺﾘｱ、砂、細石少量 鈍い橙色 普通	98% 覆土
2	土師器 坏	A 12,1 B 4,3 C 4,0	丸部気味からゆるく立ち上がる 口縁部は短めに内湾　口唇部は 丸く収める　肩部に弱い稜	横ナデ ナデ ヘラ削り	ｽｺﾘｱ、砂中量 暗褐色 普通	95% 覆土
3	土師器 坏	A 12,6 B 4,4 C 4,5	丸底気味からゆるく立ち上がる 口縁部は内湾気味 口唇部は尖り気味肩部に弱い稜	横ナデ ナデ ヘラ削り	ｽｺﾘｱ、砂中量 鈍い黄褐色 普通	80% 覆土
4	土師器 坏	A 14,0 B 4,5 C 6,0	平底に近くゆるく立ち上がる 口縁部は直立　肩部に弱い稜 口唇部は丸く収める	横ナデ ナデ ヘラ削り	ｽｺﾘｱ、砂中量 暗褐色 普通	40% 覆土
5	土師器 坏	A 13,5 B 4,0 C 6,0	丸底気味からゆるく立ち上がる 口縁部は直立気味 口唇部は尖る　肩部に弱い稜	横ナデ ナデ ヘラ削り	ｽｺﾘｱ、砂中量 暗褐色 普通	40% 覆土
6	土師器 坏	A 14,0 B 4,9 C 5,0	丸底気味からゆるく立ち上がる 口縁部は直立　肩部に弱い稜 口唇部は丸く収める	横ナデ ナデ ヘラ削り	ｽｺﾘｱ、砂中量 鈍い黄褐色 普通	80% 覆土
7	土師器 坏	A 14,5 B 4,5 C 5,0	やや大形体部はゆるく立ち上がる 口縁部は直立　肩部に弱い稜 口唇部は内側にカット状	横ナデ ナデ ヘラ削り	ｽｺﾘｱ、砂少量 鈍い黄褐色 普通	完形 覆土
8	土師器 坏	A 17,5 B C	体部は内湾して立ち上がる 口縁部は短く内湾 口唇部は内側にカット状	横ナデ ナデ ヘラ削り	ｽｺﾘｱ、砂少量 淡い赤褐色二次焼成 普通	40% 覆土

第２１表　７号土坑出土遺物観察表

９号土坑と出土遺物（第３１図）

本跡は、西側に新たに設定した馬の背状の調査区から検出された。地形は西側に傾斜している。プランは東西１．８５m、南北１mの長円形。底面は西側に傾斜、砂質の為硬化は無く壁高は５cmと低い。

覆土は、暗褐色層で砂粒を多量に含む。粘性、締まりは無い。自然埋積か。

遺物は、土師器片１６（甕１５・坏１）が認められた。いずれも小片で図示できるものは無かった。甑の把手の一部が見られた。

本跡は出土遺物から８世紀から９世紀の時期が考えられる。

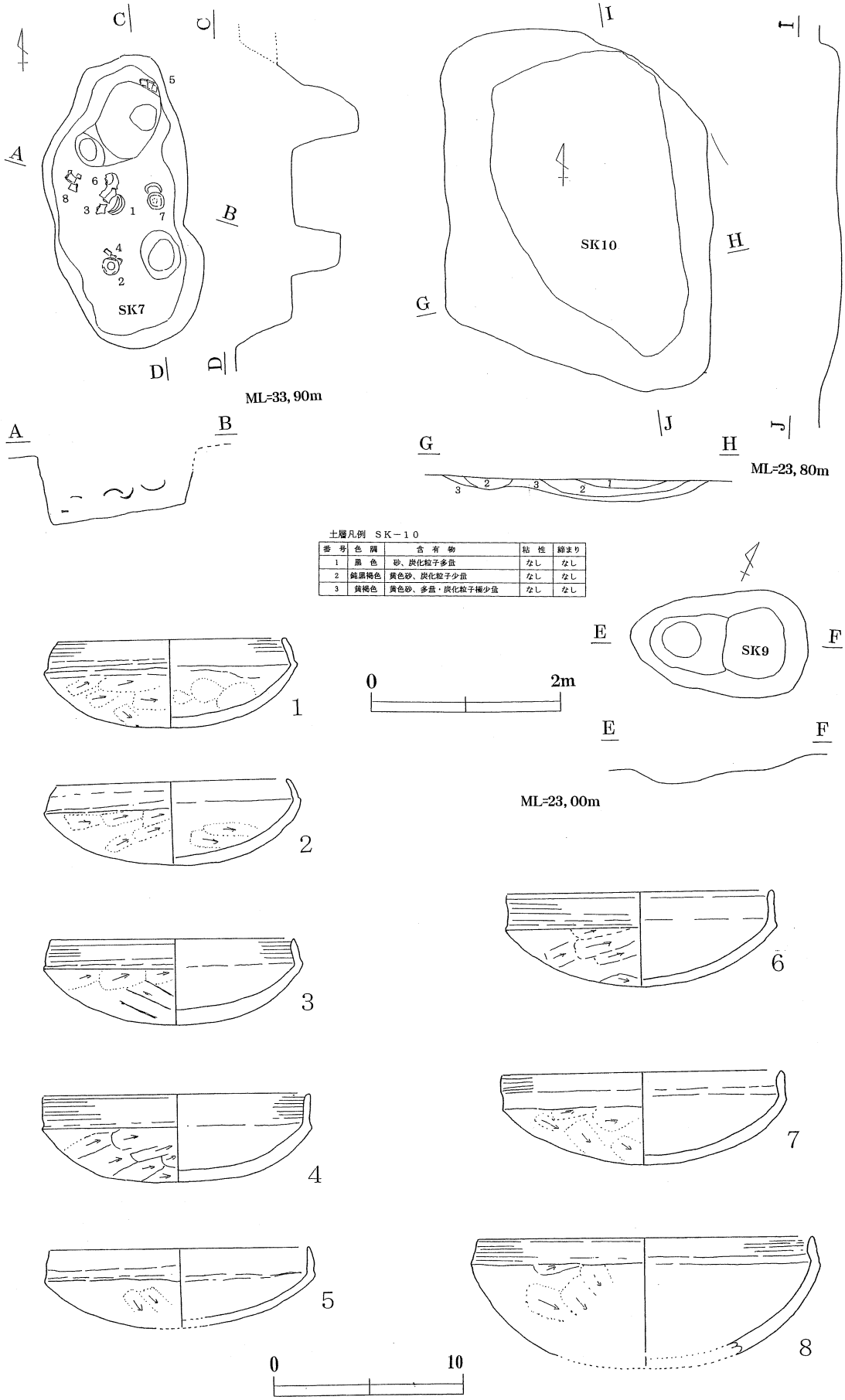
１０号土坑と出土遺物（第３１図　図版７）

本跡は西側に新たに設定した調査区西端から検出された。地形はゆるく北側に傾斜している。プランは東西で２．８m、南北３．５mの長方形状。底面はほぼ平坦で硬化は無く壁高は１５cmと低い。

覆土は、３層で１層には炭化粒子を多量に含む。底面の３層は黄褐色砂を多量に含み粘性、締まりは無い。層序はレンズ状を示し自然埋積。

遺物は、土師器片３４（甕２８・坏６）が認められた。いずれも小片で図示できるものは無かった。

本跡は出土遺物から７世紀初頭から７世紀中葉の時期が考えられる。



土層凡例　ＳＫ－１０

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黒色	砂、炭化粒子多量	なし	なし
2	鈍黒褐色	黄色砂、炭化粒子少量	なし	なし
3	黄褐色	黄色砂、多量・炭化粒子極少量	なし	なし

第３１図　７．９．１０号土坑実測図・７号土坑出土遺物実測図

１１号土坑と出土遺物（第３０図）

本跡は調査区中央西寄りグリットＦ１１区に位置し、南側にゆるく傾斜している。北側は６号土坑を掘り込み複合関係にある。プランは東西南北８５cmの方形状。底面は平坦で硬化はやや有る。壁高は４５cmと高い。

覆土は、３層で黄褐色。粘性、締まりはやや有る。

遺物は土師器が１片認められた。

本跡は、複合関係から７世紀から８世紀の時期が考えられる。

３　ピット

ピットは２４基検出された。大半は中央西側に集中して認められた。いずれも径２０cm、深さも１５～２５cm前後のものが大半であったが６０cmの深いものも見られた。７号から１９号、２０号から２５号は柵列状の直線を呈するが明瞭なプランは不明。その他土坑状の大型のものもあった。遺物は少なく時期を特定できなかった。総じて柵列状の位置関係と思われる。

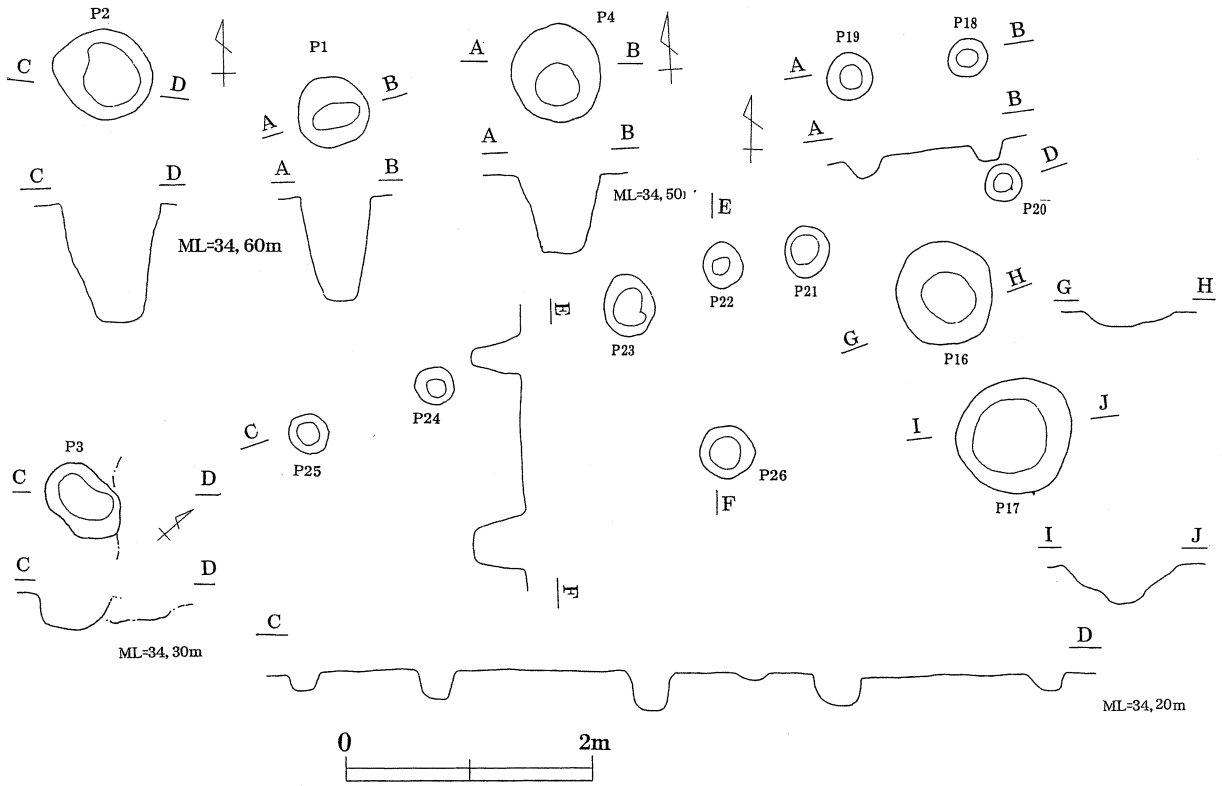
１号ピット（第３３図）

調査区中央部東側グリットＣ５区に位置し、北側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径５５cmの楕円形で「U」字状に８０cmほど掘り込む。

覆土は、３層で１層は鈍い褐色。２層は明褐色。３層は明褐色。１層を除きローム粒、粒子を多量に含む。粘性、締まりは強い。

遺物は、土師器片３（甕２・坏１）須恵器片１（坏１）が認められた。いずれも小片で図示できるものは無かった。

出土遺物から７世紀から８世紀の時期が考えられる。



第３２図　１．２．３．４．16．17．18．19．20．21．22．23．24．25．26号ピット実測図

２号ピット（第３３図）

調査区中央東側グリットＣ６区に位置し、北側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは長径８０cm、短径７０cmの楕円形で「U」字状に９５cm掘り込む。

覆土は、４層で１層は鈍い褐色。２層は褐色。３、４層は明褐色。１層に少量の焼土粒子を含む。他はローム粒子の混入の差で粘性、締まりは強い。

遺物は、土師器片２（甕２）が認められた。いずれも小片で図示できるものは無かった。

隣接するＰ１と何らかの関係があると思われる。出土遺物から７世紀から８世紀の時期が考えられる。

３号ピット（第３３図）

調査区中央東側グリットＣ５区に位置し、北側にゆるく傾斜している。１号溝を掘り込み複合関係にある。プランは長径７０cm、短径４５cmの長円形で「U」字状に２５cm掘り込む。単独。

覆土は、２層で１層は淡い赤褐色で焼土粒子を中量。２層は褐色で焼土粒子少量とローム粒子多量。粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器とも認められなかった。

複合する１号溝を掘り込むことから７世紀から９世紀の時期が考えられる。

４号ピット（第３３図）

調査区中央東側グリットＣ９区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径８０cmの円形状で「U」字状に６０cm掘り込む。

覆土は、３層で１層は褐色でローム粒子中量。２、３層は明褐色でローム粒子、白色粘土を極少量含む。粘性、締まりは強い。

遺物は土師器、須恵器とも認められなかった。時期は不明。

７号ピット（第３３図）

調査区西寄りグリットＥ１１区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径４５cmの円形状で鍋底状に１０cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片１（甕１）が認められ、小片で図示できるものでは無かった。

出土遺物から８世紀から１０世紀で西側に連なるピット群の１つと考えられる。

８号ピット（第３３図）

調査区西寄りグリットＥ１１区７号ピットに隣接し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径５５cmの楕円形で鍋底状に１０cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片４（甕４）が認められ、いずれも小片で図示できるものは無かった。

出土遺物から８世紀から１０世紀で西側に連なるピット群の１つと考えられる。

９号ピット（第３３図）

調査区西寄りグリットＥ１１区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径４０cmの円形状で鍋底状に１５cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

１０号ピット（第３３図）

調査区中央西寄りグリットＦ１０区に位置し、南側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは長径８０cm短径５０cmの楕円形状で掘り込みは２段になり１５cm、２５cmの鍋底状。２基の複合か。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

１１号ピット（第３３図）

調査区西寄りグリットＥ１１区に位置し、南側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径４５cmの楕円形状で鍋底状に１５cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

１２号ピット（第３３図）

調査区西寄りグリットＥ１２区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径５０cmの円形状で開いた「U」字状に２０cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

１３号ピット（第３３図）

調査区西寄りグリットＥ１２区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径６５cmの円形状で鍋底状に１５cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

１４号ピット（第３３図）

調査区西寄りグリットＥ１１区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径４５cmの円形状で鍋底状に１０cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

１６号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＥ１２区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径８５cmの円形状で鍋底状に１５cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

１７号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＦ１２区に位置し、南側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径９５㎝の円形状で鍋底状に３０㎝掘り込みやや大型で深い。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片７（甕５・坏２）須恵器片１（坏１）が認められ、いずれも小片で図示できるものは無かった。

出土遺物から８世紀から１０世紀の時期が考えられる。

１８号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＥ１２区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径３５㎝の円形状で台形状に１５㎝掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片１（甕１）が認められ、小片で図示できるものでは無かった。

出土遺物から８世紀から１０世紀の時期が考えられる。

１９号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＥ１２区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径４０㎝の円形で「U」字状に１５㎝掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

２０号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＥ１３区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径３０㎝の円形で鍋底状に１５㎝掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器片７（甕５・坏２）須恵器片１（坏１）が認められ、いずれも小片で図示できるものは無かった。

出土遺物から９世紀から１０世紀の時期が考えられる。

２１号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＥ１３区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径３５㎝の円形状で鍋底状に２０㎝掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

２２号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＥ１３区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径３０㎝の円形状で「U」字状に４０㎝掘り込む。深い。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

２３号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＥ１３区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径５０cmの長円形状で「U」字状に３０cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量、下部は白色粘土粒を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

２４号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＦ１３区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径３０cmの円形状で「U」字状に２０cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが西側に連なるピット群の１つと考えられる。

２５号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＦ１３区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径３０cmの円形で鍋底状に１５cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが東側に連なるピット群の１つと考えられる。

２６号ピット（第３２図　図版７）

調査区西寄りグリットＦ１３区に位置し、西側にゆるく傾斜している。複合関係は無い。プランは径４５cmの円形で「U」字状に４０cm掘り込む。深い。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

時期は不明だが北側に連なるピット群の１つと考えられる。

２７号ピット（第３２図）

調査区西寄りグリットＦ１１区に位置し、南側にゆるく傾斜している。１１号土坑と複合関係に有る。プランは長径８５cm、短径６５cmの長円形状で小規模な土坑状で３５cm掘り込む。

覆土は、上部が褐色でローム粒子を少量含み粘性、締まりはやや有る。

遺物は、土師器、須恵器片とも認められなかった。

複合関係から８世紀から１０世紀の時期が考えられる。

４　溝

溝は２条認められた。１号溝は調査区の東側に位置、２号溝は西側の調査区から検出された。いずれも短く浅い。

１号溝と出土遺物（第３３図）

本溝は、調査区東側グリットＣ2区に位置し、地形的には東側にゆるく傾斜を示す。東側の一部は5号住居跡に掘り込まれ複合関係にある。東西に長さ4.5m、幅は東側で１７０cm、西側に向かって幅は次第に狭くなり中ほどで１１０cm、最後は円形状に収まる。底面は東側にゆるく傾斜、中央部

が僅かに低い。硬化は弱くローム面剥き出し状、壁高は１０～１５cmと低い。先端部にピットが見られたが覆土から、本遺構とは直接関係ない。

覆土は、２層でローム小ブロックと粒子を多量に含む。粘性、締まりはやや強い。自然埋積。

遺物は、土師器片（甕・坏）が認められた。須恵器片は認められなかった。いずれも小片で図示できるものは無かった。

本跡は複合関係と出土遺物から８世紀前半の時期が考えられる。

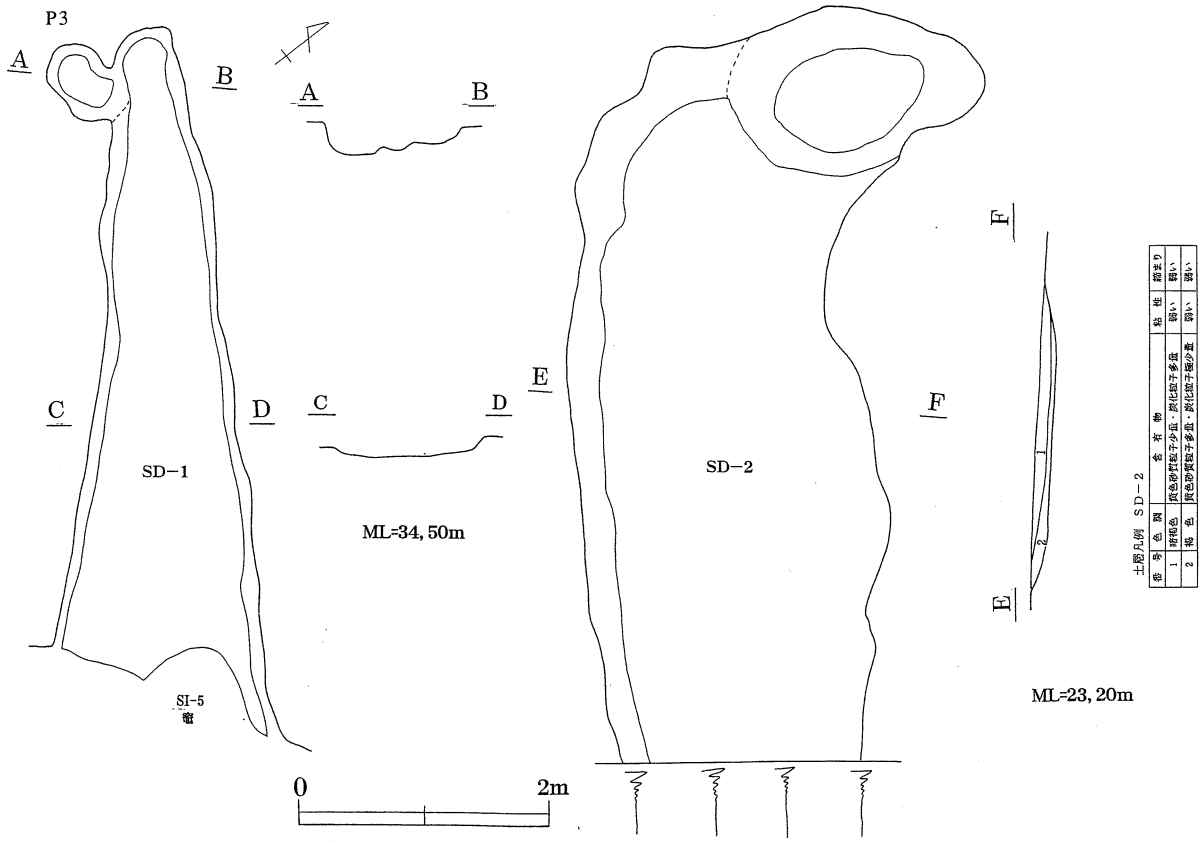
２号溝と出土遺物（第３３図　図版７）

本溝は新たな調査区、西側の中央部に位置し、馬背状台地を切断するように南北に見られたが、掘り込みは浅く皿状を呈する。ゆるく南側に傾斜している。長さ６m、幅は２m～２.５m北側に浅い掘り込みが認められ、南側に緩く傾斜を示す。複合関係はない。底面は粗い砂層で硬化は面は無く西側でも壁高は５cmと低い。

覆土は、２層で黄褐色の砂層で粘性、締まりは弱く、自然埋積。

遺物は、土師器片５６（甕４５・坏１１）が認められた。須恵器片は認められなかった。出土した土器は角が取れて磨り減り、いずれも小片で図示できるものは無かった。

本跡は出土遺物から７世紀から８世紀頃の時期が考えられる。



第３３図　３号ピット・１．２号溝実測図

5　炭窯

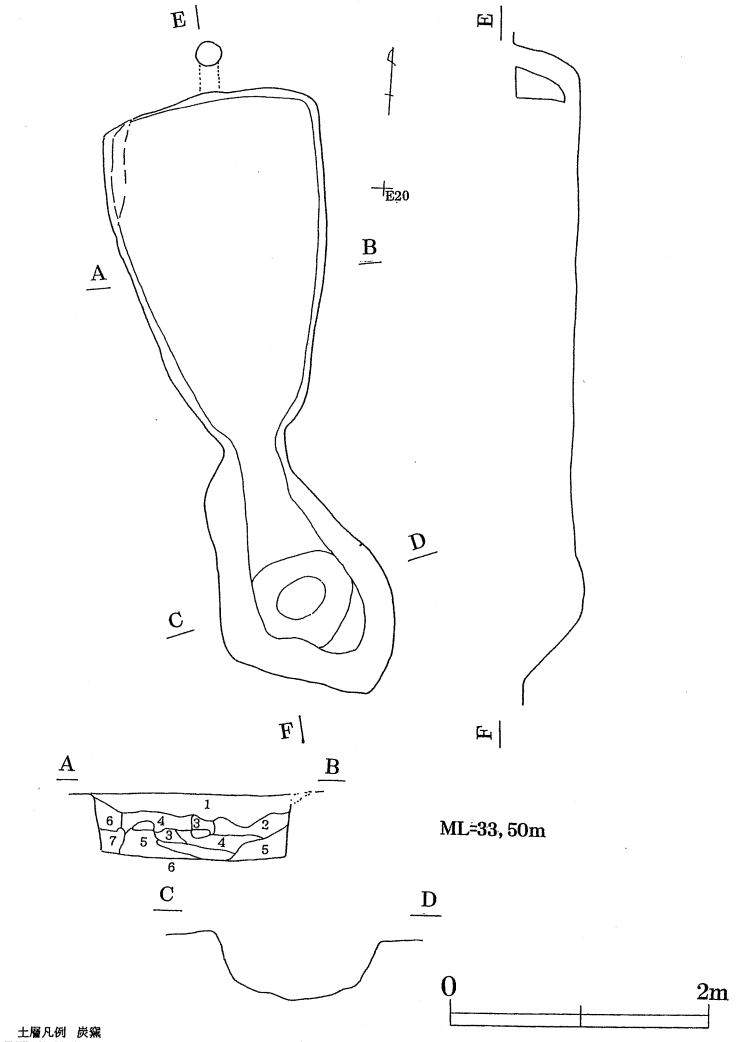
１号炭窯と出土遺物（第３４図　図版７、９）

本跡は調査区西側端部、グリットはF20区に位置し、南、西側にゆるく傾斜している。炭窯は南北方向に構築され、南側が焚口になっていた。本体部は長さ２．７m、幅は北側で１．６mの焚口部で６０cmと狭く徳利状を呈する。天井部は欠失、土層から崩落痕は認められなかった。焚口は幅５０cmと狭く、煙道部は円形で径２０cm。掘り込みは５０cm。底部は平担で硬化、真黒で光沢を持つ。複合関係はない。

覆土は、7層で焼土ブロック、粒子、炭化物、粒を多量に含む。粘性、締まりは弱い。天井部と思われる煉瓦状のものは認められず、上部を覆う１層は周辺の灰褐色粘土層で人為的な埋積。下層の２～７層は周辺の残土、焼土、ブロック、炭化物、粒、砂質粘土が不規則に混在していた。

遺物は、破片１４（甕４）ホイロ・土管・土鍋・笠間焼甕・平瓦など戦前、戦後に使用された物が見られた。（写真図版９）

本跡は出土遺物から昭和２０年前後の時期が考えられる。



土層凡例　炭窯

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黄褐色	灰色粘土粒多量	強い	強い
2	黒色	炭化物多量	強い	強い
3	黄色	砂質粒子全量	やや有り	やや有り
4	褐色	焼土、粘土粒多量	強い	強い
5	赤色	焼土ブロック多量	強い	強い
6	濃褐色	焼土粒、炭化粒多量	強い	強い
7	灰色	砂質粒子全量	やや有り	やや有り

第３４図　１号炭窯実測図

Ⅳ　結びにかえて

本遺跡は前述の通り確認調査により新たに発見されたものであり、このため遺跡の性格、時期等は全く不明であった。本調査も確認トレンチの層序にしたがって表土層を取り除き、遺構確認作業を行ない時代と時期、プランや軒数が確認された。遺構の大半は馬背状台地が弱く「く」の字状にふくらむ部分で約８００㎡の狭い範囲に検出された。

調査によって２４軒の竪穴住居跡、土坑１１基、溝２条、ピット２６基が出土した。各遺構のプランや竈の付設状態、柱穴、出土遺物などの特徴から、これら住居跡の営まれた時代は古墳時代から平安時代、7世紀初頭から１０世紀末期のおよそ４００年間が考えられる。各遺構とも上部の堆積土は１０cm前後と浅く、各遺構の掘り込みも１０cm前後で最大でも５０cmであった。柱穴が確認できない遺構、出土遺物も少ないため時期の判断には慎重を要するが、住居跡プランや土器、竈等から住居跡の変遷について述べて結びとしたい。

住居跡の変遷と出土遺物

本遺跡からは少量の縄文時代前期の浮島式と弥生時代後半の十王台式土器の細片が２０点ほど出土しているが、これに伴う遺構は認められなかった。

土坑、溝、ピットでは７号土坑以外明確に時期を特定できる遺構はなく、出土遺物やプラン等から住居跡の年代に伴うものと推察される。その外近代の炭窯が１基認められた。

古墳時代鬼高Ⅱ期前半に該当する住居跡は１７、２０号でプランは方形状、１７号は東側に竈をもち、「U」字状で２０号は大半が欠失、竈の火床部と貯蔵穴が確認され全体像は不明に近い。出土遺物では坏形土器は須恵器の影響化のもとに見られる肩部に弱い稜をもち口縁部は内傾、直立するものと半球形状の体部と口唇部が短く直立し尖る形態が認められる。１７号は碗形土器、壺形土器などの出土も見られ、遺物の特徴から本遺跡初頭の遺構である。土坑では７号が出土した坏の特徴から同期のものと考えられる。

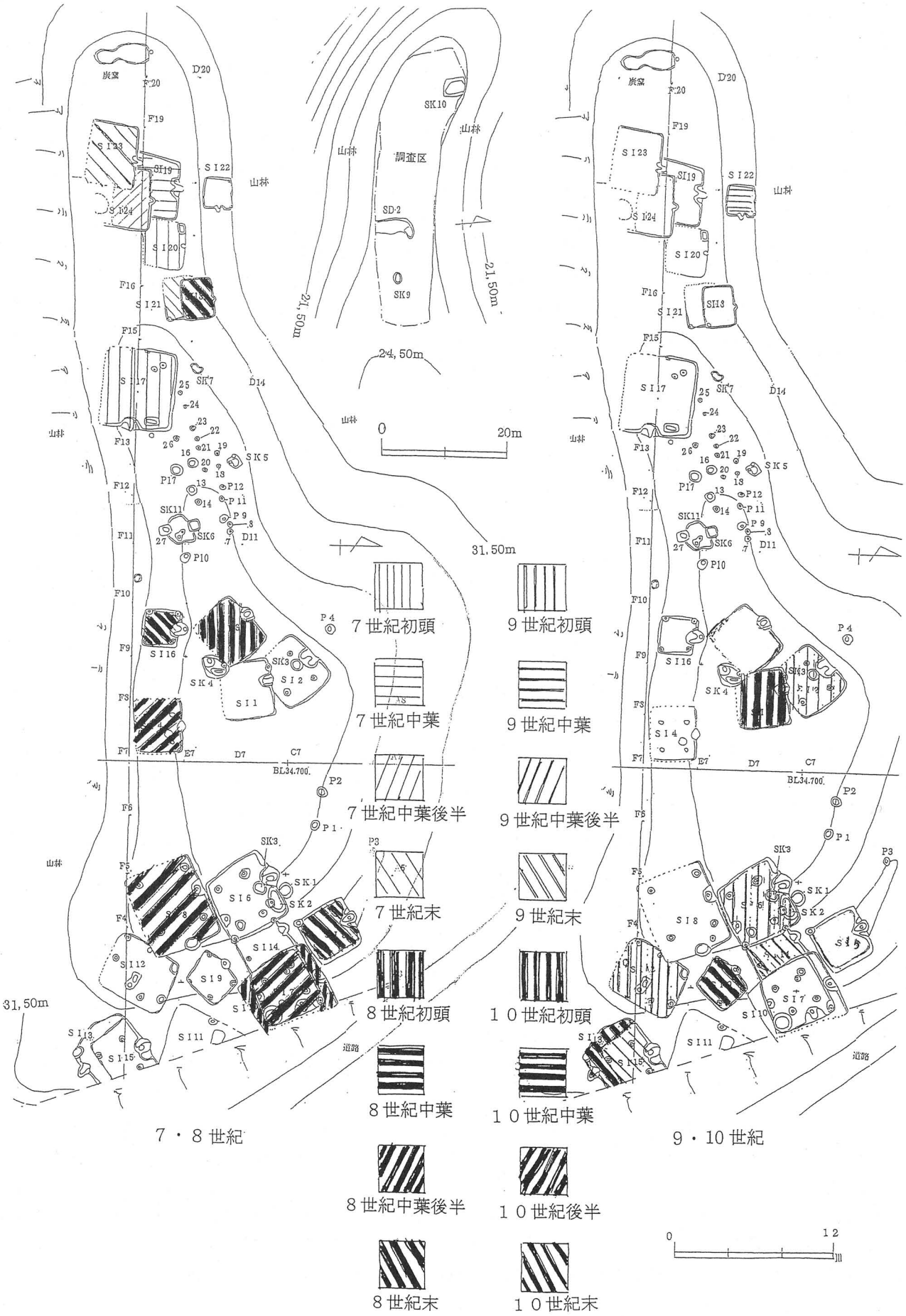
古墳時代鬼高Ⅲ期後半に位置付けられるものは１０、１９号住居跡でプランは複合し不明に近いがやや大形、方形状と推察され共に北側に竈を持つが１０号では円形で炉状であるが、袖部は砂質粘土を用いる。(上部欠失の為か) ２３号住居跡では「U」字状で長目の袖が付設されている。１９号住居跡は床面から出土した長胴形であるが胴部の最大径は上位に置く甑、竈周辺出土の坏などから考えられる。古式の須恵器坏が見られた。１０号では内部にヘラ磨きを持つ碗形土器、摘みが扁平な蓋が見らいずれも土師器。２１号も同様か。

真間期Ⅰ期には３、１２、２４号が推察される。プランは方形状やや小型、壁高は浅い。遺物も少なく断定は出来ない。

真間Ⅱ期に位置付けられるものは８、２４号住居跡。プランは方形状、本遺跡では大形の部類に入る。２４号は南側に粘土採掘の穴があり傾斜面との関係で全掘出来ず一部不明。竈は北壁に付設し「U」字状の袖を持つ２４号と炉状の竈を持つ８号がある。24号は外部に「U」字状に張り出す。８号は壁高が皆無に近く確認面が床面であり遺存状態は悪い。焚口部に砂質粘土を持ち竈より炉状の感じを受けるが上部欠失の為不明。類例は以降の住居跡に見られる。主軸は西側に寄る。

遺物は少なく２４号からは甕形土器底部、土製支脚、８号では石製の紡錘車が出土している。

真間Ⅲ期前半に位置付けられるものは２、４、７号住居跡でプランは方形状７号のみ壁高は４０cm前後と深い。２、４号は浅く確認面で床面の一部が認められた。柱穴が認められている。竈は砂質粘土で焚口部を高くし炉状の感じの２号、東側に付設し住居跡内部に付設し深く掘り込む７号、浅く僅かに砂質粘土を認める４号。須恵器坏の特徴は、７号では体部の器肉は厚め、２号では薄く開き底部には回転ヘラ切り痕を残す。甕形土器口唇部は上方へ摘み出し、長胴形。主脚は細く貧弱。


7世紀初頭
7世紀中葉
7世紀中葉後半
7世紀末
8世紀初頭
8世紀中葉
8世紀中葉後半
8世紀末
9世紀初頭
9世紀中葉
9世紀中葉後半
9世紀末
10世紀初頭
10世紀中葉
10世紀後半
10世紀末
7・8世紀
9・10世紀
調査区
山林
道路
0
20m
31,50m
24,50m
21,50m
BL34.700

第35図　住居跡変遷図

真間Ⅲ期後半の位置付けられる１、６、１８号住居跡ともプランは方形状でやや北寄りに主軸を置く。６は壁高２０cm程を測るが１は南側では欠失、北側では１０cm前後と低い。６号では柱穴を認め、竈は「U」字状に袖を付設。遺物は２号から口唇部を長く摘み出す小型甕、体部が強く外反する須恵器坏が見られる。１号からは土製の紡錘車、１８号では高台の短い坏も見られこれはやや古手が出土している。

真間Ⅲ期末に位置付けられる５、１６号住居跡は、一辺３～４ｍの小型のプランで掘り込みは２０cm～５０cmと壁高は高く前述の１、６号より主軸は北に寄り、１６号はほぼ北。床面はいずれも粘土層になり明確な硬化面は認められなかった。５号から叩き目を持つ甕、底部ヘラ削りの坏が見られたが竈の補強材として使用されていた。１６号では四隅に柱穴が見られ、竈の煙道部を残す遺存状態の良い遺構であった。遺物は、底部ヘラ切り、体部の器肉の薄い須恵器坏と高台付の皿？が見られ、大型の甕形土器口縁部が出土している。

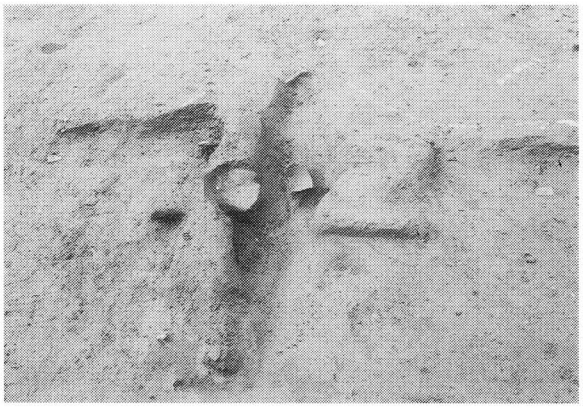
国分Ⅰ期に位置付けられる１３、１４号住居跡は、小型で方形プラン、主軸は西寄り、竈は北壁側と東南側と反対側に付設し小型化している。遺物は土師器が大半、底部に回転糸切り痕、台坏が共に出土している共通性がある。１４号からは内面黒色にヘラ磨きの皿と三角形状の甑と思われる須恵質土器が見られた。

国分Ⅱ期、本遺跡の終末期のものは１３、２２号住居跡が考えられる。これは西と東に分かれているが１３号は東南側に竈を付設、大半は地床炉的であった。遺構は不正形、道路により削平されプランは不明瞭。２２号は西側、北の斜面部直近に位置し、ゆるく傾斜する変則的な場所に見られ、床面は粘土質であり東側に竈を付設する小型の住居跡である。遺物は、１３号では土師器碗形土器で底部は回転糸切り痕を残す。台付も見られる。口唇部は水平に近く開く。２２号では安定した平底の須恵器坏で体部、底部とも器肉は薄い。本遺跡唯一の羽口が出土も「ノロ」が付着。また陶器の小型壺の小片が出土、肩部に灰釉が見られた。

以上の諸点から本調査区内、言い換えれば馬背状独立丘の範囲では約四世紀に渡り、常時２軒前後の住居、集落が営まれていたと考えられる。古事記、日本書紀、風土記が編纂された当時の国衙や郡衙から離れた地域、末端の単位「集落」生活の一部を垣間見る遺跡と考えられるが、周辺には、現在まで近似するような遺跡は見られない。

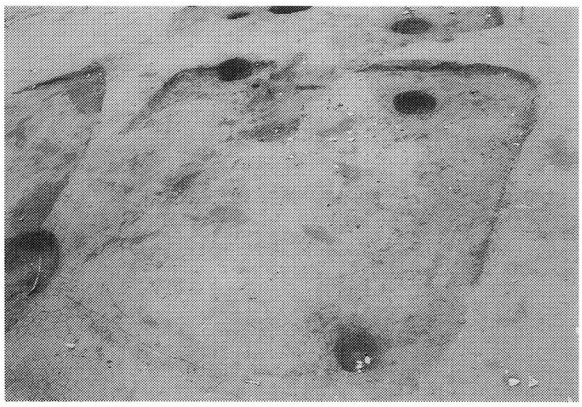
本遺跡の立地はやや隔絶された感じの馬背状台地であるが、出土遺物から特別な性格を持つ人々集落とは考えにくい。出土している土錘が物語るように山や川、海、そして農耕に生きる糧を求めて生活した末端の人々の日常生活を鉄器の少なさや羽口の出土などから、つつましい自給自足の生活が想像され、竪穴住居跡から土間状へと変る過程と思われる。（了）

ＰＬ１　調査区全景　右上西側調査区



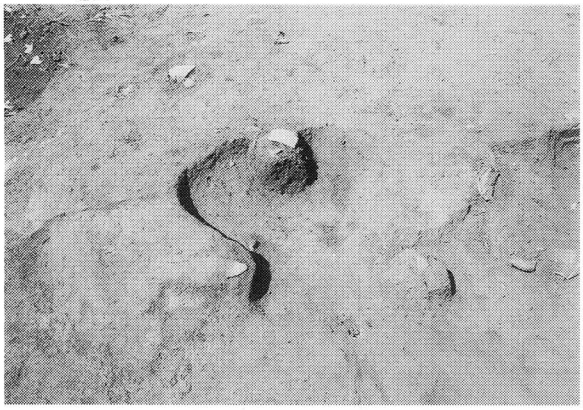
1号住居跡竈

3号住居跡完掘



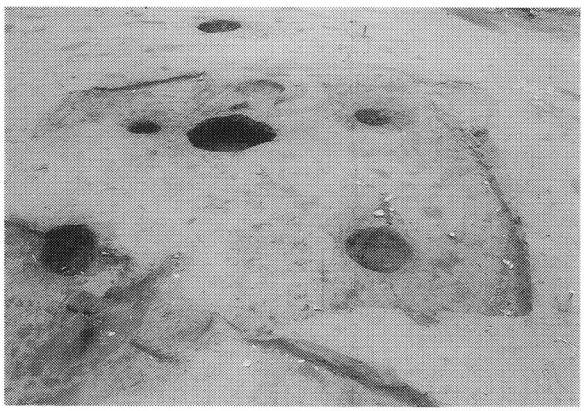
1号住居跡完掘

1・2・3号住居跡完掘

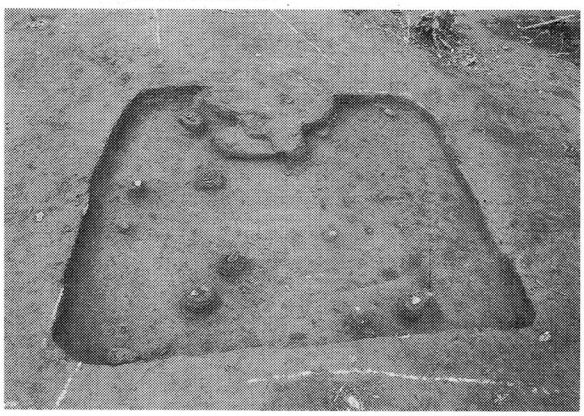


2号住居跡竈

4号住居跡出土遺物

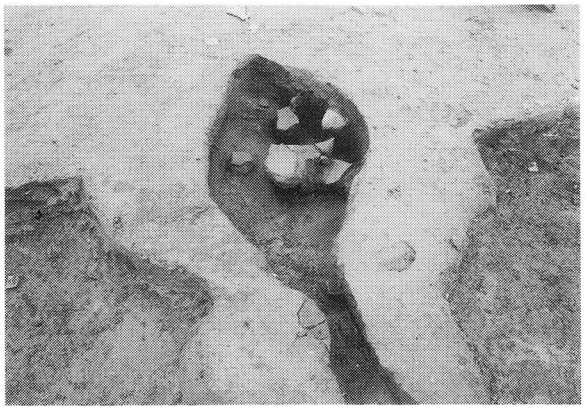


2号住居跡完掘



5号住居跡出土遺物

ＰＬ２　１号住居跡竈・１号住居跡完掘・２号住居跡竈・２号住居跡完掘・３号住居跡完掘・１・２・３号住居跡完掘・４号住居跡出土遺物・５号住居跡出土遺物

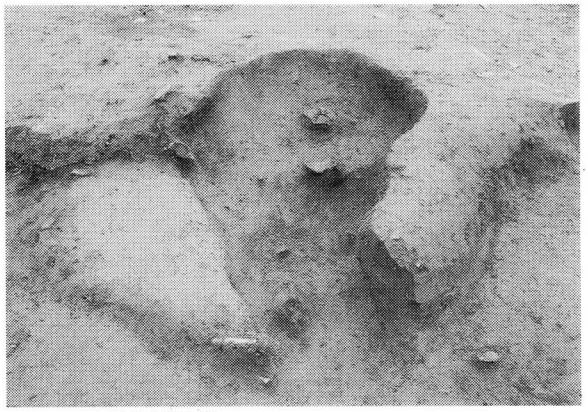


5号住居跡竈

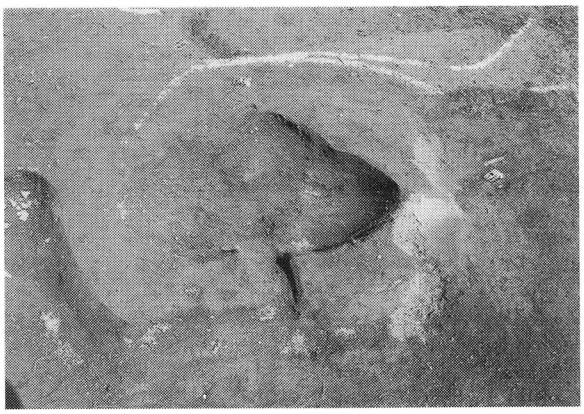
7号住居跡竈

5・6・7号住居跡完掘

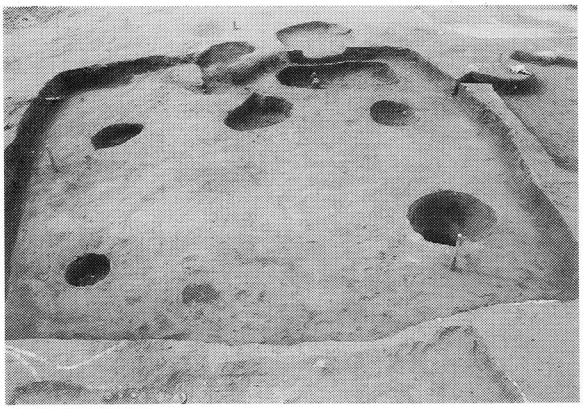
7号住居跡完掘



6号住居跡竈



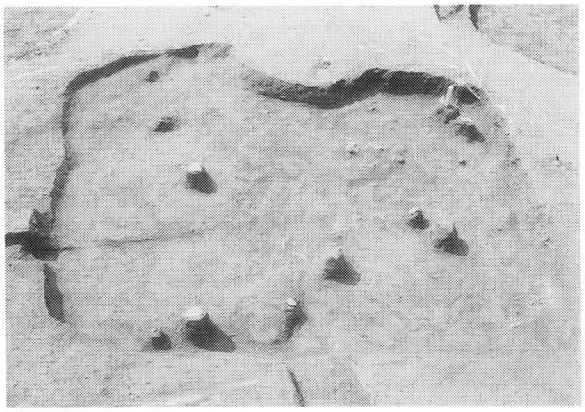
8号住居跡竈



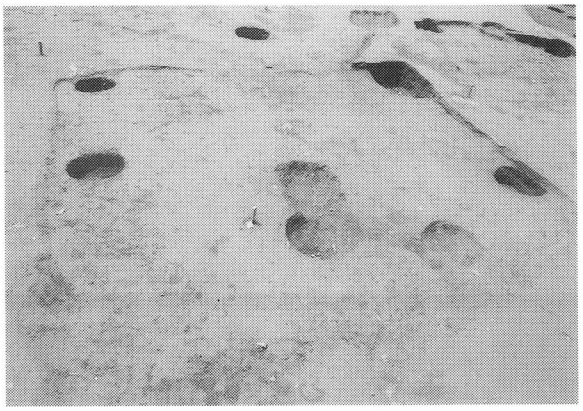
6号住居跡完掘

8号住居跡完掘

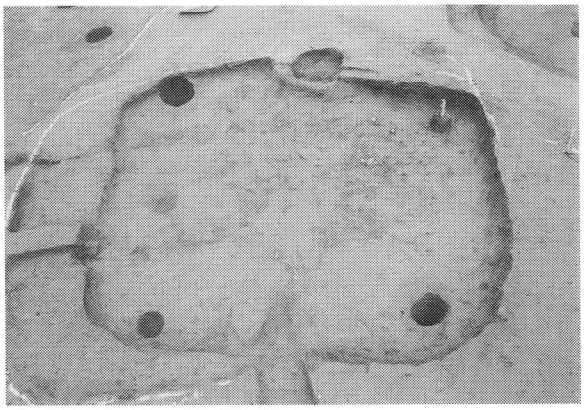
ＰＬ３　５号住居跡竈・５・６・７号住居跡完掘・６号住居跡竈・６号住居跡完掘・７号住居跡竈・７号住居跡完掘・８号住居跡竈・８号住居跡完掘



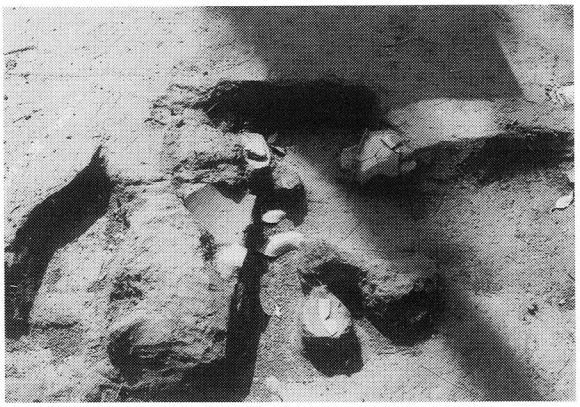
9 号住居跡出土遺物



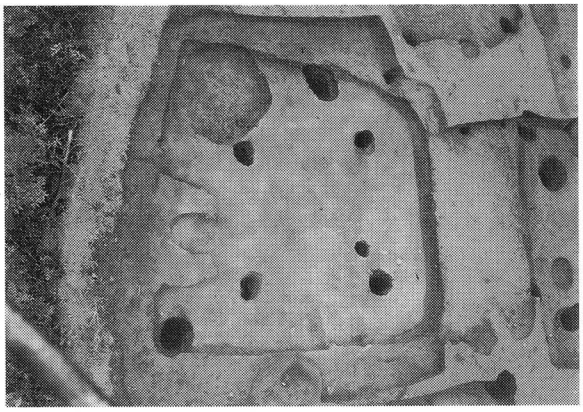
12 号住居跡完掘



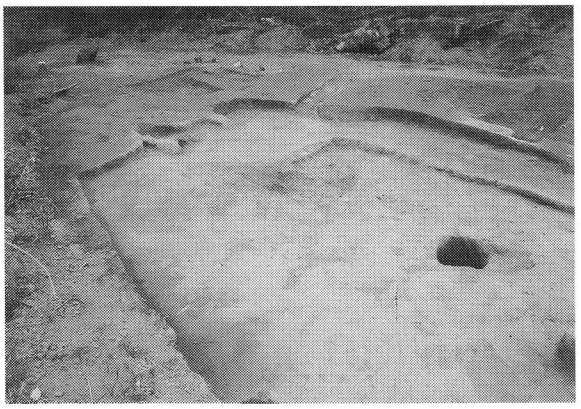
9 号住居跡完掘



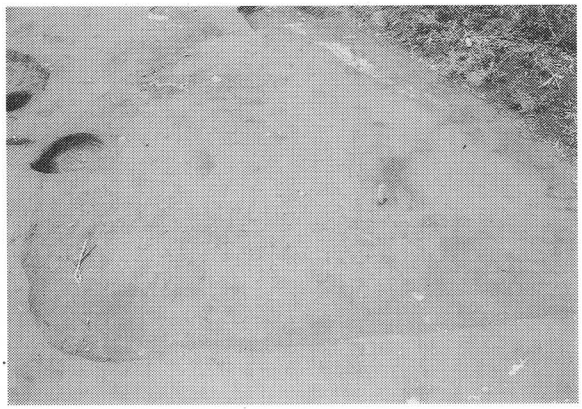
13 号住居跡竈



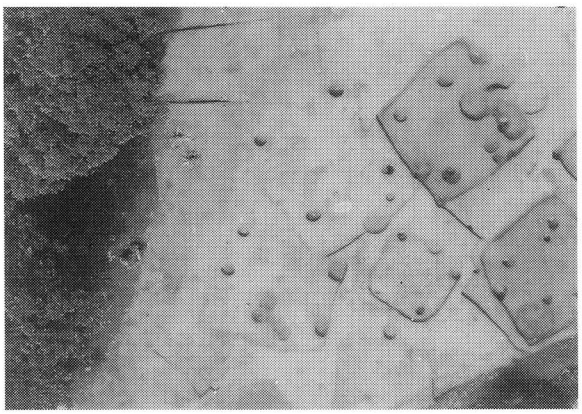
10 号住居跡完掘



13 号住居跡完掘

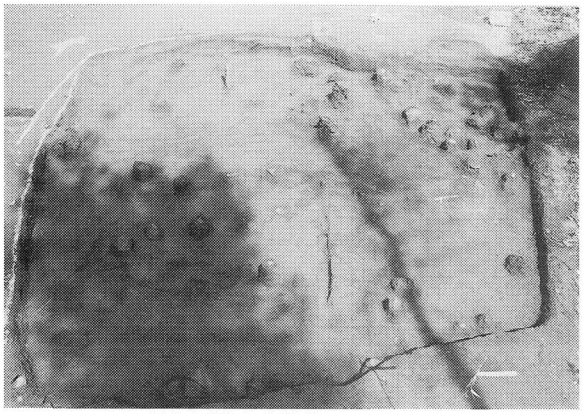


11 号住居跡完掘

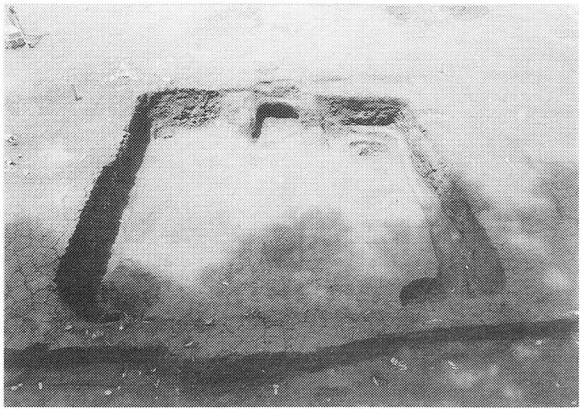


6・14・7・9号住居跡完掘

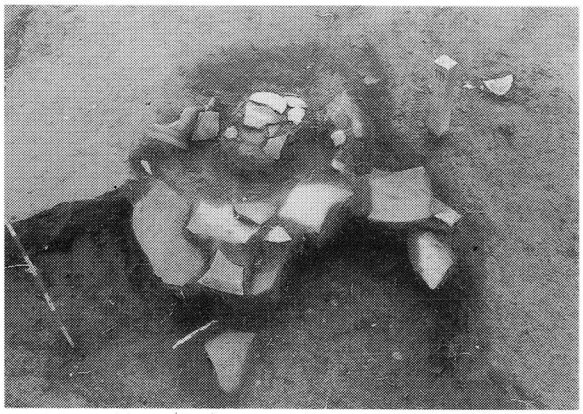
ＰＬ４　９号住居跡出土遺物・９号住居跡完掘・10号住居跡完掘・11号住居跡完掘・12号住居跡完掘・13号住居跡竈・６・14・７・９号住居跡完掘



13・15 号住居跡出土遺物

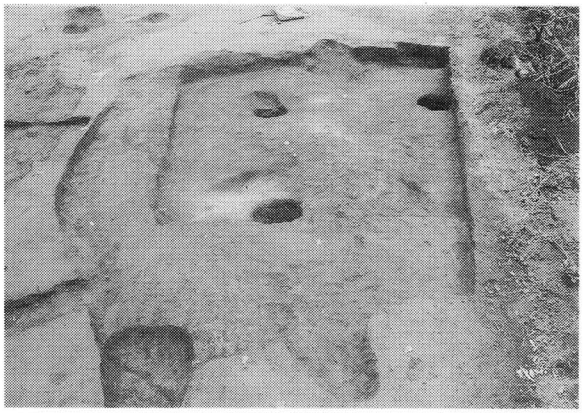


16 号住居跡完掘



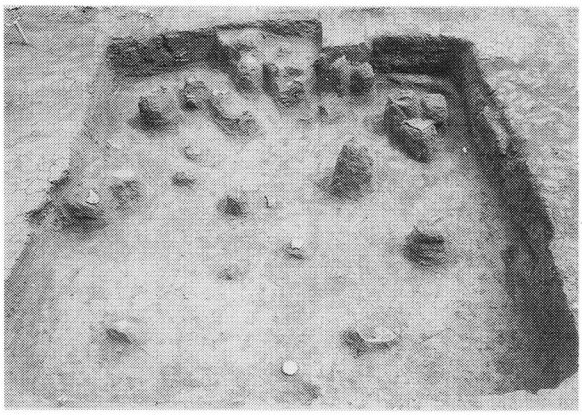
14 号住居跡竈

17 号住居跡出土遺物

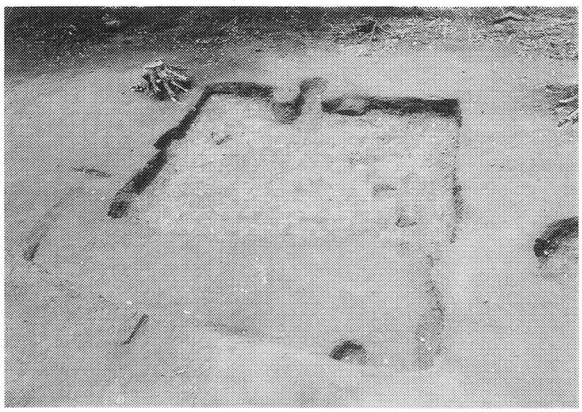


15 号住居跡完掘

17 号住居跡完掘



16 号住居跡出土遺物

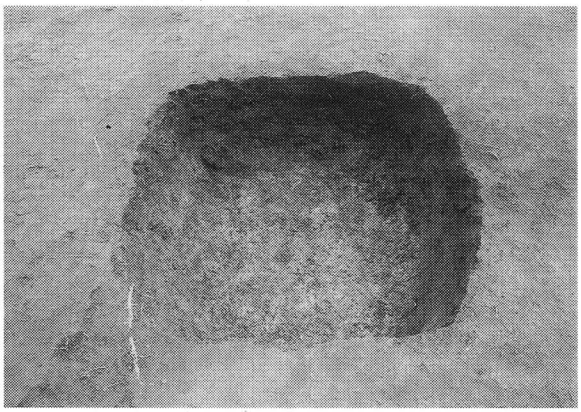


18 号住居跡完掘

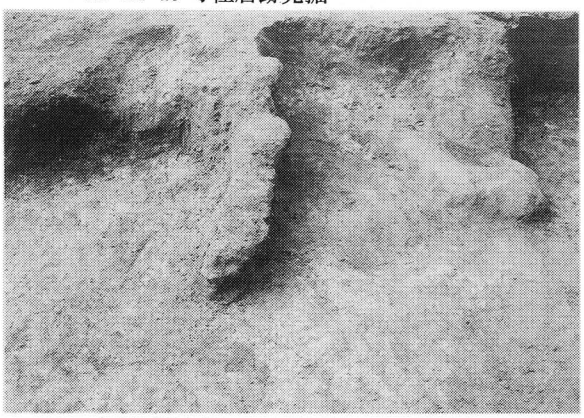
ＰＬ５　13・15号住居跡出土遺物・14号住居跡竈・15号住居跡完掘・16号住居跡出土遺物・16号住居跡完掘・17号住居跡出土遺物・17号住居跡完掘・18号住居跡完掘

19 号住居跡出土遺物

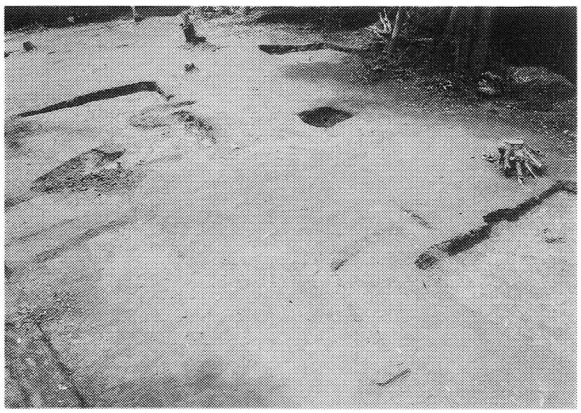
23・24・19 号住居跡完掘



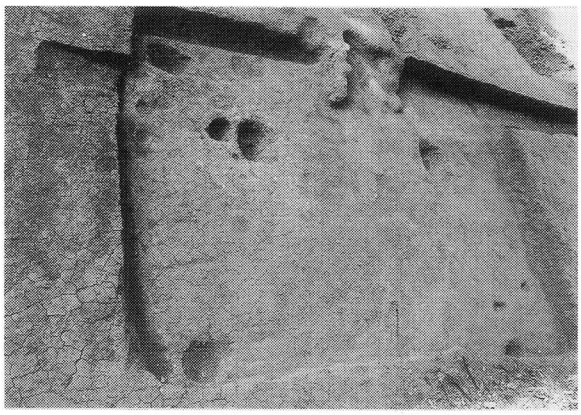
20 号住居跡貯蔵穴



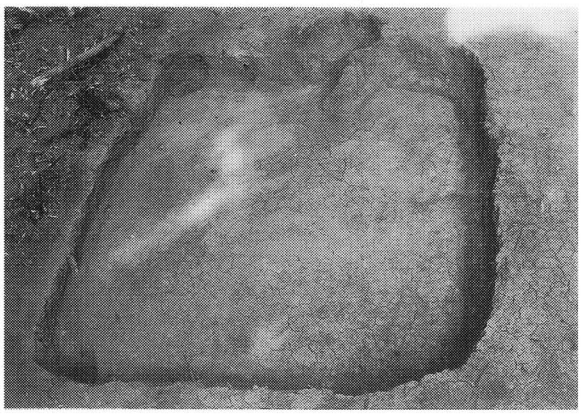
23 号住居跡竈



18・19・20・21 号住居跡完掘



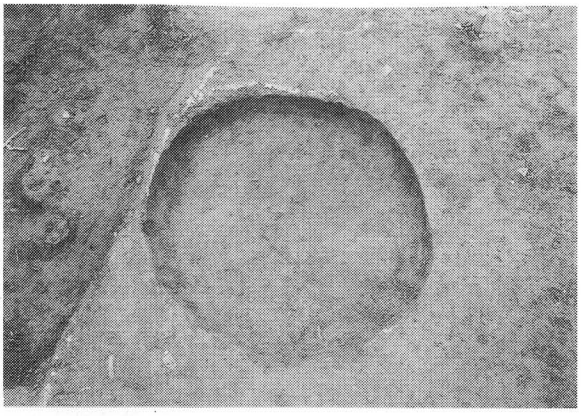
23 号住居跡完掘



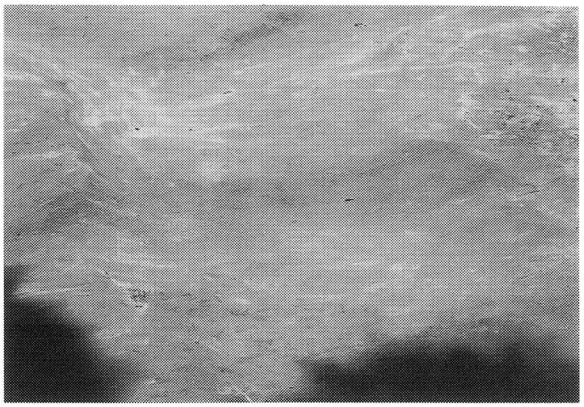
22 号住居跡完掘

24・19 号住居跡完掘

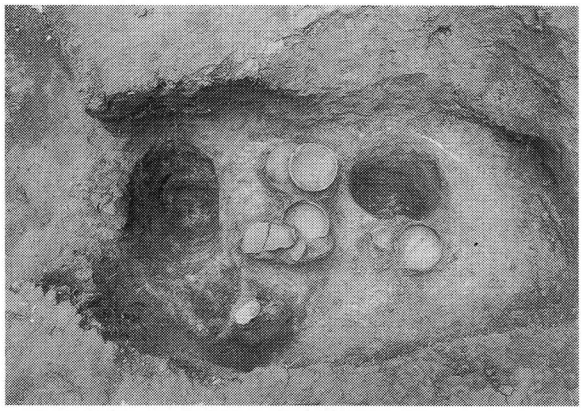
ＰＬ６　19号住居跡出土遺物・20号住居跡貯蔵穴・18・19・20・21号住居跡・22号住居跡完掘・23・24・19号住居跡完掘・23号住居跡竈・23号住居跡完掘・24・19号住居跡完掘



1号土坑完掘



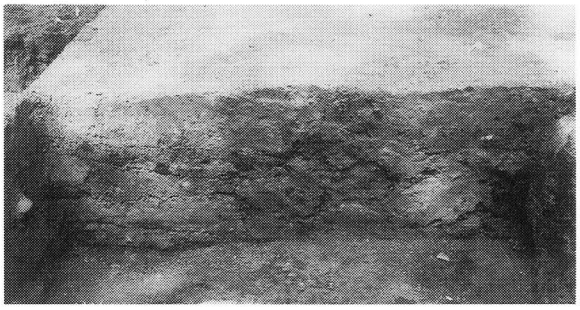
2号溝完掘



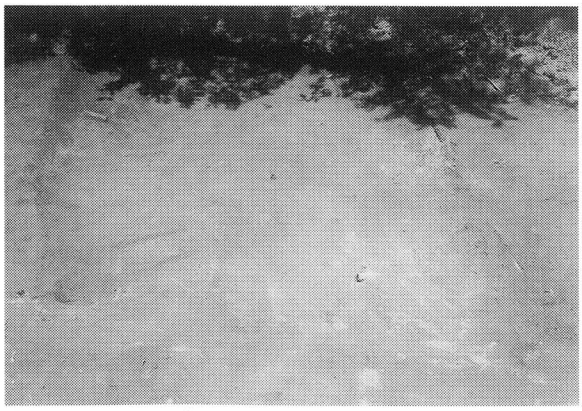
7号土坑出土遺物

ピット群

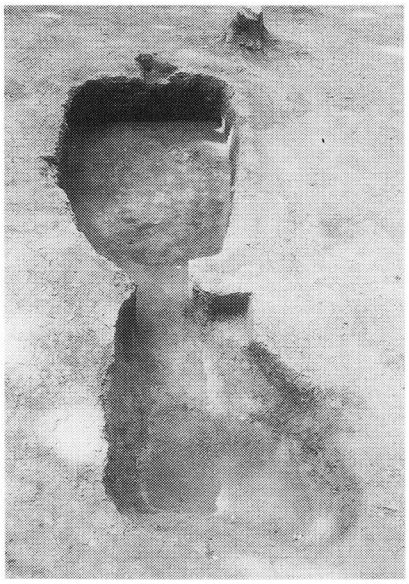
10号土坑土層



炭窯土層

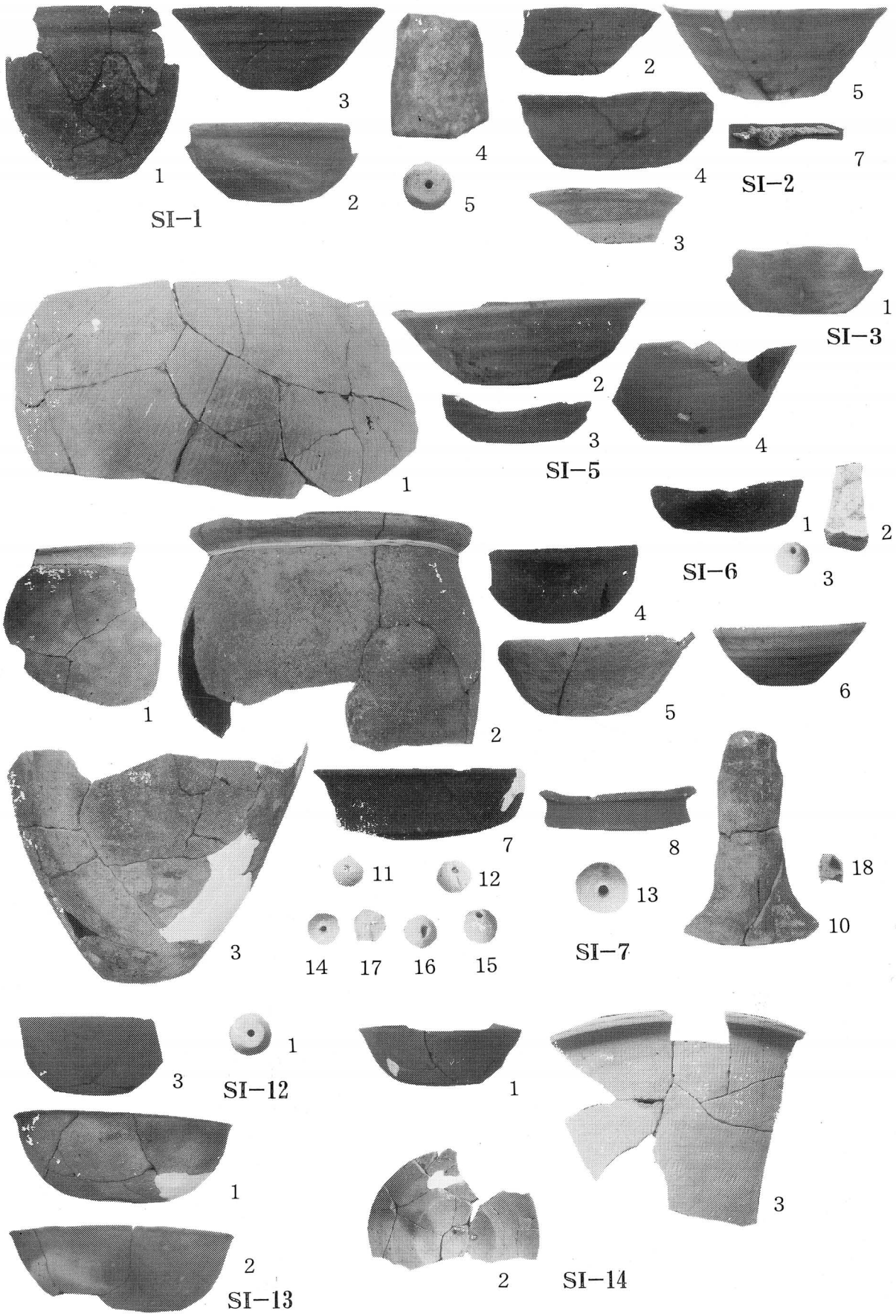


10号土坑完掘

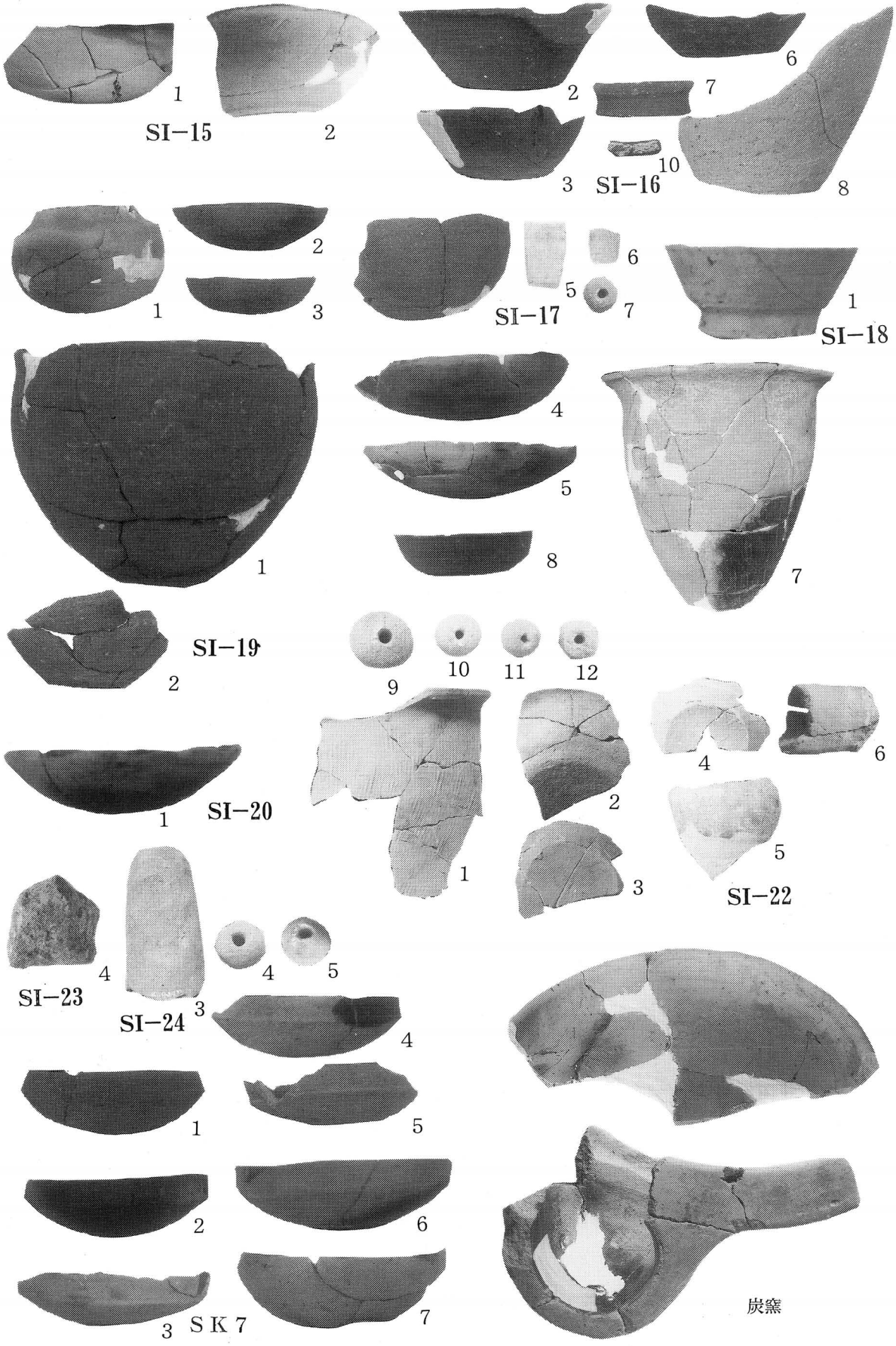


同完掘

ＰＬ７　１号土坑完掘・７号土坑出土遺物・10号土坑土層、10号土坑完掘・２号溝完掘・ビット群・炭窯土層　同完掘



PL8　SI1・SI2・SI3・SI5・SI6・SI7・SI12・SI13・SI14出土遺物



PL9　SI15・SI16・SI17・SI18・SI19・SI20・SI22・SI23・SI24・SK7・炭窯出土遺物

行方市文化財調査報告 第６集

茨城県行方市
岩 ノ 入 遺 跡
発掘調査報告書

２００８年１０月

編集 鹿 行 文 化 研 究 所
汀 安衛
鹿嶋市青塚718-1
発行 行 方 市 教 育 委 員 会
行 方 市 遺 跡 調 査 会
印刷 (株)さんゆう社印刷
行方市玉造甲2641-6